

---

# とあるのんきな炎女王（フレイムクイーン）

ロンパニール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるのんきな炎女王  
フレイムクイーン

### 【Nコード】

N2680V

### 【作者名】

ロンパニール

### 【あらすじ】

不良たちに絡まれていた女性を助けた上条当麻。

その女性はなんと、レベル5の第6位『炎女王』フレイムクイーンだった。

女性の名前は静奈しずな 涼音すずね

非常におっとりとしている彼女は、レベル5たちと友達で一方通行の幼馴染で同じ学校。

闇の仕事をしながら、普通の高校生活を送るレベル5たち、麦野がキレまくったり、垣根がいじられたり、一方通行が恋をしたり・・・  
レベル5たちのドタバタ学校生活！

似たような題のものがあるみたいですが  
これはまったく別のものです。

ナンパ？

ここは学園都市。

学生たちが毎日能力開発に取り組んでいる町だ。

もちろん、能力には限界がある。

自分の能力がこの程度だと決めつけてしまい、不良になってしまう者もいる。

そんな不良たちに、ある女性が絡まれていた。

???「あらあら、これはナンパかしら？」

不良たちに囲まれているのに女性は微笑んでいる。

不良「はっ、分かったなら俺らについて来いよ」

不良「抵抗したら・・・分かってるな？」

周りを見て見ぬふりをする。

しかし、そんな中にある少年が助けに入る。

1：誰かしら？（前書き）

すみません、レベル6じゃなくて第6位でした。

# 1：誰かしら？

????「え〜と・・・あなたは誰かしら？」

????「・・・」

不良「・・・」

女性の言葉にみんな黙る。

しかし、すぐに彼女を助けようとした男が叫び声を上げる。

????「アンタ！何やってんだ！せつかく知り合いのふりして助けようとしたのに！」

????「あらあら〜、そうだったの〜。じゃあ、もう一回しましよ  
うか〜」

????「もう遅い！不幸だー！！」

そう叫ぶ男は上条当麻。

右手に異能の力なら神の力でも消してしまう能力がある。

女性はニコニコとしたままだ。

????「あらあら、そうなの〜？ごめんなさいね〜」

当麻「うっ・・・」

不良「おい、テメー、覚悟はできてんだろっな？」

当麻「うっ！！」

恐る恐る後ろを見ると怒っている不良たちがこちらをみていた。  
またもや当麻は「不幸だ」とつぶやく。

????「そういえば、自己紹介がまだだったわね〜。

私の名前は静奈しずな 涼音すずねっていうの〜

よろしく〜」

当麻「アンタそんなことしてる場合じゃないだろ!? 逃げろ!」

涼音「大丈夫よ〜、私、能力者だから」

当麻「いくら能力者でもこんな大勢の不良相手に・・・!!」

不良「死ねー!」

涼音「大丈夫だから」

不良が襲い掛かる。

しかし、次の瞬間、涼音、当麻と不良たちの間に炎が遮るように現れる。

いきなりの出来事にみんなは目を丸くする。

不良「なっ・・・!! なんだよこれ!!」

不良「おい! こいつまさか・・・!!」

不良「ひいひいひい!」

なぜか不良たちが大慌てで逃げていく。

訳が分からない当麻はその後ろ姿を見る。

当麻「あれ・・・?? なんで逃げるんだ・・・? てかさっきの炎・・・」

涼音「分かった? 私はレベル5の第6なのよ」

当麻「第6位!」

ニコニコした笑顔でサラツという女性を当麻はあり得ないものを見るような目でみる。

当麻「え? まじ・・・?」

涼音「マジよ〜、驚いたかしら〜?」

当麻「上条さんはすっごく驚きました。てか、なんでこんな夜遅くに?」

涼音「それはね〜、転校して引越したんだけど迷っちゃったのよね〜」

当麻「えっ？大丈夫なのか？」

涼音「大丈夫よ〜、だってこの道をまっすぐ行けば家だから」

当麻「・・・つまりアンタは行く途中に不良に絡まれたのか・・・」

涼音「それじゃあ、帰るわね〜」

当麻「あ・・・ああ・・・」

笑顔で帰っていく涼音。

その姿をみた当麻は

当麻（ビリビリとはえらい違いだな・・・）

などと思っていた。

そのまま家に帰っていく。



## 2：休日のレベル5たち

涼音「おはよう〜」

一方通行「あア、涼音か」

次の日、午前8時から涼音は友達と待ち合わせをしていた。その友達がすごい人ばかりだ。彼女自身すごいのだが、今いる友達は第1位と第2位、第4位、第7位なのだ。

周りの人たちはレベル5の集まりにざわついている。

麦野「ちよつと、アンタ毎回来るの遅いわよ」

涼音「ごめんなさいね〜、実は昨日家に帰るのが遅くなって〜」

垣根「ああ、一方通行と同じ高校か。しかも同じクラスだろ？」

涼音「そうよ〜」

削板「幼馴染で同じクラスか。まるで漫画のようだな」

一方通行「てか、今日は何すんだ？」

涼音「やっぱりゲーセンでしょ〜」

垣根「いやいや、合コンだろ」

麦野「マッサージがいい」

一方通行「コーヒー飲みてエ」

削板「どこでもいいぞ」

見事に意見がバラバラのレベル5たち。

結局、コーヒーと合コンを抜き、

マッサージ、ゲーセンという順番に行くことになった。

麦野「ここよ。人気のマツサージ店は」

涼音「今思っただけけど、麦野はここに来たことあるの？  
私は一回もマツサージ店来たことないんだけど」

麦野「まあ、週に1、2回は行ってるわ。

でも、ここに来るのは初めてよ」

一方通行「まさか俺らもすんのか？」

垣根「外で待っとくぜ」

麦野「何言ってるの。するに決まってるでしょ」

削板「何事も挑戦だぞ」

涼音「あらあら、いいこと言っわね」

騒ぐ一方通行と垣根を無理やりマツサージ店に連れて行く。

・・・

麦野「あゝ、気持ちいい」

涼音「本当ね、とっっても気持ちいいわ」

気持ちよさそうな顔をしながらマツサージを受ける女子。

男子は隣の部屋で悲鳴を上げている。

なぜなら今は激痛足つぽマツサージを受けているころだからだ。  
よそ見をしているうちにメニューにいれたのだ。

麦野「男子の叫び声の子守唄に聞こえてきた」

涼音「本当ね。不健康な証拠だわ」

気にすることもなくその声を聞く女子。

隣の部屋では・・・

垣根「死ぬ！死ぬ~~~~！！」

一方通行「イデデデッ！！」

削板「こ・・・根性・・・だ！！」

叫ぶ二人と必死に根性で我慢する削板。

垣根「くそ〜！麦野のやつこんなメニュー入れやがって・・・！！  
いだー！！」

一方通行「後で殺す・・・！！アデデッ！！」

削板「根性が足りないな二人とも！」

垣根「でも、この中で一番痛い的一方通行だよな」

削板「不健康だからな」

そんなことを言っているうちに足つばは終わり。

普通のマッサージに入る。

一方通行「あ〜・・・気持ちいいな」

垣根「オッサンかよ」

一方通行「あア！？殺されたいんですかア？」

削板「そろそろ時間だぞ」

マッサージが終わり、外に出ると笑っている麦野がいた。

麦野「どうだった〜？」（笑）

垣根「殺す！！」

一方通行「そこに居ろ！！」

涼音「あらあら〜、喧嘩は駄目よ〜次はゲーセンね〜」

そっぴい一方通行の腕をつかみ進む。

しかし、一方通行は顔を赤くする。

一方通行（おいおいっ！！なんか腕に当たってんだけどオ！！）  
涼音・一方通行以外（当たってるな・・・）

そんな状態のままゲーセンに行く。

垣根「死ねええええっ！！」

そついい、画面にいるゾンビを打ちまくる。  
その横でみんなは面白そうにみていた。

麦野「ゲーム程度に本気にならなくても・・・」

削板「おっ、ここにカーレースがあるぞ！」

麦野「私それやるー」

そついい、お金を入れてやり始める。

最初は普通だったが後から・・・

麦野「オラオラッ！！ぶっ飛ばすぞゴラァッ！！！！」

すっかり本気になり口調が変わる麦野。

みんなは恐ろしいと思いつながら見ている。

一方通行（とうとう本性現したぞ）

涼音（あらあら、自分で言ってたのにね）

削板（こ・・・根性・・・？）

垣根（こえ〜）

それぞれそう思いながら麦野をほって違うゲームを始める。  
結局、その日は9時になるまでゲーセンにいた。

### 3：学校までの道

涼音は一方通行の部屋の前にいた。

涼音「まだかしら〜？」

一方通行「ちよつと待て」

制服に着替えて慌てて出てくる。

涼音「あなたは本当に起きるの苦手なのね〜。

もう遅刻確定よ〜？」

一方通行「マジかよ！」

時計を見ると8時45分だ。

もう無理だと思った一方通行は走らずに歩いていく。

涼音「あらあら〜、あなたの能力を使えばすぐにつくんじゃないの  
〜？」

一方通行「どうせ遅刻だからいいんだよ」

涼音「そんなのだから頭よくても通信簿はダメなのよ〜？」

一方通行「何で知ってんだよ！」

涼音「この前チラツとつ見たの〜」

横でギヤーギヤー一方通行が騒いでも涼音は笑顔で無視をする。

そんな状態で歩いていくと、いきなり不良たちに囲まれた。

不良「よお、久しぶりだな・・・テメーを倒せば俺らが一位だ！」

一方通行「ハア〜、またかよオ」

涼音「あらあら、お友達かしら〜？」

一方通行「ンなわけねエだろ！」

涼音「だって久しぶりっていったじゃない〜」

一方通行「それはこの前こいつらと喧嘩したからだ！」

不良「ああ？誰だこの女。・・・」長点上ながてんじょうき機学園きがくえんのやつか」

不良「もしかしてテメーみてえな悪魔なやつあつの幼馴染か？」

不良「はははっ！お前に幼馴染なんかいたんだな！」

あざ笑う不良たち。

一方通行はヤバイと思ひ涼音を見る。

涼音は笑っているが、赤い髪の毛は燃えるように逆立っている。

その姿をみた不良たちは笑うのをやめ、涼音をみる。

不良「おいおい・・・なんだよそれお前、炎系の能力者か？」

だったら残念だったな！俺らは全員レベル2以上なんだよ！！」

それぞれ能力をだし、脅す。

しかし、二人とも脅えたりしない。

不良「お前、まさか本当にそいつの幼馴染か？」

悲しいな〜、テメーの幼馴染は悪魔の子だぜ！！」

不良「そうにちがいないえ！！」

またもや笑い、二人に襲い掛かる。

しかし、涼音は逃げない。

涼音「そう〜、私の大事な幼馴染にそんなこと言うのね〜・・・消えて」

ポアッ！！

不良「うわあっ！なんだよこれ！」  
不良「熱い！熱い！！」

いきなり一方通行と涼音周りを炎が囲む。

襲い掛かってきた不良たちは炎に触れてしまい、あまりの熱さに叫び声を上げる。

涼音は不良たちを一旦見ると、そのまま何も無かったかのように歩き始める。

後に続いて一方通行も歩く。

不良たちが喚いているが無視をする。

一方通行（・・・涼音は友達を大事にするからなあ・・・）

そんなことを思いながら学校に向かう。

教室に入った途端、先生に説教をされた。



#### 4：一方通行の過去 自分も同じだから

少年は最初は普通の子だった。

普通に遊び、笑い、生きていた。

しかし、大きくなるにつれて普通のことが出来なくなっていた。能力が強くなっていたからだ。

ある日、いじめっ子達が少年をいじめようとした。

何も言わない少年をみていじめっ子の一人は殴ろうとした。

しかし、いじめっ子の手はあり得ない方向に折れ曲がった。

それを見たいじめっ子たちは脅えた。

しかし、また一人、少年に体当たりをしようとした。

だが、それも出来なかった。

吹き飛ばされたからだ。

いじめっ子たちは悲鳴を上げて帰っていく。

「化け物」

と少年に言いながら。

その言葉に少年は傷ついた。

しばらく呆然としてしていると、いじめっ子たちが親を連れて戻ってきた。

手を折られたこの親は少年を殴ろうとした。

しかし、その親も子と同じように手が曲がった。

親たちも脅え、ついには警察を呼んだ。

しかし、警察も同じように怪我をしていく。

何もしていないのに人が傷ついていく、「化け物」と呼ばれる。

幼い子供にも、自分は普通じゃないと分かった。そして、とうとう軍隊も動き出した。銃を向けられたりしたが、すべて跳ね返り、また人が傷ついた。

戦車も、ミサイルも、銃も出された。

少年はドンドン心を閉ざしていく。

見つからないように建物の隙間に隠れる。

もう、街には軍隊以外誰も居なかった。

みんな、少年を「化け物」と認識し、逃げたのだ。

少年は一人寂しく、ずっと逃げ続けた。

食わず、休まず、寝ずに少年は逃げ続けた。

とうとう体に限界が来て建物の中で座り込む。

軍隊は今頃自分を探しているだろうと、思いながら壁にもたれる。

自分はこのまま「化け物」と呼ばれながらここで死ぬのだと思い、目を閉じる。

その時、足音が聞こえてきた。

少年、一方通行は目を開けて誰が来るのか見る。

表れたのは一人の、一方通行と同じくらいの少女だった。

少女は真っ赤な、炎みたいな目と髪をしていた。

軍隊ではない、人がいることに驚く。

そして、この少女も自分を捕まえようとしているのだと思い、少女を睨む。

少女は近づいてくる。

一方通行「……オレを捕まえに来たんだろ。化け物を」

睨みながら言う。

しかし、少女は首を横に振る。

少女「違うよ、助けに来たの。ほら」

そついい、背負っていたリュックをおろし、中から水と食べ物を出す。

あり得ないことに一方通行は驚く。

一方通行「・・・なんでオレを助けるんだ？」

聞くと、少女は悲しそうな顔をして笑う。

少女「私も、アナタと同じ「化け物」だから」

一方通行「オレと・・・!!?」

少女「そう、私、「化け物」らしいの・・・見ててね」

そついい、自分の腕に持ってきたナイフを刺す。

いきなりの行動に一方通行は驚く。

血が溢れてきたが、10秒ぐらいで傷口が炎に覆われる。炎が消えると、傷は治っていた。

少女「ね? 「化け物」でしょ?」

再び悲しそうに笑う。

一方通行はその表情をみて少女は自分と同じなんだとわかる。証拠を見せてもらった後、少女に言われて食べ物を食べる。

一方通行「お前はどうすんだ? このままだとオレ達は殺されるぜ」  
少女「うん、だから、味方してくれる人が外で待ってるの。」

学園都市っていうところなら私たちと同じ、能力を持ってる人がい

るんだって。

そこに連れて行ってもらえるんだよ。

行こうとしたときにアナタのことを知ったの。

だから、一緒にいこ」

手を伸ばす。

一方通行は少し笑うとその手を取り、立つ。

一方通行「オレは・・・いけねエな、自分の名前忘れちゃった・・・

」

少女「そうなの・・・私は静奈 涼音！よろしくね！」

そっいいい、涼音はにっこりと笑う。

5…学校では・・・(前書き)

御坂と麦野、第5以外は一方通行と一緒に学校の設定です。

## 5：学校では・・・

先生「こら、一方通行。授業中に寝るな」

一方通行「いてエ」

ポカッと殴られ、目が覚める。

学校に着き、説教された後、授業中に一方通行は寝ていたのだ。悲しい過去の夢を見ていたらしい。

ちなみに、なぜ反射をしていないかということ、涼音が一方通行が能力を使えないようにできている腕輪を作り、つけているからだ。

涼音はああ見えて天才なのだ。

涼音「あらあら、私は起こしたのよ？」

だけど起きなかったの？」

一方通行「どうせオマエの起こし方は少しつつくだけたる？」

涼音「せいかい」

先生「とりあえず寝るんじゃないぞ。じゃあ、次行くぞ」

黒板に数字を書き始める。

今は数学の時間らしい。

つまり4時間目だ。

一方通行は2時間目から寝ていたので国語が出ている。

国語をしまい、数学を出す。

一方通行「ファ、早くおわんねエかな・・・」

涼音「居眠りは駄目よ、あと10分だから頑張りましょう」

あつ、あと、3時間目理科だったんだけど」

アナタが寝てるのを見て怒ってわよ」

一方通行「どうでもイイ」

涼音「そんなのだから通信簿最悪なのよ〜？」

一方通行「ここでいうなー！ー！！」

涼音「あらあら〜、ごめんなさいね〜」

先生「うるさい！！」

二人を教科書で叩く。

お昼、二人は食堂にいた。

二人とも弁当は持ってこない方だからだ。

一方通行「はア〜、あと2時間かア〜」

涼音「そうね〜、それにアナタの大っ嫌いな体育があるわね〜」

ニコニコしながらハンバーグセットを食べる。

一方通行はいつものようにコーヒーを飲みながら食べている。

周りから見れば恋人のように二人は常に一緒にいる。

一方通行も最初は一緒にいるのをやめてくれと言ったが

涼音は

涼音「別に一緒にいてもいいじゃない。

幼馴染だし〜」

と、言い聞かなかつたのだ。

今では普通になっている。

そんな二人の中に、男が一人入り込んできた。

垣根「よっ、相変わらず仲がいいな」

一方通行「クソメルヘンか」

垣根「オレ垣根」

涼音「別に普通でしょ〜？それより何しに来たの〜？」

垣根「お昼に食堂で食う以外何がある？」

涼音「ただ来ただけ？」

垣根「ねえよ」

そういいながら涼音の隣に座る。

削板は今頃教室で弁当を食べているだろう。

一方通行は垣根を睨みつけながら食べる。

それに気づいた垣根はニツと笑う。

垣根「大丈夫だ、お前の幼馴染に手は出さねえよ」

一方通行「そんな心配なんかアしてないんですけどオ」

涼音「大丈夫よ、もし変なことしたら焼くだけだから」

垣根（恐ろしい・・・）

一方通行「もうしちまエよ」

そんなことをしているうちに5時間目まで5分となった。

3人は急いで教室に戻る。

5時間目は社会で、6時間目は体育だった。

一方通行は能力頼りのため体育は嫌いだ。

そのため、毎回ズルしようとする。

しかし、涼音が無理やり授業を受けさせる。

そのたびに抵抗するのだが、身体能力では涼音の方が上のため、毎回負ける。

帰りの時には、一方通行は用事があるといい、先に帰ってしまった。

そのため、涼音は一人で帰る。

そして、また不良に絡まれる。



## 6：また絡まりました

一方通行が先に帰ってしまったため、一人で帰っていた涼音はまた不良に絡まれていた。

不良「よお姉ちゃん、俺らと楽しいところこうぜ」

不良「まあ、無事に帰れるかしらねえけどよ！」

不良「ぎゃはははっ!!!」

涼音「楽しいことつてどんなことかしら？」

不良「そうだな、泣くほど楽しいぜ！じゃあ行くか」

涼音の肩を掴もうと手を伸ばす。

しかし、その手はある男に掴まれた。

当麻「てめえら、悪いことしてんじゃねえよ」

そう、不幸少年の上条 当麻だ。

邪魔をされて不良たちはキレる。

不良「ああ！？なんだテメー!!!邪魔すんじゃねえよ!!!」

不良「やつちまえ!!!」

喧嘩に巻き込まれないように周りに人はいなくなる。

そんなこと気にせず、不良たちは当麻に襲い掛かる。

相手は3人だから大丈夫だろうと当麻は構える。

しかし、構えた途端、裏道から大勢の不良がぞろぞろ出てくる。

当麻「えええー!!!こんなの無理無理!!!」

逃げようとするが、囲まれ、逃げることもできない。

そのうち、一人が襲い掛かってきたため殴る。

しかし、相手は喧嘩に慣れているため、一発だけでは少ししか効かない。

不良「おい！誰かその女を連れて行け！！」

不良「おうっ！おい女っこい！！」

涼音の手を掴み、走ろうとする。

しかし、涼音はその男を投げ飛ばした。

地面に叩き付けられた男は気絶する。

涼音は目を開き、不良たちを見る。

涼音「あらあら、私の大事な友達に手を出したら・・・火傷するわよ」

ギロリと不良たちを睨む。

睨んだ後、指を鳴らす。

すると、当麻の周りを炎が囲む。

不良「へっ！こんな炎くらい・・・！！」

そっつい、中に入ろうと手を伸ばす。

しかし、あまりの熱さに手をひっこめる。

不良「あちちっ！！テメーレベル4か！！」

涼音「残念ね、レベル5・第6位、静奈 涼音よ」

不良「レベル5・・・！！？畜生！！逃げろ！」

レベル5だと知って不良たちは逃げていく。

後には、涼音と、まだ炎に囲まれた当麻が残った。  
ニコリと、元の笑顔に戻ると当麻がいる場所をみる。

涼音「今出すから待っててね」

当麻「いや、その必要はねえよ」

声が聞こえたと思ったたら、次の瞬間、炎は消された。  
あり得ない出来事に涼音は驚く。  
とは言っても、目を瞑ったままだが。

涼音「あなた、レベル5の水系の能力者？あらあら、でもレベル5  
に水なんてあつたかしら？」

首をかしげる。

それを見た当麻は笑う。

当麻「いや、オレの右手には異能の力なら神の力でも打ち消す能力  
があるんだ。

まあ、レベル0だけだな。

てか、アンタまだ不良に絡まれてたのか・・・」

涼音「そうなのよ」。それにしてもすごい能力ね」

そついい、当麻の頬が切れていることに気付く。

涼音「あらあら、頬が切れてるわ」

当麻「あつ、本当だ。まあ、このくらいの傷なら大丈夫だ」

涼音「ダメよ、ばい菌が入っちゃうから、ちよつと動かないでね  
」

そついい、人差し指を傷口に近づける。

人差し指から出た炎が傷口を覆い、消えたところには傷は治っていた。

涼音「はい、おしまい〜」

当麻「すげえ・・・治ってる・・・でもどうしてだ？アンタ多重能力者・・・？」

涼音「う〜ん・・・よく分からないわね〜」

当麻「何でだ？」

涼音「私の能力は少し特殊なのよ〜」

攻撃する炎、防御する炎、治す炎があるの〜。それに炎ならマツチでもコンロでも操れるの〜」

当麻「すげえな・・・」

涼音「すごいでしょ〜。この能力で私は・・・あの人を治してきたの・・・」

少し悲しそうに言う。

「あの人」が誰か分からない当麻は誰かと聞く。

涼音「レベル5の第一位よ〜」

当麻「あっ！一方通行か！」

涼音「そうよ〜、私、あの人の子馴染なの〜」

当麻「アイツの！？どんな奴なんだ？」

すると、また悲しそうな顔をする。

少し考えてから答える。

涼音「私と同じ、孤独で悲しい人よ・・・」

当麻「えっ？」

涼音「あっ、それじゃあそろそろ帰らないと〜、それじゃあね〜」

笑顔に戻り、手を振り走っていく。

その後ろ姿をしばらくの間、当麻は見ていた。

主人公紹介（前書き）

後から変わるかもしれません

## 主人公紹介

名前：静奈 しずな  
涼音 すずね

性別：女

身長：168センチ 体重：55キロ

能力：レベル5の第6位『フレイムクイーン炎王女』

炎系の能力者

攻撃、防御、治すなど、少し特殊

好きなもの：生き物・きらきらしたもの

嫌いなもの：虫・友達を傷つける、大切にしない人

髪型：赤い髪・肩までの短髪 少し癖がついており、シェリー・ク  
ロムウエルの髪型が少し優しくなったような髪型

目の色：赤

体型：巨乳で細い

口癖：あらあら〜

性格は非常におっとりとしていて、友達以外のことでならめったな

ことでは怒らない。

しかし、怒ればとても怖いらしい（一方通行談）

真剣になったり、友達が傷つけられたりすると怒って燃えるように髪が逆立ち、喋り方も伸びが無くなる。

「〜」と伸ばして喋る。

いつも笑顔でいて、細目で、目が閉じられているので一方通行でも少ししか目を開けたところを見たことがない。

炎に耐性があるため、暑さは感じない。

また、少し天然で純粹。親友の麦野は、涼音が汚されない様にと、いつも目を光らせている。

レベル5の6人中、4人が友達で一方通行とは幼馴染。

一方通行とはいつも一緒にいるので周りからは恋人と勘違いされるが、本人はただの幼馴染しか思っていない。

身体能力でも、鍛えているので不良5人くらいなら素手で倒せる。

一方通行のことをあまり名前では呼ばず、「あなた」や、「あの人」と言ったりする。

呼ばない理由は本当の名前では無いから。

過去：子供の時には容姿でいじめられていたが能力を人の前でしたために、

もっとひどくなり「化け物」と言われ、大人にも子供にもい



じめられ、

遠ざけられていた。

そのため、同情した人たちが助けるまではあまり笑わず、人に脅えていた。

同情した人に助けられるとき、自分と同じ「化け物」と呼ばれて

追いかけてられている子、一方通行がいると知って、

一緒に学園都市に連れて行ってもらった。

## 7：アイツのため

先に帰った一方通行は暗い道を歩いていた。  
不良が居そうな道には誰も居ない。

ここに来たのは目的がある、ある実験をするためだ。

涼音には言えない実験。

それはレベル6になるためにクローンを2万体制殺すことだ。  
最初は断った。

しかし、後でレベル6になれば誰も近寄らなくなると言われ始めたのだ。

一方通行（この実験が成功すれば・・・誰もオレに戦いを挑まなくなる・・・）

イイじゃねエか）

不良たちが挑んでくるたびに一方通行は二度とはむかってこないように恐怖心を植え込んできた。

しかし、不良は大勢いる。

その全てをはむかえないようにするのは長くかかる。

一方通行（それに・・・涼音が悲しまずにすむ・・・）

一番はそれだ。

小さいころ、お互い「化け物」と言われたため、最初はお互いだけが頼りだった。

周りの人たちは信用できなかった。

それに、科学者たちが能力を見て二人に実験を毎日させた。

その実験で二人はいろいろな薬剤や注射をされた。

涼音は自分のことより一方通行のことを気遣った。

毎回、注射の跡を悲しみながら能力で治してくれた。  
そのころから、涼音を悲しませないように頑張ってきた。  
この実験もレベル6になれば幼馴染と知って不良たちは涼音に手を  
出さなくなるだろう。

そんなことを考えながら歩いていると一人の少女が立っていた。

ミサカ「アナタが一方通行ですね？と、ミサカは確認を取ります」  
一方通行「ああ、さつさと終わらせるぜエ」

ミサカ「はい、それでは第9989次実験を開始します」

一方通行「あんまり手こずらせんなよ。クローン」

ただの人形

研究者にそういわれた。

彼女たちはただの人形だと。

一方通行（さつさと終わらせてレベル6になる！！）

そう考え、すぐに動き出す。

直ぐに終わらせないとせつかく彼女たちのことは人形だと思ってい  
るのが消えそうだからだ。

ベクトルを変えて一瞬で近づき、殴る。

ミサカの体は吹っ飛び、ゴシヤリと鈍い音が響く。

ミサカ「ぐはっ！！」

一方通行「死ねえええエエツ！！！！」

頭を踏みつぶす。

辺りに血が飛び散り、ミサカはもう動かなくなった。

しばらく息を整えていたが不意に悲しみが浮かんできた。

一方通行（また殺した・・・悲しむことやっちゃまった・・・）

その場に座りこみ、空を見る。

一方通行「ハハツ・・・ハハハツ・・・!!」

なぜか笑いがこみあげてくる。

しかし、長くここに居られない、早く帰らないと涼音が心配する。  
死体の後片付けは残りのミサカ達がするのだから大丈夫だろう。  
カバンを持ち、家に向かい始める。

## 8：涼音の過去 生まれてこなかったらよかった

涼音は、普通の両親から生まれた。にも関わらず、涼音の髪と目は炎のように真っ赤だった。

最初は親も周りの人も驚いた。

しかし、突然変異だと思い、涼音を愛した。

涼音は優しい子に育っていった。

しかし、幼稚園からは同じ年の子から遠ざけられるようになった。

「炎の生まれ変わり」

「変な子」

そういわれた。

しかし、小学校2年までは言われるだけだったので特に気にしなかった。

自分のことを変に思わず接してくれた子も何人かいた。

そのため、嫌がらずに学校にも行った。

しかし、小学校3年になり、いきなりいじめがひどくなった。

言葉だけではない、足を引っ掛けられたり階段で突き飛ばされたりした。

先生達が全員で何とかさせようとした。

しかし、収まらなかった。

しばらくすると無視をされるようになった。

給食を配っても受け取ってくれない、自分には給食を配ってくれない。

プリントを配るときも投げるように渡してきた。

涼音は同じ年とは喋らなくなった。  
ドンドン人が恐くなっていった。

少し失敗しただけでドジだクズだのたくさん言われる。  
テストでいい点を取ってももまぐれだカンニングだの言われる。

本当は外に出たくもなかったがそれでも親には心配をかけないよう  
に学校には行った。

机を廊下に出される教科書を破かれる。

毎日毎日いじめられる毎日。

4年になったある日、クラス全員が彼女を囲み殴る蹴るをやり始めた。

涼音は必死に耐えたがついに我慢できなくなり叫んだ。

その時、不意に計算が浮かび、自分の手から炎が出てきた。

クラスの全員、悲鳴を上げ、涼音から離れる。

「化け物」

「炎の悪魔」

そっぴいなから逃げていく。

涼音（何で私は生まれたの？なんで私は生きてるの？私なんか生まれなきゃよかったのに・・・

こんな「化け物」なんか・・・）

自分を責め始める。

炎のことは大人たちは信じた。  
とうとう大人たちも加わり、前とは比べ物にならないほどのいじめを始める。

殴る蹴る、炎を近づける、屋上で落とそうとする。

「炎の悪魔だからこの炎操れるだろ？」

「だって「化け物」だから」

笑いながら炎を近づける。

涼音はあまりの恐さに耐えきれなくなりあの時のように演算をした。すると、炎を持った男の子の手が炎に包まれた。

男の子は悲鳴を上げ、床に転がる。

先生が駆けつけ、水を浴びせ火を消したが、少年の腕には一生残る大やけどが残った。

先生は涼音を叱った。

しかし、涼音はもう怒ってしまっていた。  
静かに言う。

涼音「先生、先生が私を助けてくれないからですよ。

・・・燃えてください」

先生「えっ？ギヤアアツ！！！」

先生の体を炎が包む。

先生は重傷で病院に運ばれた。

涼音「私は「化け物」だから」

そっさい、家に帰った。

家に帰った途端、両親は走り寄り、涼音を抱きしめた。

母「ごめんね・・・」

謝り、まっすぐ涼音を見ると告げる。

母「涼音、逃げなさい」

涼音「えっ？」

父「お前のことを可哀そうに思った人たちが学園都市と言われる所に連れて行ってくれるんだ。」

そこなら涼音と同じ子が沢山いる」

涼音「本当・・・？私と同じ子が・・・？」

父「そうだ。私たちのことはいいから、これを持って行きなさい」

リュックを渡し、外に連れ出す。

外には、車があった。

母「元気だね。また会いに行くから・・・」

父「忘れるなよ」

涼音「お母さん！！お父さん！！」

車は走り出す。

涼音は泣きじゃくるが、泣いても無駄だと分かり、泣くのをやめる。5時間乗っていると、突如人が居なくなつた。

運転手の人に聞くと、「化け物」と呼ばれて殺されそうになっている少年がいると教えてくれた。

涼音「私と同じ「化け物」・・・おじさん、その子も連れて行く！



！  
」

頼むと、快く承知してくれた。

車を降りると、涼音は目を瞑る。

人の体温を感じているのだ。

しばらくすると、近くの建物の中に人を見つけた。

中に入ると、そこにいたのは真っ白の髪に真っ赤な目をした自分と同じくらいの少年がいた。

9：第3位VS第6位

涼音「ん……」

暗い部屋の中、目を覚ます。

寮に帰り、ベットに倒れこんだまま

そのまま寝ていたようだ。

涼音「夢……ふふ……嫌な夢ね……」

笑い、電気をつける。

思い出したくもないつらい、悲しい過去。

いじめの毎日。

涼音「本当……私は何のために生まれたのかしら……あつ、理由があつたわ……」

あの人を……一方通行を守るため……」

やつと見つけた信用できる友達。

彼と会ったのは10歳の時だった。

お互い、「化け物」と言われ、友達を求めていた。

そして見つけた。

涼音「……まだ帰ってきてないのかしら」

ふと気になり、隣の部屋をみる。

一方通行が脅し、無理やり隣にしたのだ。

涼音「まだみたいね」

部屋には誰も居なかった。

暇なため勉強をしようと部屋に向かう。

その時、叫びながら走る少年と少女が見えた。

当麻「不幸だー！ー！！」

御坂「ちよつと待ちなさいよー！ー！！」

涼音「あらあら、あれはいったいなんなのかしら？」

面白そうなので飛び降りながら下に降りる。

地面に着地をしたとき、二人が近づいてきた。

そして前を通る。

涼音は当麻の横を走る。

いきなり現れたため、当麻は驚く。

当麻「ええっ！？何時の間に!？」

涼音「さっきよ、あなたたちが私の寮の前を走ってるから面白そうだと思ってるね」

当麻「上条さんには命がけなんですよ！」

涼音「あらあら、なんでなの？」

御坂「まちなさー！ーい！ー！！」

電撃を飛ばす。

しかし、当麻は右手の能力で打ち消す。

涼音「便利な能力ね」

当麻「この能力のせいで上条さんは不幸なんですよー！ー！！不幸だー！ー！！」

涼音「不幸だ」

当麻「真似をするな！」

涼音「面白かったからつい〜」  
御坂「無視すんなゴラァツ!!!」

キレている御坂が電撃を飛ばしまくる。  
流石に不味いと思い、涼音は炎を御坂に飛ばす。  
いきなりきた炎を必死に御坂はかわす。  
そして、標的を涼音に変える。

御坂「ちよつと！何すんのよ!!!」

涼音「あらあら〜、ごめんなさいね〜、でもさすがに危ないでしょ〜?」

御坂「赤い髪・赤い目・あんだ第6位の静奈 涼音じゃない!  
当麻「涼音さん!上条さんの一生のお願い!ビリビリをどうにかしてください!!!」

涼音「ビリビリ・・・?」

改めて御坂を見る。

そして笑う。

涼音「フッフ、あなた第3位だったのね〜」

御坂「なっ!何よ!文句あるの!?!」

涼音「資料じゃ〜負けず嫌いで直ぐに怒るって書いてあったんだけど〜」

本当らしいわね〜」

御坂「!!!うっさい!!!」

またもや電撃を飛ばすが、涼音は炎で防御する。  
それをみて御坂は怒る。

御坂「頭きた!勝負よ!!!」

涼音「いいわよ〜、じゃあ人の少ないところだね〜」

当麻「それじゃあ上条さんはこの辺で・・・」

御坂「アンタも来る!!!」

当麻「不幸だー!!!」

引きずられていく。

そして、だれもいない河原にきた。

当麻は安全な場所を見る。

御坂「それじゃあ・・・さっそく行くわよ!!!」

そういい、コインをはねる。

二人は御坂が何をするのかわかる。

涼音「あらあら〜、最初から飛ばすわね〜」

御坂「オラアッ!!!」

お得意のレールガン飛ばす。

涼音は笑いながらひらりと軽くかわす。

涼音「手加減はないのかしら〜?」

御坂「ないわよ!!!」

当麻「ちよっ!お前また!!!」

もう一回レールガンを出す。

涼音「ちよつとめんどくさいわね〜。だったらこれはどっつ〜」

炎をレールガンにぶつける。

御坂「はっ！そんなものでレールガンが消えるわけが・・・！ない・・・」

なぜかレールガンが消えてしまい、炎が無防備の御坂に向かって飛ぶ。

涼音「コインを溶かせばあなたの必殺技は使えないわね。」

それじゃあ、私もいくわよ。」

そういうと、足元から炎が現れ、涼音を包み込む。

涼音「燃えちゃいなさ〜い」

御坂「何を・・・くっ！！」

御坂に向かって一直線に炎が放たれる。

何とかよけるが、また放たれる。

御坂「ちよつと・・・！！こんなのありなの！？・・・くらえ！！」

砂鉄を操り、伸びる剣のようにして涼音に飛ばす。

しかし、涼音を包み込む炎に触れると砂鉄は一瞬で溶けてなくなってしまった。

御坂「そんな・・・！！」

涼音「どうする〜？降参するかしら〜？」

御坂「誰がするか！！」

涼音「仕方がないわね〜、じゃあ無理やり降参させるわね〜」

言った瞬間、御坂を中心に炎の渦ができる。

あまりの熱さに御坂からは汗があふれ出る。

御坂「はっ・・・はっ・・・!!」

涼音「どうする？このままだと死んじゃうわよ？」

御坂「はっ・・・はっ・・・分かったわよ・・・!降参・・・はっ・・・はっ・・・!!」

涼音「OK」

一瞬で炎が消える。

やっと熱さから解放され御坂が膝をつく。

当麻「すげーな、ビリビリ倒したから第3位になれるのか？」

涼音「なれないわ、だって順位は能力研究から生まれる利益だから」

強さの順番じゃないのよ。私の能力はあまり利益はないのよね」

当麻「へ、じゃあアンタはビリビリより強いんだな」

御坂「うるさーい!!」

当麻「うわー!!」

またもや追いかけられる当麻。

置いてきぼりを食らった涼音は療に帰り始める。

## 10：いつもの晩御飯

ドアの開く音がした。

そちらを見ると一方通行がいた。

笑顔で迎える。

涼音「お帰りなさい、遅かったのね」

一方通行「ああ、用事が長引いた・腹減ったア」

涼音「スペアリブが安かったから〜スペアリブよ〜」

一方通行「何でもイイ、早く作ってくれエ〜」

涼音「じゃあ、お箸とか出して〜」

一方通行「分かりましたア」

だるそうにお箸を出す。

料理ができない一方通行のために、涼音が一方通行の部屋で作って食べるのだ。

涼音「それじゃあいただきます」

一方通行「いただきますア」

手を合わせて食べ始める。

涼音の料理は普通においしい、だから残さず食べる。

まあ、一方通行のために量は少なめだが。

涼音「そういえば、何の用事だったの〜？」

ピタリと食べる手を止める。

実験のことを言えば涼音は悲しむだろう、なんとかごまかす。



一方通行「……クソ不良どもと喧嘩だ。数が多くてなア、時間が  
かかった」

涼音「そうなの〜、そういえば〜、プリントの宿題あったわよね〜」  
一方通行「……………」

涼音「あら？」

そんなこと知らない、必死に思い出すが記憶にない。  
考えていると、涼音が思い出したようにいう。

涼音「あらあら〜、そういえば3時間目の時あなたは寝てたわね〜  
だったら知らないはずだわ〜」

一方通行「確か理科だったよなア……？てっマジかよ……!!  
あのクソジジイ説教なげエンだよ……!!」

涼音「私は終わったわよ〜、まあ、アナタの頭なら直ぐに終わるん  
じゃないの〜」

一方通行「オレは早く寝たインだよ」

急いでご飯を食べ終わり、鞆から理科を出す。  
見るとプリントが挟まっていた。  
速攻で終わらせる。

横では涼音がのんびりとご飯を食べている。

しばらくすると食べ終わり、食器を洗い始める。

暇な一方通行は玄関を見る。

一方通行「それにしてもお前の防犯用の炎の威力はハンパねエなア  
……………」

涼音「二度と来ないようによ〜」

玄関には不良などが入ってこないように涼音の能力が張ってある。  
一方通行と涼音以外が勝手に入れば防御の炎が遮る。

前に寮に帰って見たら丸焦げの泥棒がいた。

まあ、警察を呼んで連れて行ってもらったが。

食器を洗い終わり、涼音は帰る。

涼音「それじゃあ明日〱寝坊しないようにね〱」

一方通行「しねエよ」

そついうと帰っていく。

一人になると一方通行は寝る準備をする。

しかし、ふと実験のことを思い出し座り込む。

一方通行「・・・オレは嘘ついてなにしてんだ・・・早く終わらせ  
てやる・・・」

そついうとキッチンと引いていない布団で寝始める。

## 11：潜入

御坂は一人、ブラブラ歩いていた。

今日は当麻を見つけても追いかける気がない。

御坂「・・・私のクローンねえ・・・」

昨日、自分を見たと言われ、急いで調べたのだ。

すると、レベル6になるために自分のクローンが2万體殺されることが分かった。

昨日のうちにほとんどつぶし終え、残るは2だ。

しかし、今はまだ昼間なので、夜に行こうしているのだ。

そのとき、見覚えのある人が話しかけてきた。

御坂「アンタ・・・」

涼音「ねえ・・・その話聞かせてくれない？」

二人は喫茶店に行き、話す。

涼音「ふ〜ん・・・そうなの・・・あの人が・・・」

御坂「私、夜になったら残りを潰しに行くの」

そういうと、涼音が自分も連れて行ってほしいと言い出した。

御坂「えっ・・・？でも危険よ？」

涼音「こうなったのはたぶん私。だから行きたいの・・・  
それに、相手もそろそろ闇にいる人たちを使ってくると思うから」

御坂「そういえばそうね・・・じゃあ、お願いするわ」

涼音「任せて〜」

いつものように話を始める。  
まず作戦を立てる。

御坂「相手は一人だけじゃないと思うの。たぶん3人以上はいると  
思う」

涼音「そうね〜、もし一人で2人を相手するのは大変だから〜、  
一緒に行動しましょうか〜」

御坂「そっちの方がいいわね。  
後は壊すだけ。じゃあ、夜になったらこの研究所ね」

そういい、二人は一旦家に帰る。  
服とかを買ったり、体力を残すためだ。

そして夜、御坂は潰す研究所の前で見つからないように待っていた。

御坂（あいつは何してんのよ！約束の時間はもう過ぎてるのに！！）

もう10分は過ぎている。

すると、涼音が小走りでやってきた。

涼音（ごめ〜ん。遅れた〜）

御坂（遅いわ！）

涼音（ごめんなさいね〜、それじゃあ入りましょうか〜）

御坂「行くわよ」

御坂の能力でセキュリティを狂わせ、研究所に入る。

そして、二人は早速走り始める。

御坂（このまま終わればいいんだけど・・・まあ、仲間がいるから大丈夫か）

涼音（なんかわくわくするわね〜）

ブシュッ！！

その時、いきなり天井が切れ、落ちてきた。  
しかし、御坂は自分の能力でずらし、涼音は防御の炎で防ぐ。

涼音「やっぱりいるわね」

御坂「ええ、さて、相手はどこに？」

見つけた導線をたどると、一人の少女がこちらをみて笑っていた。

御坂「行くわよ」

涼音「ええ」

二人は走り出す。

相手、フレンドは惜しいなどと思いながら二人をみる。

フレンド（相手は能力者みたいね・・・まあ、結局殺すからどうでも  
いい訳だけど！）

また導火線にを付ける。

二人に迫るが、よけられる。

しかし、

フレンド（よけるだけなんて、素人ね！）

導火線の先には爆弾を抱えた人形がある。

## 12：親友

ドオオオオンッ！！！！

御坂たちが居た場所が爆発で見えなくなる。

フレンドは、その光景を見て笑う。

フレンド「にゃーはっはっはっ！！！！まっ結局私の手にかかればこんなもって訳よ！！！」

そして、麦野たちに伝えようと携帯を取り出しかける。

フレンド「あつ、麦野？終わったわよー。もう超楽勝！！まさかこんなすぐに終わるとは思わなかったわ。結局、私の敵じゃなかったっていう訳よ！」

涼音「あらあら、何が終わったの〜？」

フレンド「！！？」

急いで携帯を離し距離をとる。

涼音は笑顔でフレンドの携帯を踏みつぶす。

涼音の後ろには呆れたようにこちらを見ている御坂がいる。無傷な二人をみてフレンドは慌てる。



フレンドダ「ちよっ・・・!!何で無傷なのよ!!」

御坂「そんなの決まってるじゃない。防御したからよ」

フレンドダ「でも、見たところあなたたちは炎と電気の使い手・・・  
防御なんて・・・」

涼音「それはいうわけはいかないわね。とりあえず、仲間のこと  
についてはいてもらいましょう」

炎をフレンドダに向けて放つ。

フレンドダは何とかよけると逃げ始める。  
二人はめんどくさそうにその姿をみる。

御坂「逃げたって無駄なのに・・・ねえっ!!!!」

フレンドダ「によわ!!!!」

すぐ横を電撃が通る。

そして、そのまま物に当たる。

すると、当たったものは黒こげになってしまった。  
あまりの威力にフレンドダは驚く。

フレンドダ（なんなのよこの威力〜!!!!）

涼音「あらあら、敵はもう一人いるのよ？」

フレンド「あがつ！」

回し蹴りを腹に居れる。

何とか腕でダメージを薄くしたがそれでも吹っ飛ばされる。

そして、地面に落ちて痛さで動けない隙に御坂はフレンドの肩に触れる。

フレンドの額に嫌な汗が流れる。

御坂「さあ、仲間のこと吐きなさい」

フレンド「によわーーーーー!!!!!!」

電撃を流される。

あまりの痛さに叫び声を上げる。

涼音「早く吐けば命は助けてあげるわよ？」

フレンド「はっ！そんなのはくわけないじゃない……」  
「によわ！」

涼音「吐きなさい」

フレンド「はっ……はい……」

悪魔の笑顔でフレンドの頭を掴む手に力を入れる。  
諦めてフレンドは言おうとする。  
その時、3人の後ろをレーザーが通る。  
二人はレーザーが来た方を見る。  
すると、女性が二人現れる。

麦野「危機一髪みたいね、フレンド……涼音……？」

涼音「麦野？なんであなたが暗部なんか……」

二人は驚いた顔でお互いを見る。  
二人は親友だからだ。

麦野「……今なら逃がしてあげるわ。だから……」

流石に友達を殺すのは嫌なので情けをかけて逃がそうとする。  
しかし、涼音は首を振る。

涼音「そうわいかないわ。私はあの人を止めるために来たの。  
アナタも情けなんてかけないで戦いなさい」

麦野「あの人……？一方通行がどうしたの？」

涼音「・・・あの人は、今、実験をしている。その実験はレベル6になるためのもの。そのために、この御坂のクローンを2万体制殺すの」

麦野「・・・」

麦野にしてみればクローンが2万体制殺されようがどうでもいい。しかし、親友がその実験で苦しむのなら話は別だ。

麦野「・・・そう、ならこの仕事が終わったとで生きてたら手伝うわ」

涼音「そうこないと。麦野らしいわ」

周りについていけないが、戦闘態勢に入る。

### 13：第3位&第6位VSアイテム

『原子崩し（メルトダウン）』が壁や床を破壊する。

御坂と涼音は自分の能力を使い、器用に逃げ回る。

しかし、涼音は麦野が本気でやっていないことに気付いた。

涼音「麦野！本気で来なさい！それがあなたの役目でしょ！」

麦野「で・・・も・・・あなたは私の親友・・・！！！」

涼音「もし本気で来ないんだったら溶かすわよ！！！」

麦野「！！！」

涼音が炎を放つ。

麦野が逃げると、炎は床にぶつかり、床を溶かしていく。

それをみた麦野は目を閉じる。

麦野（ふふ、涼音はいつもそうね・・・いつもヘラヘラしてるのに真剣になると厳しくなって・・・  
本気で行くか！）

御坂「危な！！！」

いきなり、「原子崩し」の威力が上がる。

涼音はにやりと笑う。  
やっと本気になったからだ。

麦野「フレンド、貴方も戦いなさい。いくら私でもレベル5二人は無理だわ」

フレンド「分かったわ」

線に火をつける。  
すると、御坂に向かって進んでいく。  
自分が狙われていることに気づき、御坂は舌打ちをする。

御坂「たくっ！何で私ばっかなの・・・よ！...！」

床を持ち上げ、断ち切る。  
涼音はすかさずフレンドに炎を放つ。  
しかし、簡単によけられる。

涼音（やっぱり遠いからよけられる・・・でも近づいたら麦野の攻撃が・・・）  
厄介なことになったわね・・・）

麦野「ハッ！何悩んでんだよ涼音！本気で行くぞお！...！」

御坂「くっ...！」

考え事をしていたためによけることができなかつた涼音を助けるため。

御坂は無理やり「原子崩し」を曲げる。

御坂「やっぱり！私とおばさんの技は同じもの……！！！」

フレンド「私もいるのよ？」

御坂「グハッ！」

すっかり麦野ばかり集中していたため、フレンドのことを忘れていた。

蹴りを食らい、壁に体を打ち付ける。

フレンド「麦野ー、こいつら殺していいの？」

麦野「当たり前だろ、敵に泣けなんざかけんじゃねえぞ」

フレンド「了解！」

涼音「御坂！ここは施設を壊して逃げるわよ！」

御坂「分かったわ！！！」

二人は逃げる。  
それを麦野たちは追いかける。

麦野「待てやくソガキイ!!!勝負はまだついてねえぞ!!!」

恐怖を感じながら逃げる。

そして、中心部分につく。

御坂はすぐに電撃で機械を壊す。

すると、麦野たちが追いついてきた。

フレンド「こんなところに逃げ込むなんてね・・・結局、私たちの  
勝ちって訳よ!」

麦野「死ね!!!」

涼音「しまっ・・・!!」

ドオオオオンッ!!!!!!

「原子崩し」が二人を飲み込む。  
そのまま、機械ごと壊す。

麦野「やったか・・・?」



フレンド「死んでるでしょ。この至近距離よ」

麦野「帰るぞ。フレンド」

フレンド「了解！」

ちゃんと確認しないまま二人は帰る。

外に出ると、ほかの2人も待っていた。  
そのまま車に乗り込み、アジトに帰る。

麦野「・・・任務完了・・・」

元気がない。

親友を殺したからだろう。

そうとは知らないフレンドは話す。

フレンド「まあ、確実に死んでるでしょ。だって、アイツらの能力、

防御なんかできないし」

麦野「防御・・・？あぁっ！！！！」

何か大事なことを思い出したようで大声を上げる。  
絹旗が耳を抑える。

絹旗「どうしたんですか？超五月蠅いんですけど・・・」

麦野「涼音の炎のこと忘れてた・・・！！」

3人「え？」

御坂「いやー、アンタの炎が無かったら死んでたわねー」

涼音「本当ね〜。久しぶりにわくわくしたわ〜」

そっさい、二人は去っていく車を見る。

あの時、涼音が防御の炎を出したおかげで二人は死ななかった。

涼音「これで後一個？だったら今度は麦野にも手伝ってもらいましょよ〜」

御坂「えっ？アンタまさか本当にあのおばさんと親友・・・？ひっ！」

涼音「麦野がおばさん？どの口が言ってるの？この口？」

御坂「ほめんなはい〜（ごめんなさい）」

謝ったので、頬をつねるのをやめる。

そのまま、二人は帰って行った。

## 14：衝撃

御坂「早く帰らないと・・・寮監に門限破りがばれる!!」

寮監は規則を大事にする。

この前、黒子と一緒に遅くに帰ったら、黒子が犠牲になった。しかも一発でだ。

御坂もそのあと一発でやられてしまった。

もうあんなことはごめんだ。

しかし、帰る途中、公衆電話を見つけた。

それをみた御坂は興味心でハッキングをする。

御坂「さて、どうなったのかしら？」

壊した施設がどうなっているのか気になったからだ。

だが、画面を見た途端、御坂は機械を落とした。

御坂「何よ・・・この数・・・何でこんなにたくさん・・・!!」

そう、後一つだったはずなのに、施設が増えていたのだ。あまりの数の多さに絶望する。

これをすべて壊そうとしたら何日もかかる。

今の自分はただ手さえ体力が限界だ。

御坂「なのに・・・なのに・・・これじゃあ・・・もし潰せたとしても・・・  
また増やされる・・・！！・・・どうすれば・・・」

その場に座り込む。

このままではクローンが全員殺されてしまう。  
今でも、もうすでに9千以上は殺されている。

悩んだ後、御坂は涼音に電話をかける。  
すると、案外早く出た。

涼音「はいもしもし？誰かしら？」

御坂「・・・私よ・・・」

涼音「どうしたの？」

御坂「・・・いい？よく聞いてちょうだい・・・」

御坂はゆっくり、丁寧に話す。

途中から声が震えていたが、涼音は何も言わなかった。  
ただ黙って聞いていた。

話終わり、涼音は何か考え始めた。

涼音「うん……どうしようかしら……」

御坂「アンタ！ちゃんと真面目にきなさいよ！！そうしないとクローンが殺されるのよ！」

それを聞き、涼音のため息をつく音が聞こえる。  
さらに御坂は怒る。

御坂「アンタにとってはどうでもいいことだけど！私にとったら大変なことなの！！」

たとえクローンでも……あの子たちは……私の妹なの……！！」

涼音「……どうでもよくないわよ……」

御坂「えっ？なんていったの？」

涼音「うん、何もないわ。それじゃあ、御坂。……死ぬ覚悟はある？」

御坂「！！？」

涼音「明日、あの人を止めるわよ。ただ止めるだけじゃダメ、あの人の意志でやめさせないといけないの……そのためには、大げがは絶対免れないわよ」

御坂「……分かったわ」

決意を伝えると、涼音の声は元のやんわりとしたものになる。

涼音「それじゃあ、麦野たちに伝えるわね、貴方もあのツンツン頭呼んどいてね」

その人が居ればあの人の技を無くせるから」

御坂「分かったわ！それじゃあ、明日の実験の時間の30分前に実験場所の〇〇に来て」

涼音「分かったわ」

御坂「それじゃあ」

電話を切る。

そのまま御坂は走り出す。

一方、涼音は麦野たちにメールしていた。

涼音「麦野に、垣根に、削板ね」

何かすごい人ばかり呼んでいた。

## 15：人じゃない、人形

次の日、待ち合わせ場所に上条 当麻をつれ、御坂はいた。

当麻「オイ、ビリビリ。来るやつって誰なんだ？」

御坂「ビリビリいうな！！・・・来るのは、第6位の静奈 涼音と、第4位の麦野 沈利よ。

言っとくけど！レベル5が3人いるからって油断したら駄目よ！  
一方通行の能力はベクトル操作。反射もできるから、私たちの攻撃は効かない。  
だから・・・」

当麻「オレの能力が必要・・・だろ？」

御坂「そうよ、アンタしかアイツを倒せる奴はいないの。私たちはアンタを一方通行に近づけさせるための罠。感謝しなさいよ！」

当麻「分かった分かった・・・」

涼音「来たわよ」

手を振りながら涼音が歩いている。

しかし、後ろの人をみて、御坂は顔を青くさせる。

なぜなら、第5位以外のレベル5を連れてきていたからだ。

垣根 かきね 帝督、ていとく 削板 そぎいた 軍霸 ぐんぱがいる。

あまりのすごさに御坂は口をパクパクさせている。



当麻「どうしたんだお前？酸素欲しがってる金魚みたいだぞ。イデエ！！！！！」

御坂「誰が金魚だ！！！」

麦野「何してんのよ……」

二人の様子を見た麦野がつぶやく。

当麻が電撃を消しながら逃げ回るといふ光景が目のあるからだ。

涼音「え〜と〜…漫才〜？」

垣根「いやいや、それはねえだろ」

削板「根性で耐えろ！」

当麻「無理です無理です！！！」

いまだに逃げ回る当麻。

そんな二人を置いて、涼音たちは話す。

削板「ずいぶん頼りになるって聞いてが…大丈夫なのか…？」

垣根「今はアイツにかけるしかねえ……一方通行の技はめんどくせえからな」

麦野「でも、頼りがあれじゃあね〜」

涼音「まあ、大丈夫でしょ〜」

麦野「・・・あんたいつも深く考えないわね〜本当にレベル5〜?」

垣根「移ってる移ってる」

話している間に、御坂は怒りが収まったのか、当麻が近づいてきた。そして、御坂にここに居る人たちがどういう人なのか説明する。説明を聞いて当麻は驚き、自分だけが無能力なのを嘆く。

当麻「くうふう〜、今の上条さん、超KYじゃないか・・・!!」

削板「まあ、根性でがんばれ」

そんな話をしているうちに、時間が迫ってきた。すると、暗闇の中から一方通行が現れる。

一方通行はみんなをみえ、目を丸くする。

一方通行「な・・・なんでオマエラここに・・・!!」

涼音「・・・実験をやめて・・・」

一方通行「!!!?」

麦野「アンタ馬鹿？人まで殺してレベル6になりたいの？私はなりたくないわ」

すると、一方通行は、小さくつぶやき、大声でいう。

一方通行「……なりたいんだよ……レベル6になれば……誰も傷つかない……涼音も悲しまない……だからだア！！！！  
テメー等には関係ねエだろうがよオ！！」

御坂「その涼音がアンタがこんな実験してるって知って悲しんでるのよ！！分らないの！？」

それを聞き、一方通行は涼音を見る。

涼音は目を閉じたままだが、悲しそうな顔をしている。

その表情をみて、一方通行は心を痛める。

しかし、ここで悲しんでも、この実験が成功すれば、この先ずっと涼音は喜ぶ。

一方通行はそう考える。

一方通行「うるせエ……邪魔するンだつたら殺すぞ！！」

「何をしているのですか？と、ミサカは問いかけます」

驚いて、声のする方を見ると、銃を持ったミサカがいた。

初めてクローンを見る、麦野、垣根、削板、涼音は目を見開いてみ



辺りを炎が包む。

## 16：自分が生まれたから迷惑をかける

全員「!!!?」

皆は炎に囲まれる。

驚いている中、涼音の周りに2重くらい炎が囲み、髪が逆立ち、炎のように揺らめき始める。

一方通行は驚いて涼音を見る。

涼音は泣いていた。

涼音「何で……こんなことに……私が悪いの……？私が化け物だから……！」

私が生まれてきたから……!!」

一方通行「涼音……!!違う！オマエのせいじゃねエ！オレが悪いんだ！だからオマエは悪くねエ！」

大声でいう。

しかし、今の涼音は聞いていない。

徐々に炎の威力が上がり始めた。

一方通行以外は汗をかく。

麦野「涼音！いい加減に過去のごことは忘れなさい！いつまでぶじぶじしても駄目じゃない！」

涼音「過去・・・？・・・化け物・・・悪魔・・・う・・・うあああああ  
ああつ！！！！！！」

垣根「麦野————！！！！」（怒）

麦野「やばっ・・・」

削板「火に油を注いだぞ！」

説得するつもりでかけた言葉が逆効果になってしまった。  
さらに威力は上がる。

御坂「一方通行！アンタの反射でどうにかしてよ！」

一方通行「・・・無理だ・・・」

御坂「え？」

一方通行「何でか分からねエけど、涼音の炎は熱さは反射できても  
炎は反射できねエンだ・・・  
オレじゃア止められねエ・・・」

当麻と御坂は驚き、声を無くす。

そんな空気の中、ミサカが尋ねる。

ミサカ「では、その少年の能力は効かないんですか？と、ミサカ

は疑問に思ったことを訪ねます」

垣根「それだ！おい、クソガキ！お前がこの炎を消せ！」

当麻「ガキ！？・・・まあいいけど・・・」

涼音を囲んでいる炎の前に立つ。

後ろでは麦野がキレだし、垣根と削板が必死に止めている。

当麻「オラアッ！！！！」

右手を広げて炎に触れる。

キイイイインッ

御坂「やった！」

「幻想殺し」は効き、炎は消えた。

涼音は目を見開き、涙を流しながら驚いていた。

しかし、顔は下に向けている。

そして、またつぶやき始めた。



涼音「私が化け物だから・・・こんな容姿で生まれたから・・・悪魔だから・・・こんな性格だから・・・だから一方通行を苦しめた・・・だから一方通行に迷惑をかけた・・・私なんか生まれなきゃよかったのに・・・そうしたらお母さんもお父さんも一方通行にも迷惑も心配もかけなかったのに・・・そうしたら・・・」

頭を抱え、目を見開き、涙を流しブツブツつぶやき始める。  
そんな涼音を一方通行は抱きしめる。  
いきなりのことに涼音の体が固まる。  
一方通行は抱きしめながら言う。

一方通行「いいか？涼音」

涼音「・・・うん・・・」

一方通行「オマエは自分が生まれてきたから母親と父親とオレに迷惑と心配をかけたと思ってるな？」

涼音「・・・うん・・・」

一方通行「・・・だけどなア、オレはオマエが居なかったらここにはいねエかもしれねエ、あのまま化け物呼ばわりされて一人で死んでたかもしれねエ」

涼音「そんなことツ・・・！！無い・・・一方通行は強いから・・・！！」

私と違うから・・・！」

一方通行「オレはオマエが思ってるほど強くねエ！・・・もし一人だつたら学園都市に行くつていうことを言われても行くつて言わなかつたかもしれないエ・・・  
オマエが居たからオレは来たんだ。それに、オマエはオレを助けてくれた」

涼音「それは・・・」

一方通行「ありがとなア」

涼音「！！・・・」

一方通行に抱き着き、静かに泣き始める。

皆は二人だけにしようと思つたところまで話を聞いていた。

垣根が面白そうに笑つた。

垣根「お熱いね、今度これだからかつてやるつ」

麦野「はあ、私も彼氏欲しい！」

垣根「お前の性格じゃ無理だろ」

麦野「なんだとゴラアアアアアアツ！！！！」

垣根「ギャーーーー！！！！嘘嘘！！だから「原子崩し」撃たないで

！！！！！！！！」

麦野「死ねえええええつ!!!」

能力を使い、必死に逃げ回る垣根。

それを追いかける麦野。

皆は笑いながらその光景を見る。

途中で垣根が助けを求めていたが、聞こえないふりをした。

すると、一方通行が涼音の手を持ちながら帰ってきた。

一方通行「面白そうなことでンじゃねエか。オレも混ぜろ!」

垣根「混ぜんな!!ギャー!!もの飛ばさいで!!!」

麦野「アツハア!なかなか面白いじゃねえかこの遊び!」

垣根「オレは楽しくねえよ!!」

削板「がんばれ!何事も根性だ!」

垣根「それはオマエだけだ!」

当麻「・・・命がけの遊びだな」

御坂「いや、垣根は遊びじゃないわよ」

涼音「ふふ、元気ね」

目を真っ赤にさせながら涼音は笑う。

ミサカ「さっき思ったのですが、貴方の目の色は炎のようで綺麗でした、と、ミサカは思ったことをそのまま言います」

涼音「私の目・・・？こんな人はずれの目の色が・・・？」

御坂「人と違うから綺麗よ？一方通行は血の色みたいな色だけど、貴方は炎みたいで綺麗よ」

涼音「・・・そうなの？」

一方通行「オイ、オレのことけなしてるのか？」

そっつい、目を開ける。

すると、残りの人たちも綺麗だという。

それを聞き、涼音は笑う。

涼音「私は、この赤い髪と目で化け物呼ばわりされたの・・・綺麗なんて言われたの2回目よ」

削板「一回目は誰だ？」

涼音「一方通行よ」

当麻「なんだよお前、そんなにグフツ！！」

一方通行「黙ってる！」

麦野（素直じゃないわね・・・）

垣根（こんなじゃ、こいつ一生告白できないぞ）

削板（根性で告白だ！）

御坂（ヘタレ・・・？）

当麻（わかんねえな・・・好きなら好きっていえばいいのに・・・）

ミサカ（ヘタレですか、と、ミサカは馬鹿にしながら思います）

一方通行（絶対全員変なこと考えてるな・・・）

涼音（あらあら、みんな一方通行見てるわね、なぜかしら？）

それぞれそんなことを思っていた。

そんな中、涼音があることをいう。

涼音「・・・あなたたちだと過去のこと言ってもいいみたいね、時間ある？」

御坂「時間？あつ！やば！私帰らないと！」

涼音「じゃあ、明日10時にまたここにきてね」

御坂「分かった！」

全速力で帰って行く。

そのあと、みんなも帰って行く行く。

ミサカ「・・・実験はどうすればいいのでしょうか。」

一方通行「ああ、オレは無能力者にやられた、とでも言ってる」

ミサカ「分かりました」

ミサカも研究所に帰って行く。

一方通行と涼音も明日のことについて話ながら帰る。

## 17：つらい過去

次の日、皆は実験していたところで集まっていた。

涼音と一方通行は一番に来て、何やら話し合っていたが、みんなが来ると話をやめた。

当麻「来たぜ」

涼音「まあ、立ちっぱなしは疲れるからその辺に座って」

そういわれ、座る。

御坂と当麻以外は悲しそうな顔をしている。

それをみた御坂と当麻は悲しい話だと分かる。

涼音「それじゃあ「オレから話す」・・・アナタが・・・？」

一方通行「オレの方がましだからなア」

涼音の言葉を遮り、何やら話すと、話始める。

一方通行「・・・オレは・・・生まれたときは普通だった」

御坂「そうでしょうね」

一方通行「だがなア・・・歳をとるごとにオレの能力は強くなっていた。」

そのせいで、オレは普通じゃなくなった」

当麻「たとえばどんなことだ？触ろうとしても触れないとか？」

一方通行「あア、それもあるなア・・・それならまだ触らせないよ  
うにすればイイ話だア。」

まだましだ。問題はその後だ」

眉間にしわを寄せ、空を見る。

この先は思い出したくもない、だが、言った方がましだろう。

一方通行「・・・ある日、いじめっ子どもがオレの外見が変わって  
いくだらねエ理由でいじめようとしてきやがった。  
オレは何もせずにオレを殴ろうとする拳を見た。  
そしたらそいつの腕は折れ曲がった。  
・・・オレは初めて人を傷つけたんだ・・・」

垣根「・・・」

削板「・・・」

一方通行「そのあとも、一人がオレに体当たりをしてきやがった。  
もちろん吹っ飛んだがなア。  
いじめっ子どもは逃げながらオレにこウ言った・・・『化け物』っ  
て・・・」



御坂「化け物・・・？そんなこと言ったの・・・？」

当麻「でも！学園都市なら有りだろ！？能力持ってんのは・・・」

一方通行「オレが生まれたところは普通の所だア。能力者なんかいねエ。

だからオレはそういわれたんだ。

そのあとはそいつらの大人が来てなア。オレを殴ろうとした。やっぱり手は折れた。遂には警察を呼ばれた。

だけど警察も歯が立たなかった。オレは人を傷つけ続けた」

当麻（・・・一方通行は人を傷つけたのを後悔してるんだ・・・

『化け物』って小さいときに言われればいくら一方通行でも傷つく・

酷いやつらだな・・・！！）

知らない間に手に力を込める。

いくらなんでも、子供相手に『化け物』はひどすぎる。

一方通行「ついには軍隊も動いた。だけどオレに傷はつけられなかった。

銃も・・・ミサイルも撃たれた・・・オレは必死に逃げ回った。

ビルに逃げ込んだがアこのまま死ぬんだと思いつながらオレは座り込んで・・・

その時だ、足音が聞こえたのは「

御坂「・・・誰だったの？軍隊だったの？」

一方通行「イヤ、涼音だ」

御坂・当麻「!!!??」

二人は驚く。

当たり前だ、そこで涼音の名前が出てくるとは思わなかったからだ。  
一方通行の顔は少し和む。

一方通行「涼音はオレを助けてくれた。

オレを学園都市に連れていってくれて救ってくれたんだ。  
本当に感謝しても感謝しきれねえよ」

笑っているような顔で話す。

本当に感謝をしているのだろう。

もう少しで死にそうだったのを救ってくれたのだから。  
すると、次は私ね、といい、涼音が話をする。

紅い、炎のような瞳を見せながら。

涼音「そうね、・私は生まれたときから変だったわ。

何せ、この赤い瞳と髪だからね。最初は驚かれたわ。  
だけど、その時は突然変異だっことで収まったの。

暫くの間は普通のことと遊んでたわ」

でも、といい、下を向く。

涼音「幼稚園から私は同じ年の子には遠ざけられるようになったの。「炎の生まれ変わり」、「変な子」って言われたわ。

「ただ、それくらいだったら私は気にしなかった。炎の生まれ変わりにって何かカツコイイじゃないかと思ってたから……」  
「ただ……小学校3年から……あの……いじめが始まった……」  
「!!」

消えそうなか細い声になる。

その途端、垣根たちが止めに入る。

垣根「もうやめろ!」

麦野「そうよ、つらいんなら言わなくてもいいのよ?だから……」

涼音「ありがとう……でも大丈夫……」

ニッコリと微笑むが、大丈夫そうではなかった。

涼音「……いじめはひどかったわ……階段で突き飛ばされたりしたわ……」

先生たちは何とかやめさせようとした……「ただ無理だった……」  
暫くすると無視をされるようになったわ。

私が渡しても受け取ってくれなくなったり渡してもくれなくなったり  
わ」

涼音の瞳から涙が零れ落ち始める。

涼音「机を外に出されたり・・・教科書には落書きをされたり・・・私はそのころから人が恐くなった・・・喋ることを忘れようとした・・・  
・・・4年生になって・・・私はとうとうクラス全員に囲まれて殴られたり蹴られたりされたわ」

御坂「そんな・・・!!!!ひどいすぎるじゃない!!!!!!」

涼音「そういつても私は話すのが恐かったの・・・ただ黙ってやられてた・・・  
だけど、我慢できなくなって叫んだわ。そしたら頭に演算が浮かんだの。

私の手からは炎が出てきて、ほかの生徒は悲鳴を上げて逃げたわ。  
『化け物』、『炎の悪魔』って・・・私は思った・・・  
何で私は生まれたの？なんで私は生きてるの？私なんか生まれなきゃよかったのに・・・  
こんな『化け物』なんかって・・・!!」

当麻「そんなことを・・・」

涼音「私は自分を責め続けたわ。味方だと思ってた先生たちもついに敵になった・・・

私に味方はいなくなつた・・・  
・・・さらにいじめはひどくなって、私は炎を押し付けられたり、屋上から落とされそうになったりした。

私は我慢できなくなって、また演算をしたわ。

そしたら、炎を持ってた子の腕は燃えた。

急いで先生が消したけど、その子の腕には一生残る火傷ができた。

先生は私を叱った。

だけど・・・私は何をしたいのか何をしてはダメなのかわからなくなってたの・・・

先生を炎で包んだわ・・・」

自分の手を見る。

なぜあんなことをしたのか自分でも分からないのだろう。

麦野が優しく涼音の背中をなでている。

涼音「私は逃げ帰ったわ・・・そしたら、お母さんとお父さんが私を抱きしめて迎えたの。」

そしていったわ、「逃げなさい」って・・・

私は同情してくれた人たちに連れられて学園都市に向かった。

その途中、私は一方通行のことを知ったの・・・

自分と同じ目にあってる人を、私は助けたかった・・・

私は一方通行を助けにいった。

会って、私は白い髪に赤い目の一方通行を見て驚いたわ。

自分と同じ子がいたから・・・

そのまま私は一方通行を連れてここ、学園都市に来たの」

笑うが、悲しそうだ。

御坂と当麻は泣いている。

まさかそんなにつらい過去とは思わなかった。

当麻「そうか・・・お前ら・・・つらかったんだな・・・!!」

御坂「本当・・・」

しかし、まだ続きはあると一方通行はいう。

18：合わせて・・・出して・・・

一方通行「オレ達は学園都市に来た後、直ぐに研究者たちに目エをつけられた。

そのまま研究所に連れて行かれ、別々に実験した。

あの時オレは小さかったからなア。寝床と食料があればイイと思つてたんだよ・・・」

涼音「・・・ひどかったわ・・・注射は何回も打たれた。薬も何回も飲まされた。

・・・いうことを聞かないと殴られた・・・私は無表情で・・・何も喋らずただ耐えた・・・」

――

涼音「ねえ、なんで一緒だと駄目なの！？あの子と一緒に居たいよ！！！」

「ダメだ、能力が違うから別々だ」

涼音「いやだ！一緒にいい！うっ！」

「うるさい！それ以上騒ぐともう一発殴るぞ！」

涼音「・・・」

殴られた頬を触りながら一方通行の方を見る。

一方通行の方は反射があるので殴られることがないし触れることもできない。

そのため、研究者を押しつけて近寄ってきていた。

涼音を庇うように前に立つ。

一方通行「涼音をいじめたら殺す！この建物も壊してやる！」

「はっ！ガキが調子のんなー！」

見下した目で二人を見る。

二人は負けじと睨み返すが、涼音が後ろから抱きかかえられ、連れて行かれる。

涼音「いやだ！放して！！！」

一方通行「涼音……！！！」

「このまま大人しく実験すれば殴ったりしねえ。できないんなら出ていきな」

一方通行「チクシヨオ！！！」

悔しくて壁を殴る。

すると、壁は大きくへこむ。



それをみた研究者たちは驚きの声をあげる。  
ここを追い出されたら子供二人では生きていけない。  
だからいうことを聞くしかない。

それから毎日、地獄のような日々だった。

一方通行「イテツ！」

今日も注射を3本打たれた。  
点滴もしている。

これは毎日された。

他にも、銃やマシンガンを撃たれたりしたが、すべて反射した。  
より複雑な演算もできるようになったが、暴れられない。

涼音が殴られるからだ。

この前、ちらつと見たが無表情だった。

自分と違い反射が出来ない涼音は殴られる。  
そのため、言うことを聞かないといけない。

涼音「痛い・・・痛いよう・・・死にたいよ・・・」

「うるさい!!」

涼音「・・・!!」

殴られ、必死に痛みを耐える。

しかし、涙を流し、ついつい言ってしまう。

涼音「・・・死にたいよ・・・死にたいよ・・・ここから出して・・・  
あの人に合わせて・・・」

「ハッ！そんなこと知らねえな！オラ立て！」

無理やり立たされる。

抵抗もせずに立ち上がる。

もう、抵抗する気力がない。

黙って研究者の跡についていく。

-----

数年後

一方通行「よオ、久しぶりだなア涼音エ」

涼音「……………」

久しぶりに自由時間が与えられたので涼音に会いに行く。

しかし、涼音は冷たい目でこちらを見るだけで何も言わない。

部屋の隅で体育座りをしながら寝るらしいと、この前研究者たちが話しているのをこっそり聞いた。

一方通行「……………なんか言えよ。久しぶりなのによオ……………」

涼音「……………」

そういつても何も言わない。

もう生きている人形のようになってしまっている。

一方通行「……………考えたんだけどなア……………ここから出ねエか？」

涼音「……………？」

ほんの……ほんの少しだけ反応する。

しかし、すぐに目をそらす。

めげずに顔を掴み、無理やりこっちを向かせる。

一方通行「なア。出ようぜ。もうオレ等は中学3年の歳だ。生きて

いける」

涼音「・・・本当・・・？」

やっと・・・数年ぶりに涼音の声を聞く。

優しい、やんわりとした声だ。

一方通行は首を縦に振り、手を取りたたせる。

一方通行「じゃア、置手紙書いてくか！」

涼音「・・・うん・・・」

ニッコリと微笑む。

その微笑みにドキッとし、顔を赤くしてしまい、慌てて顔をそむけ、歩き出す。

一方通行「おっ・・・おおおうウ！行くぜ！..！」

涼音「・・・ありがとう・・・」

小さくお礼を言う。

そのあと、置手紙を書き、机に置く。

そのまま、窓から飛び降りる。

地面に着地すると、二人はすぐに走り出した。

――

一方通行「てエことがあったんだ。そのあとはいろいろ苦労したぜ。まア、実験のおかげで金はたっぷりあったからな、それで直ぐに家を借りた。

そのあとはお互い別々の高校に行ったからな、それぞれアパートを借りて高校行ってた」

涼音「そのあと、私は一方通行が心配になって帰ったの」

一方通行「本当大変だったぜ。こいつ、無表情だったからな」

お気楽に言うが、周りは何も言わない。

そのうち、削板が腹が減ったと言いだし、みんなは黙りながらご飯を食べに行く。

19：焼肉

削板が来たいといっただので、みんなは焼肉屋に来ていた。  
今は昼のため、御坂は太るやら何か言ってたがみんなは見事にスル  
ーした。

五月蠅くなりそうなので、特別室にしてもらった。

削板「赤身2人前!!」

麦野「そうね・・・」

涼音「あつ、塩タンでいいんじゃない?塩タン2人前」

垣根「オレはカルビ2人前」

一方通行「イヤ、3人前」

垣根「オレと一緒にすんな」

一方通行「ケチケチすんじゃないよ。器が小さいですね」(笑)

垣根「殺す!!!」

麦野「喧嘩してんじゃないやねえ!!!」

ゴンツ x 2

一方・垣根「イデッ!!」

拳骨のあまりの痛さに2人は頭を抱え、声にならない叫びで転がる。

当麻「ううゝ・・・お金は割り勘ですか・・・？」

御坂「安心しなさい。アンタのは私が払ってあげるわよ。じゃあ、ホルモン1人前と・・・

アンタはハラミでいいわね？ハラミ1人前」

当麻「マジか！？アリガトウございます女神様」

御坂「ばっ／＼／＼／＼／＼！離れなさい!!」

嬉しさのあまり抱き着いた当麻。

いきなりの行動に、御坂は顔を真っ赤にさせて離そうとする。皆はジーとみている。

そのため、もつと顔を赤くして言い訳をし始める。

御坂「べっ・・・!!別に私はコイツのことなんにも思っていないわよ！？分かってる!？」

かつ勘違いしないでよね!」

麦野「若いわね」

涼音「そうね〜」

削板「若い！若いなあ！」

垣根「・・・オレも心から愛してくれる人欲しい・・・一方通行はいいなあ・・・」

一方通行「なっ／＼／＼／＼！うるせエ！何勘違いしてんだ！」

「あっ・・・あの〜？これで以上ですか？」

全員「ハイ」

「あっはい！それでは・・・」

大慌てで出ていく。

そのあとも騒ぎまわる。

麦野「とつたあ！!!」

御坂「ちよつとおばさん!!それ私の！」

麦野「誰がおばさんだゴラ！これはとつたもん勝ちなんだよ！」

垣根「はいとつた〜」

削板「これもこれも全部オレの」



騒ぐ4人。

残りの3人は別の机で静かに、争いもなく食べる。

涼音「美味しいわね」

当麻「焼肉なんかしたの久しぶりだ〜たくさん食べよ」

一方通行「あそこの争いには入れないよなア・・・」

4人のところは戦場みたいになっていた。

巻き込まれないように3人は気よ付けながら食べる。

――

削板「はー！お腹いっぱいだ！」

垣根「畜生・・・全部オレに払わせやがって・・・!!」

一方通行「コーヒー買ってこ」

涼音「本当に好きなのね？」

20・消さなきゃ、壊される

私ね、真っ白な少年に恋をしたの。

研究所で。

でも、彼は私を見てくれないの。

こんなにあなたのことを見てるのに。

少しくらいこっちを向いてくれてもいいのに。

なのに、彼は違う女性ばかり見ていたの。

私はこの天才的な頭脳で無理やり兵器とかを考えさせられていたわ。

でも、私の頭脳は物を作るときにしか役に立たない。

彼女は私と違って炎が出せた。

それだけじゃない、私より綺麗だった。

高嶺の花みたいだった。

私はそこら辺の女、花と一緒に。

並みの男では触れることさえ出来ない花。

でも彼は、振り向いてもらつたために必死に触つてたの、自分で気づかないうちに。

究所に来たとき、同い年の彼は、大人びた顔をしていた。

私はその顔を見て惚れたの。

その時から、彼と一秒でも長くいたかったからいろいろ作戦をし  
りして、

出来るだけ一緒に、振り向いて振り向いてもらえるようにしたの。

でも、振り向いてもらえなかった。

時々・・ほんの時々しか会えない彼女を見てばかりだったの。

寂しかった、彼女が憎かった。

ある日、彼は置手紙を置いて逃げ出したわ。

私はその手紙を呼んで絶望した。

「こんな、楽しくないところは出ていく。

実験できてよかったな」

って、なんで私のことが書いていないの？

私のことなんか覚えてないの？

何であの女を連れて行ったの？

おかしいよ、だって私の方が絶対に長い間そばにいた。

なのに、なんであの女なの？

酷いよ・・・酷い。

私は長い間そばにいたよ？

そんな女より長くそばに・・・

なのに・・・

何であの女なの？

その日から私は変わった。

ただ毎日、女を殺すことばかり考えてた。

そうよ、そうそう、私の方が彼に相応しいの、だからあの女はいらないの。

・・・消さなきゃ・・・

赤い糸でつながってる私たちの邪魔をされちゃう。

殺さなきゃ・・・一秒でも早く・・・どんな手を使ってでも殺さなきゃ・・・

邪魔される・・・私たちの幸せが壊される・・・

あんな「化け物」のせいで壊されたくない、あの「化け物」は消さないよ。

・・・死んじゃえばいいのに・・・

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

・・・消えて・・・!!!!!!

今日も私は同じことをする。

コピーしたあの女の写真を切り刻み、藁人形を打ち、  
体を鍛えてあの女を殺すために銃の練習をしたり・  
そんなことを毎日続ける。

だって、私たちの幸せを守るためだもん。

・・神様は許してくれるよね？

だってあの女が悪いんだから・・ね・・

## 21:ダイエツト

御坂「だーーーーー!!! やっぱりーーーーー!!!」

御坂の大声が風呂場に響く。

慌ててどうしたのかと黒子が見に来る。

黒子「おっ・・・お姉さま!?! どうなさいましたの!?!」

御坂「黒子・・・」(涙)

黒子「なぜ泣いていらっしやいますの? 何が嫌なことがありますたの!?!」

御坂「太った・・・」

黒子「・・・は?」

そう、御坂は体重が増えたことで大声を上げたのだ。  
男子なら別にどうでもいいと思うが、女子は違う。  
少しでも増えれば一大事だ。

御坂「やっぱり原因はこの前の焼肉よ・・・! 昼間から食べたし、



たくさん食べたし・・・！  
だーーーー！！やばいーーーー！！」

黒子「・・・それではダイエットなさればいいのでは？  
甘味を減らしたり、走ったりなど」

御坂「アンタね・・・今もギリギリ減らしてるの！  
それにいつもあの馬鹿追いかけまわしてそう簡単には体力はキレイな  
いし・・・」

黒子「あら・・・まあ・・・」

黒子はただ茫然としているしかなかった。

涼音「で〜？ダイエットの方法を教えてくださいってわけかしら〜？  
」

御坂「うう・・・」

涼音「別にいいわよ〜。どうせ暇だし〜」

御坂「！！ありがとう！！（\*^。^\*）」（それにしても顔文字変  
わらないわね・・・）

などと言うメールのやり取りをし、二人は御坂の寮のパソコンでダイエット方法を調べていた。  
いいものはメモし、終わったとは早速やり始める。

涼音「まずわく・・体を柔らかくすれば痩せやすい体になるっていうやつね〜」

御坂「そうね、でも私結構体柔らかいわよ?」

涼音「まずはやりましょう〜」

御坂「ええ、フー」

足を大きく開き、前に倒れていく。  
そして、後もう少しでつくところとところで止まり、戻る。

御坂「今が私の限界よ」

涼音「もうちょっといくんじゃないの?おりゃ〜」

御坂「ちよっ!無理やり押すな!いでで!ホントに無理無理無理  
—————!」

ボキッ

涼音・御坂「あっ」

直ぐに御坂に壮絶な痛みが襲い掛かる。

御坂「痛い痛い痛いー！！！！！！だー！！！！！！」

涼音「相撲さんとかは最初は今みたいにして体を柔らかくするらしいわよ」

御坂「私は相撲じゃない！！！！痛ー！！！！！！」

暫くのた打ち回る。

御坂が痛みで苦しんでいるにも関わらず、涼音はいつものように目を閉じ、ニコニコとしたままだ。  
後で一発殴ろうと誓う。

痛みがやっとなくなると、体は前より柔らかくなっていた。

涼音「すーい。やっぱりさっきのでよかったんじゃないの」

御坂「後で顔貸しなさい」

涼音「いやよ」

御坂「うるさい！顔が駄目なら私を同じ痛みを味わえ！！」

涼音「あらあら」

御坂「……なんで柔らかいのよ！！」

思いつきり前にしたのだが、涼音は簡単にペタリついてしまう。聞けば、毎日を柔らかくする運動をしているといった。

ギヤーギヤー騒ぐ御坂を無視し、涼音は外に出ようと、ドアに手をかけ、開ける。

すると、顔に向かって植木鉢が飛んできた。

とっさに炎で焼き尽くすが、前を見ても誰も居ない。

御坂「……何なの？さっきの」

涼音「……分からないわ、でも、大丈夫だったからそれでいいじゃない」

御坂「ホント……呑気ね……」

涼音「まあまあ、それじゃあ、続きしましょう」

御坂「あっ！待ちなさいよ！！」

慌てて後をついていく。

二人が見えなくなった後、いきなり壁から出てきた一人の女性が舌打ちをする。

「失敗したか・・・まあいいわ、どうせ殺すんだし・・・それに次の作戦をすればいいし・・・」  
絶対に殺してやる！！」

憎しみの顔で二人が去って行った方向を向き、そのまま歩き出す。

## 22：爆発

涼音は、いつも通りにお気楽そうにしていたが、真剣にさっきのことを考えていた。

涼音（誰もいなかった・・・瞬間移動か・・・偏光能力か・・・どつちにしょ、

何かの能力を持っているのは確かね・・・

どうやら私を狙っているようだけど、なぜ？

今まで私は何かをしたことがあったかしら・・・）

考えるが思いつかない。

外にいたときは周りは敵だらけだったが、わざわざ「化け物」と認識している自分を殺そうとするはずがない。

自分が死ぬかもしれないからだ。

実験の時もない。

あの時は誰とも話をしなかった。

ただ淡々と言われたことを人形のようにしてきただけだ。

実験の後も、あまり人と接していない。

こんな性格になったのは1年前のころだ。

涼音（誰が・・・）

御坂「あつ、ねえ、あの服可愛くない？」

涼音「どれ？ブツ！！」

指された服をみて吹き出す。  
なぜなら、子どもっぽい服だったからだ。  
意外な趣味に笑いだす。  
笑われて御坂は顔を真っ赤にする。

御坂「なっ……！！何笑ってんのよ！」

涼音「ごめんなさいね〜。だって子供っぽい服だったから……  
アハハハハッ！！！！」

御坂「……！五月蠅い五月蠅い！べつ別にいいじゃない！好きなんだから！」

涼音「ひ〜。ふふ……。ごめんなさいね〜  
でも、趣味は変えないでいなさいよ〜？」

御坂「……なんで？」

涼音「だって、それがアナタじゃない。人に言われてコロコロ変えてたら自分らしさが無くなるわよ〜？」

御坂「そういわれればそうね……。  
そうよね、人に言われても気にしちゃだめよね！だってこれが私だもの！」

涼音「そうよ〜、あっ、じゃあこれは好き？」

御坂「どれどれ〜?・・・てっ!アホか!」

持っているのは明らかに5歳くらいのこの服。  
着れるはずがない。

しかし、涼音はさっぱり分からないというような顔をする。

涼音「あらあら〜、どうして〜?」

御坂「サイズをみなさいサイズを!絶対着れないわよ!」

涼音「ああ、そういえばそうね〜。じゃあこっち〜?」

御坂「・・・今度はかすぎ・・・!!」(怒)

わざとかと思うほど、今度はかすぎる。

御坂の額に青筋が浮かぶが、涼音はやっと服のサイズに気づき、ニコニコ笑顔でもとに戻す。

御坂(天然!!?めっちゃ天然なの!!?それともわざと!!?)

涼音「そうね〜、じゃあ〜」

御坂がそう思っているとも知らず、涼音はまた選び始める。

手に取っているのは全て明らかに小さい服だ。

もはや怒りを通りこしてあきれる。



諦めてそばに行こうとしたその時、後ろがいきなり光る。

御坂「え？」

涼音「危ない！！！」

見ると、爆発の炎がすぐ目の前にあつた。  
そのまま、御坂の意識は途切れた。

――

プルルル・・・プルルルル・・・ピッ

めんどくさそうに、携帯電話の持ち主、一方通行は出る。

一方通行「なんだよクソメルヘン・・・」

垣根「酷い！！・・・じゃない！急いで来い！涼音と第3位が・・・！！

！爆発に・・・！！」

いきなりのごとに頭が真っ白になったが、すぐに戻る。

「一方通行」・・・！！！？どこの病院だ！！」

急いで病院の名前を聞き出し、能力を使い急いで向かう。

――

ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・

ガラっ！！！！

息を切らせて一方通行が病室に入ってくる。

そして、病室の中をみて息をのむ。

包帯を巻いている涼音の手を、うつむいている御坂が握っていたからだ。

きつと泣いているだろう。

先に来ていた3人も悲しそうな顔をしている。

ヨロヨロと、涼音に近づく。

いつものように目は閉じていた。

しかし、体のいたるところには包帯が巻かれ、点滴も打たれている。

暫く唾然としてしていると、カエル顔の冥土返し（ヘヴンキャンセラー）が病室に入ってきた。

直ぐに一方通行は状態を聞く。

一方通行「オイ！どうなんだ！涼音の様態はア！！！」

冥土返し「・・・危険な状態だね。そこで泣いてる子を爆発から守るために自分を盾にしたんだね。」

とつさに能力を使つたみたいだけど、やっぱり簡単な演算しかできなかつたみたいだね？

直ぐに盾は壊れたみたいだ」

泣きそうな顔をしながら、麦野は聞く。

麦野「・・・死ぬかもしれないの・・・？」

冥土返し「今は何とも言えないね・・・ただ、危ない状態なのには変わりないね」

垣根「そんな・・・どうにかしてくれよ！アイツは闇にいる俺たちを普通の人のように接してくれたんだ！

なんとかかしてくれよ！」

泣きそうな顔で言う。

もう戻れない光の世界。

そんな世界に住んでいる涼音は、光とは逆の闇の世界にいる自分たちを普通の人のように接してくれた。

正体を言っても、変わらなかった。

涼音が居なかつたら、3人は闇の中でただ寂しく一生を過ごしていただろう。

しかし、冥土返しはさらりと言う。

冥土返し「できる限りはした・・・あとは彼女しだいだ・・・」

そういうと、出て行ってしまった。

残った5人は何も言わない。

すると、御坂が震える声で謝りだした。

### 23：オマエのせいだ

御坂「……ごめ……んなさい……私の……せい……」

麦野「……アナタのせいじゃないわよ。涼音が自分で……」

それ以上は言えない、言ったら涙が零れ落ちそうだからだ。

自分の身を犠牲にしても友達を守ろうとした親友の涼音を『自分で勝手に傷ついた』などと言いたくない。

しかし、麦野の声が聞こえていないのか、御坂は言葉を続ける。

御坂「私が……私が逃げてれば……！！私が服やなんか誘わなかったら……」

私がいなかったら……！！……静奈さんは……怪我なんかしてなかった……！！」

一方通行「……そうだ……お前がいなかったら涼音は怪我をしなかったんだ……！！」

テメーのせいだア……！！」

それまで下を向いて黙っていた一方通行がいきなり大声を出す。

御坂「……」

垣根「一方通行……！！」

削板「人のせいにするのはやめろ！こいつが悪いわけじゃない！」

急いで垣根と削板が止める。

しかし、一方通行は止まらない。

さらに言い続ける。

一方通行「オレは絶対に許さねエ……！！死んでも許さねエ！！」

麦野「一方通行！！人のせいにしてんじゃないわよ！！」

御坂「……ごめんなさい……！！」

麦野「アンタも謝らなくてもいいのよ！！」

3人が必死に止めようとしてるうちに、一方通行は出て行ってしまった。

御坂はずっと涙を流して涼音の手を握り続ける。

そんな御坂の頭を、削板は手を置いてなでる。

予想していなかったことに、御坂は体を固める。

削板は気にせず、笑う。

削板「大丈夫だ！お前のせいじゃない。悪いのは……お前たちを狙ったやつだ……！！」

御坂「狙っ……た……？」

垣根「ああ、そんな何もないところが爆発するはずがない。誰かが命を狙ってたんだ」

麦野「もし見つけたら肉片も残さずに消し飛ばしてやらあ……」

削板「ここに鬼がいるぞ」

御坂「……あっ！！」

いきなり御坂が大声を出したので3人はビックリして動きを止め、御坂を見る。

そんなこと気にせず、御坂は話し出す。

御坂「そうよ……！！そっいえば私たちがジムから出たときも静奈さんに向かって植木鉢が飛んできたのよ……！！  
絶対誰かが静奈さんを狙ってる！！」

麦野「……思いついたのはいいけど、顔を拭きなさい。グシャグシャよ」

御坂「あっ、うん」

ハンカチをもらい、顔をふく。  
3人は考え込む。

削板「もし本当なら危ないぞ・・・殺される」

垣根「そうならねえように俺たちが守らないとな」

麦野「犯人はブチ殺し確定よね・・・絶対ブチ殺す!!!!!!!!!!」

削板「恐い・・・」

垣根「ホントだ・・・」

その時、涼音の手が動く。

御坂「!!静奈さん!?!」

涼音「・・・ここは・・・?」

麦野「気が付いたのね・・・よかった・・・オイ、何してやがる。さつさとあのカエル医者呼んで来いよ使えねエ野郎どもだなオイ!!」

急いで垣根が呼びに行く。

涼音は消えそうなか細い声でいろいろ聞いてくる。

涼音「・・・御坂は・・・?大丈夫・・・な・・・の・・・?」



御坂「……！！……う……ん！！私は大丈夫！軽いやけどだけ……」  
・  
ゴメンナサイ……静奈さん……！！！」

涼音は笑顔のままだ。

涼音「あらあら……アナタのせいじゃないわよ……私が狙われ  
てたから……」  
こんなことになったんだから……  
……あの人は……？」

削板「あ……オマエが傷ついたのでよっぽどショックみたいだ……」  
・  
御坂のせいだって言って出て行った……」

涼音「そう……後で話を……しておくわ……」

垣根「オイ！連れてきたぜえ！！！？？」

ドゴツ（顔面パンチされた）

麦野「うるさいんだよ！涼音は怪我してんだゴラ……ブチ殺すぞ  
オイ」（パンチした）

垣根「すっ……すみません……！！」（オレの扱いひどくね！！！？）

「

冥土返し「すごい回復力だね・・・予想外だよ。ただ、もうしばらくは安静にしておくんだね」

涼音「ええ・・・そうする・・・わ・・・ZZZZZ」

御坂「・・・このタイミングで寝るの？」

冥土返し「仕方ないよ。体力はまだ回復してないからね。話すのがやっつき。この回復力なら、あと一週間ぐらいで退院できるね？」

自分の能力のおかげかな？

無意識のうちに能力を使っているようだね。

それじゃあ、僕はいくね」

そついうと、冥土返しは出て行った。

涼音の規則正しい寝息だけが聞こえる。

## 24：分からない

垣根「……ちょっとオレ、一方通行探してくる!」

削板「あつ、じゃあオレも」

麦野「私も行くわ」

御坂「じゃあ……私も……」

麦野「アンタはここに居なさい」

御坂「……」

直ぐに止められる。

やっぱり、私のことを許していないのだろうと思ひ、下を向く。

御坂（……そうよね……親友を傷つけた私のことは憎いわよね……）

削板以外の垣根、一方通行、麦野は闇で生きている。

なのに、光の世界の涼音と一緒に居るのだ。

親友以上に大切にしているのだろう。

一方通行にしては幼馴染より大事な大事なたった一人の家族のようなものだろう。

その親友を傷つけたのだ。

許すはずがないだろうと、思い、涙を流す。  
すると、頭に温かい手が置かれる。

麦野「何泣いてんの。大丈夫よ。私達はあなたのせいにはしない。  
言ったでしょ？悪いのは涼音を狙ってるゴミ野郎。だから自分が悪いなんて思わないの」

御坂「……うん……」

削板はもちろんだが、闇で生きる2人の笑顔は暖かかった。  
闇で生きるものとは思えないほど、おかれた手と笑顔は暖かい。

御坂（ああ……この二人は救われかけてるんだ……静奈さんに……  
闇から……）

そう思い、目を細める。

涼音はあの笑顔と性格で二人を闇から出せるかもしれない。  
その証拠がこの手と笑顔だ。

御坂（すごい人……私なんか、足元にも及ばないほどすごい人……  
）

垣根「さっ、行くぜ。どうせそこらへんで缶コーヒーでも飲んでる  
だろうけどな」

削板「そうだろうな」

麦野「アンタは涼音のそばにいてあげなさい」

御坂「・・・分かったわ!!」

涙をふき、いつもの気の強い顔に戻る。

御坂の表情をみた麦野は安心して微笑み、部屋を出て行った。

再び、涼音のそばに行き、手を握る。

御坂（もし犯人を見つけたら・・・レールガンぶっ飛ばしてやる！！）

-----

部屋を出た3人は固まって一方通行を探す。

バラバラになれば会えないかもしれないからだ。この病院は大きい。

垣根「おかしいな・・・自動販売機は全部見て回ったよな？」

麦野「アイツならおんきに買ったコーヒー飲んでると思っただけど・・・」

削板「根性で探すぞ！」

垣根「・・・ん？」

ある居続け、ふと、暗い道を見る。

そこには、白いものが見えた。

気になり、近寄ってみると、一方通行が居た。

削板「なんだー！こんなところにいたのか！探したぞ！」

うっかり手を置く。

しかし、反射はされない。  
なぜか能力をきつているようだ。  
心配になり、3人は尋ねる。

麦野「どうしたのよ、いつものようにコーヒー飲んでなかったの？  
自動販売機の周りばかり探してたのに……」

一方通行「……」

垣根「……オイ、なんか言えよ」

肩を叩く。

すると、一方通行は消えそうな声で何かを呟く。

一方通行「……エ……れ……る……？」

削板「ん？なんだって？」

一方通行「……ど……すれ……まも……る……？」

麦野「何よ。ハッキリ言いなさいよ！」

肩を掴み、一方通行を壁に叩き付ける。

しかし、一方通行はつつむいたまま、またもや消えそうな声でつぶやく。

今度はなんとか聞こえた。

一方通行「・・・どオすれば・・・護れる・・・？」

垣根「はあ？おいおい、なんのことだよ」

一方通行「・・・涼音・・・大切な奴を・・・どオすれば・・・護れるんだ・・・？」

削板「なんだ、そんなの簡単じゃないか。お前と一緒に居ればいいじゃないか？」

そういつても、一方通行は顔をあげない。

一方通行「・・・自信がないんだ・・・大切な奴を・・・護れるかどオか・・・！！」

頭を抱え、座り込む。

いきなりのことに、3人はついていけない。

一方通行「オレは・・・！！恐いんだ・・・！！涼音を護れるか・・・自信がもてねエ・・・！！どオすりゃいいんだよ！！」

麦野「ちよっ・・・あんた何言ってるのよ！！」

そんなのテーマの能力使えば大丈夫だろうが！！」



一方通行「それでも・・・無理なんだ！！分からねエ・・・分からねエんだよ！！！！  
アイツが傷ついて・・・！！それで・・・命を狙われて・・・！！  
わかんねエ・・・  
オレが護らないといけねエのに・・・！！傷ついた・・・！！」

大切な人が傷つけられ、重傷を負い、一方通行は混乱している。  
何をすればいいのかわからず、ついには自分に自信が持てなくなっている。

そんな一方通行に、麦野は思いつきり拳骨をする。

麦野「ふざ・・・けんなあ！！！！！！」

一方通行「！！！！？」

頭から煙をだし、一方通行は頭を両手で押さえ、声にならない叫ぶ声をあげ、床を転がる。  
後ろで削板と垣根が

「うわ・・・痛そ・・・う・・・」

などと、言っている。

しかし、麦野の耳には届いていなかった。  
青筋を浮かべながら大声で叱る。

## 25：護る

麦野「何でそんなこと考えやがる！！テメーは第一位だろ！！  
学園都市の中で一番強いんだろ！！」

一方通行「・・・それでも無理だっと思ってしまっただよ！！」

麦野「だったら私達はどうなんだよ！！」

クローンの実験の時、私たちは敵わないとかもしれないと思いつながらテメーに挑んだ、そして勝った！

私達でもできたんだ、テメーができないわけねえだろうがよぉ！！  
！！

一方通行の胸倉をつかむ。

そっぴいわれればそっぴい。

一方通行「……………」

削板「おっ、い、麦野」

麦野「なんだよ！！？」

削板「ここ病院。周りの人の視線が痛いんだ」

麦野「あ……」

言われて気づく、周りの人たちがこつちをジロジロみている。  
大声で怒鳴り散らしていたからだろう。  
大慌てで麦野は一方通行の腕をつかみ、外に出る。

麦野「オホホホ、失礼しました〜」

病院を出た後はダッシュで路地裏に向かった。

垣根「はぁ・・・恥ずかしい目にあつた・・・  
後で叱られるかもしれねえじゃねえか！」

麦野「そうなたら私はアンタたちのせいにして逃げる」

垣根「逃げるな!!」

麦野「さぁ、一方通行、どうするの？」

無様に尻尾まいてるだけか、涼音を護るか」

問いかけても返事は帰ってこない。

まだ悩んでるらしい。

ため息をつき、頭をかく。

そして、尋ねる。

麦野「じゃあ聞くけど。アンタは涼音を護りたいの？余計に傷つく  
姿をみとくの？

・・・自分は何もせずに逃げ続けるの？大切な人が傷つくのをほっ  
といて」

一方通行「それは・・・イヤだなア・・・けどよオ」

まだはつきりしない。

次第に麦野はイラつき始める。

麦野「はつきりしないよ!!涼音だったらアンタみたいにウジウジ

なんかしねーで直ぐに護るって決めるわよ!?

アンタ男でしょ!いつまでもウジウジしてねえでさっさとハッキリしやがれクソ野郎!!」

垣根「どんだん口が悪くなる」

麦野「メルヘンは黙りなさい」

垣根「ハイ、スミマセンでした」

直ぐに謝って後ろに下がる。

この中で怒ったら怖いのは麦野だろう。

一方通行「・・・そオだよなア・・・涼音はこんなことで悩まねエ  
それによオ、オレはテメーらより強いんだから、できるよなア・・・  
・・・やってやるうじゃねエかア!!」

やっと護ると決める。

麦野は満足そうな顔でうなづく。

削板「うむ!それでこそ残忍、残酷、もやし的一方通行だ!」

一方通行「・・・喧嘩うつてるんですかア?削板くウウンン!!!!  
!?!?」

削板「いや、うつてないぞ。ただ本音がぼろっと・・・あっ」

一方通行「死体決定だクソ野郎！！！」

垣根「やめろ一方通行！！あつ！反射復活してやがる！」

麦野「何してんのよ、さつさと戻るわよ」

垣根「ちよっ！止めようか！！？」

一人でさつさと行こうとした麦野を止め、一方通行を止める。

4人は、病院に入った途端、冥土返しに大声出したことについて2時間ほど嫌というほど正座で説教をくらった。

## 26：絶対護る

正座をしていたために痺れた足で歩きながら、4人は涼音の病室に入る。

改めて正座の痛さを知った。

削板「根性で・・・我慢・・・！！痺れるっ！！」

麦野「クソ・・・あのクソカエル・・・！！いつか殺す！！」

垣根「大丈夫か涼音」

一方通行「グオオオ・・・」

涼音「あらあら、どうしたの？」

笑顔で迎える。

御坂も一緒に見ている。

御坂「・・・何してたの？」

垣根「説教くらった」

垣根「どっかの誰かさんが大声で怒鳴り散らしたからな」

麦野「え？殺されたいのかしら？」

垣根「別にテメーのことだなんていつてねえだろ？  
もしかして自覚あるのか？(^^)」

麦野「殺す！！ブチ殺してやる！！離しやがれ！！！！」

削板「麦野やめるんだ！いくら自分の性格が悪いからって自分のせいにするのはいけない！！」

麦野「よおーし！一人追加だ！！！！」

一方通行と御坂とで麦野を必死に抑える。

垣根は今までの仕返しに思いっきり馬鹿にした顔をし、  
削板はなぜ怒られたのかわからず

削板「えっ？なんでだ？オレが何かしたのか！？」

などと言い、それを聞いた麦野が

麦野「悪気がねえのがもっとむかつくんだよゴラァ！！！！！！！！！！  
！！！」

と、さらに大きな声で怒鳴り、額に青筋を浮かべる。  
すると、いきなりドアが開く。



全員で見ると、そこには怒っている冥土返しがいた。

冥土返し「・・・ちょっと話をしようか？（激怒）」

「「「「すみませんでした。もうしません」「」「」

涼音以外は全員速攻に謝る。

涼音は変わらずニコニコとしていた。

涼音「あらあら、どうして怒ってるのかしら？」

などと、のんきなことも言っていた。

強く注意をし、冥土返しが出ていく。

麦野と垣根がドアに向かって、死ねコールをしていた。

それを無視して、一方通行は話をする。

一方通行「その・・・よオ・・・さっきはオマエのせいだなっていつち  
まってその・・・

・・・悪かったな・・・」

そっぽを向く。

御坂は少し唾然としていたが、すぐに笑う。

御坂「ああ、もういいわよ。あの時だから仕方ないわよ」

一方通行「・・・フン！」

涼音「仲直りできたわね〜えら〜い」

ぽふっ

自分の胸に一方通行の顔を押し付ける。

涼音を傷つけないようにとっさに反射を解く。

直ぐに一方通行は顔を赤くして暴れる。

一方通行「なっ！！！！／／／／何しやがんだ！！離せ！！！」

涼音「うふふ〜」

麦野「あらあら、顔が赤いわよ〜？一方通行（\*^^）v」

削板「トマトみたいだな」

一方通行「うるせエ！！てか、トマトに例えるな！！なんか嫌だ！！  
とりあえず離せ！！！」

ベクトルを操作し、やっと離れる。

そして、少し顔を赤くしたまま言う。

一方通行「お前はオレが絶対護る！！絶対だ！！  
だから安心しろ！！」

涼音「・・・」

珍しく目を開き、驚いていたが、すぐに閉じ、微笑む。

涼音「そう・・・ありがとう・・・一方通行・・・」

名前を呼ぶ時、声が小さくなる。

涼音はこの名前を呼ぶのを嫌う。

本当の名前ではないのに呼ばれる一方通行が可哀そうだとおもっているからだろう。

それに気づいた一方通行は名前を考え、伝える。

一方通行「そうだな・・・今度からオレの名前は鈴科すずしなでいいぜ！」

涼音「鈴・・・科・・・？」

一方通行「ああ、そオすればいいだろ？オレの名前ってことで、な？」

涼音「鈴科・・・フフ・・・分かったわ」

笑顔になる。

皆はその笑顔を見て安心し、その日は一方通行以外は帰って行った。

## 27：襲撃

夜、一方通行は涼音の部屋で見張りをしていた。また襲われないようにだ。

ぐっすり眠っている涼音を見るたび安心するが、それでも気を抜かない。

一方通行（今も涼音を狙ってるかもしれねエ・・・オレが護らねエとなア・・・）

その時、物音がした。

警戒して立ち上がる。

耳を澄ますが、何も聞こえない。

しかし、さっきの音は絶対に気のせいではない。

一方通行（きやがったか・・・？来るならこいよ。ズタズタに引き裂いてやる）

少しずつドアに近づいていく。

そして、一気に開ける。

一方通行「・・・」

しかし、だれもない。

警戒しながらドアを閉め、涼音のそばに行こうと振り返る。

しかし、涼音の方をみて目を見開く。

なぜなら、涼音に向かって包丁を振り上げている女性がいたからだ。

考えるより先に体が動き、女性に向かって右手を出す。

しかし、女性に触れることができなかった。

一方通行「チツ！！能力者か！！？」

直ぐに涼音に触れてみる。

ちゃんと触れたので涼音はさらわれていないようだ。

すると、涼音が起きる。

涼音「鈴科・・・どうしたの・・・？」

一方通行「涼音エ！！お前は寝とけ！まだ回復してねエだろオが  
！！！」

涼音「？どつし」

言葉は続かなかった。

なぜなら、なぜか頭を誰かに殴られたからだ。

涼音「・・・！？」

声を上げることなく床に落ちる。  
衝撃で傷が開いたらしく、包帯に血がにじむ。

一方通行「涼音！！大丈夫か！」

涼音「ツツ・・・大丈夫・・・よ・・・それより・・・」

目の前にいる目を部分を隠した女性をみる。  
女性は口に笑みを浮かべ、刃物を持っている。

「・・・」

何も言わず、刃物を振り上げる。

一方通行「気を付けろよ。こいつは光系の能力者みたいだぜエ・・・」

涼音「ええ・・・」

二人は身構える。

女性は刃物を振り下ろす。

出来るだけ大きく回避する。

おそらく光をまげて自分の手の位置を変えているからだ。

涼音「どうする？能力使えないし・・・」

一方通行「・・・」

能力を使えば病院が壊れてしまう。

それはダメだ。

そのためただ逃げることしかできない。

一方通行に攻撃をすれば手を曲げたりできるのだが、おそらく涼音しか攻撃しないだろう。

そう思い、ただ女性の攻撃を避けることしかできない。

その時、いきなりドアが開き、レーザーが女性めがけて襲い掛かる。女性はとっさに逃げ、窓から逃げる。

二人はドアの方を見る。

すると、そこには麦野がいた。

麦野「あら、逃がしちゃった？ちょっとしかかすらなかったみたいね」

窓の近くには血が落ちていた。



28：アイテム＋一方通行（前書き）

お気に入り50超え・・・だと・・・!?

素人が書いた小説をこんなにたくさんの人に呼んでくれているなんて・・・!

とても嬉しいです、ありがとうございます!!

これからも面白い話を頑張って考えていきます!

## 28：アイテム＋一方通行

一方通行「ありがとなー、麦野ー」（棒読み）

麦野「棒読みやめる。ちゃんと感謝しなさいよ。

気になったからアイテムの全員で見に行ったらアンタたちが戦ってたから助けてあげたのに。  
とっ、言うわけでおくれ」

一方通行「別にいいけどよオ」

一方通行とアイテムのメンバーは近くのファミレスに来ていた。  
今は、垣根と削板が涼音を護っている。  
交代だ。

フレンド「アナタって本当に真っ白だね。羨ましい」

本当に羨ましそうな目でみる。

紫外線も反射している一方通行の肌は焼けていないため、真っ白だ。

一方通行「肌が白くても別になんもいいことねえぞ」

絹旗「女子は肌が白い方がいいんです。だから私も毎日焼け止め塗ってますよ。

50+」

一方通行「そういやア、ずいぶん前の番組で日の光が強い日じゃないときに強い日焼け止めはあんまりよくねエっていったなア」

絹旗「マジですか!!!??」

一方通行「知らねエよ。興味ねえ」

日焼け止めの話で盛り上がり始める。

滝壺は一人ボクとしていた。

麦野「まつ、とりあえず。涼音が命を狙われていることはこれで確定したわね。

後はあの女をどうするかよ。光系の能力者ってめんどくさいのよね」

ズズと、ジュースを飲む。

本当に光系の能力はめんどうなのだ。

光をまげて自分の手が曲がっているように見せてくるからだ。

攻撃した場所に虚像を作り、全然違う方向から攻撃してきたりする。

一方通行「ぶっ壊してもイイ建物の中に入れば建物ごと壊して殺せるんだけどなア・・・  
ンなことしてくれるわけねエな」

麦野「うーん・・・周りになんにも無いところに誘い込むんで当

たりかまわず攻撃するか、相手の体の一部を捕まえて攻撃するか・  
」

フレンド「その涼音とか言う人を囷に使えばいいんじゃないの？」

一方通行「・・・そオするしかねエか・・・」

これは一番使いたくなかった作戦だが仕方がない。  
遊びに出かけるふりをして誰も居ないところに誘いこむしかない。

麦野「まっ、こいつらも手伝わせるから安心して。特に滝壺がいる  
から、ね」

滝壺「・・・任せて」

無表情で親指を立てる。

しかし、正直見た感じ、頼りになるとは思えない。

一方通行（この女、ホントに使えんのかア？）

フレンド「結局、麦野に巻き込まれたって訳よ」

麦野「いいじゃない」

普通の女子らしくしゃべりだす。

心の中で「いつもこんなふうにしてねばもてるのに」「とか思ったのは秘密だ。

## 28：アイテム＋一方通行（後書き）

いや、日が強くないときに、強い日焼け止め（50＋とか）はあまりよくないってずいぶん前に聞いたことあるんですよ。

・・・ずいぶん前から本当かどうかは覚えてません。

## 29：嵐の前

涼音「久しぶりの外は気持ちいいわね」

やっと退院できた涼音は空気を吸う。

一週間、ベットの上に居たので退屈だったのだ。

垣根「よかったな。あの女も襲ってこなかったし」

削板「そうだな！」

いつものメンバー＋アイテムは喋りながら街を歩く。

今日こそ、あの女を捕まえるつもりだ。

事前に涼音にも話をしている。

涼音「クレープ美味しいわね」

麦野「いつの間を買ったのよ」

涼音「さっき」

麦野「気づかなかった・・・」

どこにでもいる学生のように笑いあう。





垣根「いいじゃねえか。別に間接キスくらい」

一方通行「殺す！！！！ぶつ殺す！！！！」

垣根「別に涼音はテメーの彼女じゃねえだろうが！！！！」

喧嘩を始める二人。

麦野は涼音に話が聞こえない様に涼音の耳をふさぎ、10メートル離れたところに連れて行っている。

涼音は気にせずに美味しそうにクレープを食べ続けている。

削板とアイテムのメンバーは楽しそうにその光景を見て、笑う。

しかし、楽しそうにしている彼らにある女性がひっそりと見ていた。

「憎い・・・憎いの・・・！！あの「化け物」が・・・！！  
絶対に殺す・・・！！」

親指の爪を噛みながら悔しそうに顔をいがませる。  
そして、武器をたくさん持ち、後をつけ始める。

垣根（・・・来たか・・・）

隣にいる麦野を見る。

麦野と目があり、お互いうなずく。

麦野も気が付いたらしい。

垣根「一方通行・・・」

一方通行「ああ・・・分かってるぜエ」

削板「おい！ちょっと暗いところいってもみないか！いいところ！」

変わらない笑顔で先頭を歩き、路地裏に行く。

これは彼の役目だ。

皆もごく普通に後をついていく。

すると、思った通り、気配はついてくる。

――

暫く歩き、大分奥まで来た。

ここならビルを崩してもあまり聞こえないだろう。  
ビルの中に入り、演技を続ける。

涼音「かなり古いわね．．．カビてるのかしら？」

フレンダ「イヤ、ただ汚れてるだけだと思っただけど．．．」

絹旗「あれ見てください。超汚いですよ」

滝壺「どれ？」

絹旗「ほら、これですよ」

指を指し、近づいていく。

ほかのみんなはごく普通にしている。

しかし、次の瞬間。

ビルに一気に亀裂が入った。

一方通行「!!!？」

垣根「みんな逃げ・・・!!」

言葉は続かなかった。

なぜなら、一気に崩れてきたからだ。

叫び声をあげることできないまま、がれきに埋まった。

「やった・・・!やったわ!!ついにやったのよ!!」

アハハハハ!!これで私たちを邪魔するやつはいない!!  
ねえ!!一方通行くん!!」

笑顔で愛おしい人を見る。

愛おしい人は、ただ茫然と立っていた。

一方通行「す・・・涼音・・・」

能力のおかげで無傷の一方通行は涼音のいるはずのがれきを見る。  
が、すぐに瓦礫を取り除き始める。

女は笑いながらその姿を見る。

「やったやった!!!邪魔者は死んだわ!これで私たちの恋を邪魔  
するやつはいない!

「一方通行くんも喜んでよ!!」

一方通行「涼音!! 麦野! クソメルヘン!! 削板ア!!!!!!  
.....なんで返事しねエんだよオ.....!!」

いかりで拳を床に叩き付ける。

能力のため、一方通行の拳を中心に、半径の5メートルくらいが大破する。

そのうち、女は笑うのをやめ、無表情で近づき、喋りだした。

「ねえ、なんで喜ばないの？」

死んだ人たちが何しようとしてたのかは知ってるよ。  
わざとついてきて、逆にやったのよ。

一方通行くんも望んでたことでしょ?」

本当に分からないらしく、少し顔をいがめた。  
その顔を見ると、怒りがわいてきた。

目の前の女はみんなを殺した

友達を殺した

ライバルを殺した

オレの.....好きな奴を殺した.....!!!

能力を使い、瓦礫を投げ飛ばす。  
すると、確かに当たる場所に投げたはずなのに、瓦礫が曲がった。  
どうやら光を曲げているらしい。  
その時、思いついた。

一方通行「もオこんな壊れちまつてるからなあ……  
もオ、暴れてもいいよな？」

「!!!!!!?」

次の瞬間、次々と高速で瓦礫が向かってきた。  
何とかよけるが、少しかすってしまった。血が流れてきたが、気にしない。

「……なんで……?なんでこんなことするの!?!」

一方通行「それはこっちのセリフだア!!!この……クソ女がアアアアアアアアア!!!」

「待て!!!一方通行!!!!」

ピタッと、音が聞こえてきそうなほどに止まる。  
見ると、そこには埃や土はついて、少し傷を負っているが無事の仲

間がいた。

麦野「たくつ、私たちをなんだと思ってるの？レベル5よ？あれくらい、防げるわよ。」

「・・・さて・・・ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・いの女かしら？」

削板「根性だ！！！」

一方通行「お前ら・・・涼音は！！？涼音どうしたんだ！！！」

涼音「私はここよ」

一方通行「大丈夫か！？怪我してないか！？頭とか大丈夫か！！？」

涼音「大丈夫よ？」

ペタペタと怪我がないか触りまくる。

もし、人通りの多いところでそんなことをしていたら、通報されていただろう。

その光景をみていた女は、涼音を睨む。

「そう・・・まだ私の方を向いてくれないのね・・・  
だったら・・・その女を肉片も残さずに殺して、私を見てもらうわ！！！！」



涼音に向けて、ナイフを投げる。  
しかし、ナイフは誰かの手によってふさがれた。

絹旗「超危ないですね・・・」

そういい、ナイフを持つ。

能力を使ったため、無傷だ。

悔しそうに唇をかみ、目つきを鋭くする。

「何でみんな邪魔をするの・・・？」

その女が私達の邪魔をしてるから邪魔される前に殺そうとしてるだけなのに・・・ね！！！！」

先に、円形の刃物が付いた紐みたいなものを振り回し始める。  
皆はすぐに真剣になる。

31:アイツが「化け物」ならオレも「化け物」　オレが「人間」ならアイツも

「おらあっ」

紐でつながれている円形の回転している刃物を飛ばしてくる。  
皆は大きくよける。

「ほらほら！ちゃんとよけないと当たっちゃうよ！！」

先ほどの普通の顔は消え去り、顔をいがませ、口が裂けるほどの笑  
みを浮かべていた。

完全に、「闇」の世界に生きる者の顔だ。  
性格も少し変わっている。

麦野「調子に乗ってんじゃ・・・ねえよ！！！！」

少しキレ気味の麦野がメルトダウンを放つ。

腹に直撃し、女の体は二つに分かれ、血が噴き出す。  
しかし、女は笑っていた。

麦野（ちいっ！レベル4くらいの能力者か！？）

「あつは、どこみてんの？私はここだ・・・よ！！！！」

麦野「チッ！！」

いきなり後ろから現れ、銃からレーザーを撃つ。

何とか体をまげてよけるが、腹を思いつき蹴られる。

しかし、麦野は笑う。

まるで、勝ったかのように。

その笑みに女は気付き、後ろを見る、すると、そこには垣根がいた。足元も見ると、いつの間にかフレンドが白い線を引いていた。

垣根は口を吊り上げ、女に向かって羽根を伸ばす。

フレンドは、にやりと笑って線に火をつける。

次の瞬間、大爆発が起こった。

皆は黙って、煙と埃が消えるのを待つ。

麦野なら、能力を使って無傷だが、女は跡形もなく消し飛んでいるだろう。

誰もがそう思っていた。

笑い声が聞こえるまでは。

「まったく、危ないわね」

一方通行「！！何で生きてやがるんだ！」

平然と上半身を表す。

涼音は、麦野が居ないことに気付く。

涼音「・・・麦野をどうしたの・・・」

「麦野お？あつ、もしかしてこれのこと？」

そついい、左手を上にあげる。

アイテムと、涼音は声を上げる。

なぜなら、女が持っていたのはボロボロの麦野だったからだ。体中血まみれの麦野は少しも動かない。

直ぐに一方通行がベクトルを操作し、女に近づく。

女は予想していたらしく、麦野を離し、軽くよける。  
落ちた麦野を、慌てて女子たちが拾い、涼音が能力を使って治し始める。

絹旗「麦野！！麦野！」

滝壺「麦野、死んじゃうの・・・？」

フレンド「なっ！馬鹿なこと言わないで！麦野は死なないわ！」

涼音「早く治さないと・・・！」

削板「涼音、任せたぞ！」

真剣な目つきでうなづく。

少し、潤んでいたが、何も言わずに削板は前を向く。  
そして、能力を使う。

削板「うおおおおお！！！！すごいパーーーーンチ！！！！！！！！！！」

女に向かって衝撃波みたいなものが飛んでくる。

しかし、女は逃げようともせず、笑いながらそれをみる。  
なぜ逃げない？そう思ったが、すぐに消えた。  
なぜなら、女が消えたからだ。

涼音「・・・軍覇！！後ろ！！！」

削板「えっ？」

言われて後ろを振り向くと、あの刃物を振り上げた女がいた。そして、手を振り下ろす。

次の瞬間、削板は血を流し、倒れた。

涼音は顔を青くして、削板を見る。

どう見ても致命傷の傷だ。

今すぐ治さないといけない。

しかし、

涼音（沈利も危ない・・・！！）「誰かお願い！軍覇をこっちに運んで！！！」

垣根「分かった」

垣根が動く。

女はずっと一方通行を見ている。

「驚いた？ けっこう便利な能力でしょ？」

一方通行「・・・テメーのはめんどくせエ能力だな」

「あつ、駄目よ。名前で呼んで。私の名前は橘樹たちばな 悠ほるか。  
ちゃんと覚えてね。」  
一方通行くんだけね

垣根「ガハッ！！！！」

削板に近寄ろうとしていた垣根の背中が斬れ、血があふれ出る。

目を向けると、垣根だけでなく、アイテムも次々に血を流し、倒れていく。

最終的に残ったのは一方通行と涼音だけだ。

返り血を浴びた橘樹は笑顔で仲間の死でショックを受けて動けない涼音に近づいていく。

一方通行「やめろ！！ぐうっ！！！」

突如、嫌な音がし始めた。

それでも、涼音を助けようとするが、体が動かない。

そして、能力も使えない。

驚いているとき、橘樹が涼音の腹を撃った。

涼音「グッ」

橘樹「ほらほら、痛い！？痛いかしら！？この「化け物」が！！！」

一方通行「やめろオ！！！」

その声で蹴るのをやめた橘樹は冷やかな目で一方通行を見る。

橘樹「なんで？だって、この「化け物」が私たちの邪魔をするんだよ！？」

この女は「化け物」なんだよ！！？」

一方通行「違う！！！」

大声で怒鳴る。

橘樹がおびえたように一步下がった。

動かない体を無理やり動かし、一方通行は立ち上がる。

一方通行「涼音はなア……！！」「化け物」なんかじゃねエ！！！！  
もしそうなら……涼音が「化け物」ならオレも「化け物」だア……  
……！！

オレが「人間」なら涼音も「人間」だア！！！！

涼音はオレの命を救った恩人だしなア……オレは涼音が好きなんだよオ！！

分かったかこの三下がアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！

暫くの間、橘樹は茫然としていたが、すぐにもとの顔に戻る。そして話始めた。

橘樹「だったらその女を殺せば一方通行くんは私のことを見てくれ



るんだね？

私、天才だから。能力を使えない様に準備もしてんだよ。そこに機械があるでしょ？あれだよ。

まっ、今からじゃ間に合わないけどね。

じゃっ・・・バイバイ」

刃物を振り上げる。

涼音は目をつぶるが、諦めずに演算をしようと必死に頭を使う。

一方通行の叫び声が響く。

しかし、次の瞬間、炎が橘樹を包んだ。

紅の炎が橘樹を包み込む。

橘樹「なっ！なんで！？能力は使えないはずなのに！！熱い！！熱い！！」

あまりの熱さにのたうちまわる。

涼音と一方通行は茫然としながら、機械が置いてある方を見る。すると、そこには血を流した削板が機械を壊していた。

削板「へっ・・・へへ・・・！役に立ったたろ・・・？」

血の気のない顔で笑う。

すると、気絶していた麦野が意識を取り戻し、のた打ち回っている女に手を向け。

麦野「よくも・・・私の親友を・・・蹴ったなこの・・・下衆野郎！！！」

橘樹「！！？」

自分に向かってくるメルトダウンナーを見て、橘樹は驚く。  
が、すぐに叫びだす。

橘樹「なんで!!?!?なんでみてくれないの!!?!?  
私は一方通行くんのが大好きなのに!!?!  
何だよ・・・何でなのよー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

橘樹はメルトダウンに包み込まれ、跡形もなく消えて行った。  
暫くの間、皆は黙っていたが、お互い顔を見合わせ、地面に転がる。

垣根「おっ・・・終わった~~~~・・・」

麦野「死にそ〜涼音治して〜」

涼音「いいわよ〜」

みるみるうちに治っていく。

その時、削板が一方通行の言葉を思い出し、言う。

削板「そういえば、一方通行は涼音のことが好きだったのか?」

フレンジ「さっき思いつきりいつてたじゃん」

絹旗「超意外な告白の仕方ですね」

一方通行「だーーーーー!!!!!! いうないうなーーーーー!!!!!!」

すると、話を聞いていた、涼音が一方通行に近寄り、言う。

涼音「私も好きよ」

一方通行「!!!??」

垣根「クソ!!! 面白くねえ!!!」

悔しそうに爪を噛む。

しかし、次の一言は誰も予想できなかった。

涼音「これからも幼馴染としてよろしくね」

一気にみんながこける。

一方通行はうつぶせになり、何やらブツブツつぶやいている。

涼音だけは訳が分からず、首をかしげていた。

### 32：恋のライバル出現

一方通行「もオ・・・どうにかしてくれエ・・・」

垣根「オレにも何もできねえ。ラーメンうめえ」

学校の食堂でラーメンを食べ、泣きそうな顔で言う。

垣根は横で厭きた顔で同じくラーメンを食べる。

涼音にさりげなく告白したいなものをしたのだが、鈍感なのか、気づいてもらえなかったからだ。

それからしばらくしても一方通行はウジウジ落ち込んでいる。

麦野が何回もキレてもだ。

そんな状態のまま、夏休みが終わってしまった。

涼音「あらあら、なんで鈴科は落ち込んでるのかしら？」

麦野「アンタねえ・・・」

涼音「？」

ため息をつかれ、涼音は首をかしげる。

本当に分かっているらしい。

削板も、一方通行にもう根性根性と言わなくなるほどだ。

それほど落ち込んでしまっている。

そんな時、黒髪の一人の男が涼音に近づいてきた。

「……………」

一直線にこっちに向かってくる男を見て、麦野は警戒する。

麦野「何？あの男。知り合い？」

涼音「え〜と……知り合いじゃないわね〜」

そのまま近づいてき、涼音の前で男は止まる。  
何事かと、男3人もみる。

そんなこと気にせず、男は涼音に花束を渡し、言う。

「涼音さん……！オレと付き合ってください……！！」

「……………」  
「……………」  
「……………」

食堂の全員が黙る。

暫くして、「告白?」「えっ?こんなところで?」「ムードねえなw」とか、小声で言い始める。

涼音は珍しく目を開けて驚いている。いきなり言われれば誰でも驚くが。

イケメンに入る男は、気にせずしゃべりだす。

「オレは一目見たときから涼音さんが好きやってん!!--それで夏休みが終わったら告白しよう決めてた!

涼音さん!!オレと付き合って!「オートツ!!!手も足も何もかも滑った!-----!」「どあち-----!!!!!!!」

明らかにわざと、一方通行と垣根が熱々のラーメンを男に向かって投げる。

熱々のラーメンのスープと麺を頭からかぶった男はあまりの熱さに大声を上げる。

大声を上げている男の腕を二人でつかむと、垣根と一方通行は走り出し、食堂を出る。

全員ポカンとその姿をみている。

麦野と涼音、削板も同じくポカンとしていたが、追いかけて始めた。

屋上に来た3人は、すぐに騒ぎ始める。

まず、男を壁に叩き付け、二人が怒り始める。

「アイタ!!」

一方通行「テメー、どういつつもりだこの三下ア————!!!」

垣根「ぶつ殺すぞゴラアツ!!!」

「何やねん!!!オレの邪魔すんな!!!」

ラーメンの麵を頭に乗せたまま、怒る。

そんなところに、追いかけてきた3人が追いついた。

涼音の姿を見た途端、男は涼音の手を取り、顔を近づける。



「涼音さん!!オレと付き合ってくれ!!オレは本気や!!」

涼音「・・・ラーメン臭い・・・」

「!!!!!??」

涼音がボソツとつぶやく。

男はショックを受けたが、すぐに立ち直る。

「そうか・・・涼音さんはツンデレなんか・・・!!でもツンデレでもオレは涼音さんを愛せるう!!!!!??」

いきなり、男が頭を押さえ、床を転がり始める。

そんな男を、誰かが足で踏みつけた。

踏みつけている人を見ると、知らない女子がいた。

「たくつ・・・テメーは何してんだこのカス。髪の毛全部抜くぞゴラァ」

そついい、男の髪の毛を掴み、本当に抜こうとする。

男は痛いのだろう、謝りはじめる。

「いてててて！！マジゴメンナサイ！！だから髪の毛抜かんといて  
ーーーー！！」

「次やったらしばきたおすぞ」

そっすい、手を離す。

だが、2、3本抜けたらしく、手を振っている。  
そして、涼音に謝る。

「ホンマごめん。このアホ、カスヤから許したって。な？」

そっすいながら、男を蹴り続ける。  
皆は苦笑いするしかない。

「うちの名前は<sup>おおかわ</sup>大川 <sup>かおし</sup>薫や。このゴミカスが迷惑かけてごめんな！。  
ほら、<sup>しにかわ</sup>西川もさっさと謝らんかい。土下座して」

西川「なんでお前はそっすやって直ぐにオレに土下座させようとする  
ねん！！  
イジメか！！」

大川「うちさヤから、人を虐めるのが楽しいねん。特に、アホな  
お前を虐めるときがなあ・・・」

西川「・・・」

悪魔の笑みで西川を見る。すると、西川はもうダッシュで逃げた。追いかけてもせず、大川は涼音と話す。

大川「アイツ、惚れたら一直線やと思うから、これからもストーリーみたいにつきまとうと思うねん。  
もし迷惑なことしたらうちにいつてな。しばいたるから」

涼音「えっ・・・ええ・・・ありがとう・・・？」

はにかみながら礼を言う。

言うことがいちいち毒舌だし、本当にやりそうだからだ。

そのまま、大川は西川を追いかけてどっかに行ってしまった。  
残されたレベル5たちは呆然としていたが、垣根と一方通行はギラついた目で西川がさった方向をみていた。

### 33・川川コンビ

大川「今すぐ土下座して謝ってこいこのカス野郎」

西川「いででででっ！！！髪！！髪が！！剥げる！！！！」

大川「剥げるゴミカス」

床に西川を寝転がせ、その上に押し掛かり、髪の毛を引っ張りながら、毒舌で話をする。

友達として先ほどのことが許せないからだ。

大川「本当に恥ずかしい、何しやがってんだよテメーはよあ。

血まみれにしてゴミ箱に捨てるぞカス」

西川「それはやめて！！！！！！てかつ！オレは悪くないわ！！オレはただ気持ちをすぐにでも伝えたくて・・・！！」

大川「伝えたくてなんでこうなるのかなー？おんどりゃこのドアホが！！！！！！」

西川「いでででっ！！腰！！腰が折れる！！！！」

あまりの痛さに涙目になる。

やっと手を離れたころには、口から魂が抜け賭けだった。

田舎で育った大川は、小さい時から重いものを運んだり、畑を駆けまわったりしていたので、普通の女子より力が強く、足が速い。能力を使わなくても痛い目に合う。

大川「・・・で？なんで好きになっただんや？」

怒るのをやめた大川は、尋ねる。

その瞬間、西川はいきなり起き上がり、話し出した。

西川「！！！！オレは涼音さんが転入してきたときから一目ぼれやつてん！！」

もー！メモメモやで！あの美しさと可愛さを兼ね備えた笑顔を見たらオレはもうその日一日幸せや・・・！！」

大川「うぜえ」

西川「まだその時は告白できひんかったけど、夏休み中に猛練習したから今日してん！！」

大川「うん、何の猛練習？」

西川「えっ？告白の」

大川「へっ・・・でっ？宿題は？」

西川「そんなの後や！！一番に涼音さん！！」

そっぴい終わつた時、大川が西川の頬を持ち、思いつきり引つ張り始めた。

西川「いひゃいひゃい！！！！」

大川「んなことしとる暇があるんやつたら宿題せえ宿題を！！！！その腐つた根性うちが血反吐吐かせてでも叩き直したるかボケエ！！！！」

委員長の大川には許せなかつた。

彼女は口が悪いが、嘘はつかず、また、誰にでも同じように接するのでみんなからは信頼されている。

そんな彼女に、多くの男子が告白するのだが、大川は恋愛に興味ないので、今まで一回も付き合つたことがない。

いつも西川と一緒にいるため、男子にちやかされたりするのだが、すぐに鉄拳で黙らせる。

そんな西川も、裏表が無い性格と、面白いことをしてよくみんなを笑わせるので、信頼されている。

大川と同じく、告白されたことは何回もあるのだが、自分が本当に好きになつた相手ではないと付き合いわないと決めているらしく、一回も付き合つたことはない。

西川「んなこといわれてもなあ・・・初めての一目ぼれやしなあ・・・」

大川「ただの一目ぼれでそんなことができるお前にマジ引くわ。近寄らんとして、空気が腐るからついでに息もせんとして」

西川「オレに死ねと!!??」

「は〜い、そこの漫才やめろ。授業するぞ」

大川「漫才とちやいますよ、コイツがアホやから仕方なく付き合ってるだけですよ」

「そうか、まあ、西川はアホだから仕方がないな」

西川「え〜〜!!??なんやそれ!!おかしくないか!!?」

「は〜い西川、廊下立ってる〜」

西川「なんでやねん!!!!おかしいやないか!!!大川も同罪や!!!」

そついい、大川を見ると、席につき、馬鹿にした目でこちらをみていた。

大川「人のせいにしないでもらえませんか?西川」

西川「殺す!!」

大川「逆に殺す」

西川「ごめんなさい」

クラス全員が笑う。

こんなのは日常だが、やはり笑ってしまふ。  
すると、西川が大声で言い始めた。

西川「見とけよ！！絶対に涼音さんと付き合っねんからな！！」

大川「そりゃ、永遠に無理なことやな。考えんでも分かるやろ。  
それとも、考えても分からないアホなんか？」

西川が暴れだすが、最終的には、廊下につまみ出され、廊下でシクシク泣きながら体育座りをしていた。



### 34：カスはカス

授業が始まっても、レベル5たちは茫然としたままだった。涼音を除いて。

涼音だけはいつものようにニコニコしたままだった。

今の状況をあまり分かっていないのかもしれない。

そのまま、放課後になり、帰ることになった。

垣根「・・・なあ、あの男殺していいか？」

一方通行「あつ、だったらオレもやりてエ」

麦野「どうでもいいわよ」

ここで誰も止めないのはいつものことだ。

涼音「ねえねえ、帰りにクレープ食べていきましょ」

削板「腹減ったからちようどいいな！」

そついい、校門に近づく。

その時、麦野を見た。

門の周りでウロウロしている変態を。

純粹な涼音が汚されないうちにと、無理やり方向を変える。

訳が分からないまま、涼音は素直に従って曲がる。

しかし、いきなり曲がったのがダメだったのか、見つかり、すごい勢いで走ってきた。

西川「涼音さあ~~~~ん？」

麦野「うぜえ！！涼音に近づくんじゃねえよお！！！！！」

涼音を抱え、逃げる。

最初は茫然としていた男子たちだが、慌てて後を追いつめた。麦野もそれなりに足は速いのだが、西川はそれ以上の速さで追いかけてくる。

西川「待てーーーー！！！」

垣根「アイツ結構速くね！！？」

一方通行「ンアー？馬鹿力じゃねエのオ？」

垣根「あつ！！テメーベクトルでズルしやがって……！」

削板「どうぞぞ！こんなの根性でがんばれ！」

垣根「いや、それできるのお前だけ」

削板「え？」

涼音「あらあら〜追いかけてっこかしら〜？」

麦野に抱きかかえられたままのんびりいう。

その時、一方通行は気づいた。

抱き方がお姫様だっこだということに。

一方通行（アレー？このクソ女何してやがってんだア？オレより先に涼音をお姫様だっこ？生殺しにするぞゴリアッ！！！！！！！！）

麦野（なんかすごい殺気が・・・！）

普通の人なら震え上がる殺気を当てられながら、逃げる。

気が付けば、あと一メートルで追いつかれる。

このままでは駄目だ！そう思った時。

西川が吹っ飛んだ。

全員「……………はっ？」「」「」「」

呆然とする。

そのまま西川は吹っ飛び、顔面から落ちる。

最初は何が起こったのか分からなかったが、大川がいつのをみて分かった。

とび蹴りをしたらしい。

額から血がどくどく流れながら、西川は怒る。

西川「いつてえ・・・何すんねんこの馬鹿!!!  
いちいち邪魔すんなや!!!」

その言葉を聞いた大川に青筋が浮かぶ。  
そして、怒鳴り始める。

大川「何やとこのカス!!! テメーさっきうちが言ったこと分かってんのかよお!!!??  
何また迷惑かけよるんじゃ!!!  
このカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカス  
!!!!!!!!!」

西川「ぐおおお・・・言葉の刃が・・・!!!」

大川「テメーはバカか!!!? こんな簡単なことも考えても考えても分からん馬鹿なんか!!!??

おんどれはどんなけ脳みそないんじゃ、中身空っぽすぎてもう音もならんか!? ええ!!!??

もう空気の無駄やから息止めて、ついでに心臓も止めて地獄行ってお前みたいなクソボケカスにはピタリやな? だってカスやからな

？カスにはそこがお似合いやな。ホンマにいつてこんかいこの、下衆が」

西川「毒舌・・・！！」

心を傷づけられた西川はシクシク泣き出す。

鬼の形相から一変し、いつものクールな表情で大川はレベル5たちと話し出す。

大川「ごめんなー、注意したばっかやねんけどこいつアホやん？やから何回行っても分からへんねん。

カスやから見逃したってな。

後、またこんな変なことしたら問答無用で殴っていいで？  
もしうざかったら目玉抉り出して髪の毛全部抜いて血まみれにしてもいいで」

クールな顔で恐ろしいこと言い出す。

皆は苦笑いするしかない。

話し終わると、大川は西川を片手で引きずり、帰って行った。

皆は、またもや茫然としたが、気を取り直し、クレープ屋に向かった。

35：食べかけ（前書き）

お気に入りか70超え・・・

こんな駄作を呼んでくださりありがとうございます！！！！！

### 35：食べかけ

それぞれ、買ったクレープを食べながら、ベンチに座る。  
焼きたてのクレープの生地もモチモチとして美味しいが、中身はも  
っと美味しい。

麦野「おいし〜 久しぶりに食べたわ。やっぱり、久しぶりだとも  
っと美味しく感じるわね」

一方通行「・・・甘エ・・・」

涼音「美味しいわね〜、あっ、それ一口ちょうどいい」

垣根「いいぜ、ほら」

涼音「ありがと〜」

そういい、垣根の食べかけのクレープを一口かじる。  
頬にクリームをつけ、本当に美味しそうに食べる。  
すると、垣根が

垣根「ホホにクリームついてるぜ」

一方通行「!!!?」

そついい、舌でなめとる。

見ていた周りの人たちは「熱いね〜」「恋人か？」などと言う。  
すると、一方通行は怒る。

鬼も悪魔も逃げ出しそんな顔で垣根の首を絞め始めた。

垣根「ぐえっ!!がっ・・・はっ・・・!!」

一方通行「テメー・・・」

ぶっ殺おおおおおおおおおおす!!!!!!!!!!!!!!」

垣根「へっ・・・気づいてない・・・のかよ・・・涼音のしたことを・・・」

一方通行「・・・」

必死に思い出す。

涼音が欲しいと言ってエ、クソメルヘンの食べかけを一口・・・ん  
っ？食べかけ？

思い出し、垣根をほり投げた。

しかし、垣根は能力を使い、羽根を出したため、怪我をしなかった。  
聞こえるように舌打ちを連続でする。

すると、心が傷ついたのか、垣根は涙を流しはじめる。





垣根・一方通行「ぎゃあああああああああああああああああああああああ  
ああ！！！！！！」

凄い剣幕で追いかけて始めた。

当然、二人は逃げる。

たとえ、二人が麦野より強くても、今の麦野と戦うことなんてできない。

戦おうとすれば、足がすくみ、動けなくなってしまう。

ほのぼのと削板と涼音はクレープを食べ続ける。

削板「うまいな」

涼音「本当ね」

ほほえましい光景と、地獄のような光景があった。

そして、そんなほほえましい光景に近づく一つの不審な影があった。不審な影は、涼音に一目ぼれした西川だ。

大川から逃げ、ライバルがない今のうちに出たい、近づいてきたのだらう。

しかし、そんな彼の行動を不信に思った周りの人たちに風紀委員をジャッジメント呼ばれ、どこかに連れて行かれてしまった。

西川に気が付いていた垣根と一方通行は、通報した人に心の中から「Nice!!!」と感謝していた。しかし、次の瞬間、二人の近くを「原子崩し」が通った、

35：食べかけ（後書き）

作者「今日は記念すべき日、お気に入りか70を超えた日。  
つーわけでケーキ食おうぜ。うちは金払わんけど」

垣根「払えよ」

作者「馬鹿野郎。そんなこと言ったら一方通行に涼音をあげちゃ  
うよ」

垣根「買ってきます!!」

### 36：座標移動

大川「すみませんでした。本当にスミマセン。このカスは骨の髄まで常識を叩き込ませます」

黒子「いえ、そこまでなさらなくてもよろしいのですが、その気持ちはよく分かりますわ！」

西川「やる！！？好きな人がおると体が勝手に動いてまうねんな！」

黒子「ええ！まったくそうですわ！！おそらくその涼音さんとやはツンデレですわ！！」

西川「ツンデレ！？マジかい！じゃあ、オレのことすきやねんな！！？」

大川「失礼しました」

まだ会話を続ける西川を引きずり、大川は風紀委員の本部を出て行った。

大川（ここにも同種がおったんかい・・・もう二度と来させんとかなアカンのう・・・）

西川「いや、あの人とは話が合うわ。なっ、大川もそうおもわへん！？」

大川「じゃかあしいわ!!!」

西川の顔面に蹴りが入った。

二人は、近くのファミレスで晩御飯を食べていた。

大川「まったく・・・アンタにはあきれられるわ。その根性はどこからくるんや」

西川「もちろん!!愛に決まってるやろ!!」

そういうと、大川は思いつきり顔を歪める。

大川「・・・寒っ本当にそんなこというやつ折るんやのう・・・吐き気がするほど気持ち悪い」

西川「毒を吐くな!!」

大川「毒吐きまくったるわ。お前みたいなチビに何ができるんや?涼音さん背が高いで。」

もう少しで170ぐらいあるんやないか?

それにくらべてお前は・・・160あんのか?」

目を細めて馬鹿にするように西川を見下す。  
当然、西川は怒る。

西川「ギリギリあるわ!!160・2や!!」

大川「ほぐ、靴下で伸びてんのちゃうんかい」

西川「失礼な!!測ってみい!!」

大川「測って160なかったらどないすんねん」

西川「なかつたら今まで怒鳴ってスミマセンでしたって土下座してあやまつたるわ！」

ほなお前もどうすんねん！！」

大川「うちか？うちはお前にマッサージしたるわ。死ぬほど痛気持ちいいマッサージをなあ・・・」

にやりと笑う。

死ぬほど痛いマッサージをするつもりなのが、すぐに分かった。

大川「だいたいなあ、お前が小さいせいでちら凸凹コンビとか言われてんねんで・・・  
おどれのせいじゃわれえ！！！」

西川「オレのせいちゃうわ！お前がでかいだけや！！！」

大川「はあ！？186のどこがでかいねん！！！」

西川「でかいわ！でかすぎやわ！！その無駄な身長寄越せ！！！」

大川「テメーなんざにやる身長はねえんだよあ！！！」

「あの、少し静かに」

そういわれ、横を見ると、涙目で笑っている店長さんがいた。

二人の会話が面白かったのだろう。  
慌てて、二人は謝る。  
すると、すぐに別の声がかかった。

一方通行「よオ、三下ア」

垣根「よお、クソチビ」

西川「・・・俺だけにいつてんのか？」

一方通行・垣根「当たり前だろ」

西川「殺す！！ブツ！！」

頭に大川の拳骨が落ち、西川は机に顔を叩き付ける。  
そのまま、動かなくなった。

一方通行「大丈夫かよ・・・死ンでねエか？」

大川「大丈夫や。こいつはゴキブリみたいにしぶとく生きるタイプ  
やから」

そういうと、頼んでいたパフェを全て食べる。  
ふと、垣根は気になっていたことを訪ねる。



垣根「そついや、なんでお前らそんなに仲いいんだ？なんとなく気になった」

大川「ああ、それはコイツとうちはい「強盗だ！！命が惜しかったら全員こつちに来い！！」チツ」

垣根（あれ？今舌打ちしなかった？したよね）

そんなことを思いながら声のする方を見ると、覆面をかぶった強盗が3人いた。

第1位と第2位なら3人くらい赤子の手をひねるように簡単だろう。しかし、店を傷つけないようにする自身が2人にはない。

どうしようか話し合う。

すると、大川がこんなことを言った。

大川「やったら、うちがやるわ」

そついうと、ヒュンっという音とともに強盗がいきなり、大川の前に現れた。

いきなりのことについていけなかったのか、強盗は転ぶ。

すかさず、大川は強盗の胸を蹴り、気絶させる。

二人は茫然とその行動見ていた。

呆然としている二人に気付くと、大川はにかつと笑い、自分の能力を言う。

大川「うちの能力は『ムーブポイント座標移動』本当やったらレベル5に認定され

てもおかしくないんやけど・・・自分を飛ばすのがなんとなく恐くてな・・・」

だから自分はレベル4のままなのだと言笑う。

結局、大川は風紀委員に呼ばれ、西川は垣根、一方通行と喧嘩しながら帰って行った。



皆は喜び、一方通行と垣根は倒れた西川を踏み始めた。  
そんなこと無視して。女子同士話始める。

大川「いや〜間に合った〜まだ何もされてへんやんな?」

涼音「別に何もされてないわよ〜」

麦野「追い掛け回されたわ」

涼音「え?鬼ごっこしてんじゃないの〜?」

麦野「・・・もういいわ。アンタはずっと天然でいなさい」

ニコニコ笑顔のまま涼音は首をかしげる。

麦野は、涼音が事態を知る前に西川をどうにかしようと思った。

大川「アイツホンマにどうにかせなあかんの・・・

・・・あつそや!! やったら今度大だいはせいさい覇星祭あるやんか?

あんときに涼音さんにハッキリ決めてもらおうな!!

選ばれへんかった人はキツパリスツパリ諦める!!どやつ?」

麦野「・・・いいわね、それ。分かった?涼音」

涼音「え〜?何を選べばいいの〜?」

麦野「好きなほう!!」

涼音「私はどっちも好きよ」

ため息をつく。

どれだけ天然&鈍感なんだと思う。

麦野「そ・れ・は！友達としてでしょうが！！恋人とすての好きよ！！

モヤシかメルヘンか変態かこのなかから選ぶのよ！！あつ、選ばないっていうのもあるわよ」

涼音「恋人としてね〜・・・」

う〜ん、と首をひねって考える。

それをみた大川が詳しく説明する。

その間に、西川が復活し、「痛い痛い！！蹴るのやめんか！」などと言いだしたが、無視した。

涼音「分かったわ〜。ふふ、大覇星祭が楽しみね〜」

大川「まあ、あの男3人にとつたら真剣勝負やけどな。はいはい！カス男子3人聞け〜」

喧嘩をやめた3人に説明する。

すると、思った通り、お互いにらみ合い、勝負する気満々になった。

麦野「なんだかおもしろそうね」

大川「やるやる？めっちゃおもしろそうや！」

女子二人は面白がって陰で笑っていた。

37：勝負（後書き）

みつ・・・短けえ・・・

何やすんげー短くなってしまうたけど・・・まあ気にしないでね

「え、今から抜き打ちテストをします」

西川「なんでやねん！！卑怯や卑怯！！抜き打ちなんかせんでもいい！！！！」

「はいはい、やりましょうね。ちなみに、点数はレベル別で採点しますよ。だから、レベル4の人は80点以上とらなかつたら赤点で、補習です。分かりましたね？西川さん」

西川「……はい」

笑顔でいるにもかかわらず、先生の目は笑っていなかった。



直ぐに帰ってきたテストは、77点。赤点だ。

西川は死んだように机にうつぶせになる。あの先生の補修はきつい。朝早く行き、補修、放課後も、門限ギリギリまで補習。

だから、あの先生の教科だけは、どんなに不良のやつでも、必死に勉強する。

前髪で隠れていない左目から涙が出てくる。

西川「なんでや、なんで補習やね〜ん……」

そついい、テスト用紙をひらひらさせる。

すると、誰かにそのテスト用紙を取られた。

顔をあげると、そこには大川が大っ嫌いな女、小川おがわ 百江ももえがいた。

彼女は、仲間を集めていじめをする。それを快く思わない大川は小川が大っ嫌いで、小川と話をすると、暴言と毒しか出てこない。

すると、小川も皮肉なことを言うのだが、最終的には全て大川が勝つ。

小川「あらあら、貴方って馬鹿ですね。こんな問題もわからないなんて。無能力者の私でも91点とれましたのよ？まあ、化学は私の得意分野ですけれど」

西川「・・・」

何も話さない。

西川は小川が苦手だった。できるだけ合わない様にしている。

そんな西川に、暴と毒の女神が舞い降りた。大川だ。

大川「西川に何しとんじゃカス」

小川「まあ、誰かと思えば、ビビッてレベル5になれない大川さんじゃないですの。別に何もしておりませんわ。ちよっとお話してただけですの」

大川「ビビッてレベル5になれないのは認めるけどなあ。テメーは無能力じゃねえのかあ？そんなカスみたいな人に馬鹿にされたくないんですけどあ。まあ、しょせんカスはカスだから人を馬鹿にすること自分から目を背けてるんでしょうけどねえ」

小川の額に青筋が浮かぶ。

周りのみんなはいつものことだと無視をする。

小川は知らないのですが、不良友達以外はみんな大川の味方だ。

小川「あなたっ・・・！！言わせ置けば好き放題に言って！！私が

無能力なのは、どこかの誰かさんに神様が能力を与えたからですわ！本来なら私ができるはずだった能力を！！どこかの巨女が！！」

大川「あれ？自分の才能がカスなことを人のせいにするの？ここまで性格が酷いやつ初めてやわ。それにな、147センチのチビよりもでかい方がましなんですけど。なに？お前見た目小学生の方がいいの？頭可哀そうな奴。死ぬの？地獄落ちるの？」

小川「なっ！！なんですってー！！私は生きますわよ！！」

大川「逝って来い。カスチビ下衆女」

とうとう涙目になり、逃げ出した。

教師たちも、最初は止めていたのだが、もう止めなくなった。

小川はこれくらいであきらめる性格ではないし、小川が悪いと分かっているからだ。

放課後、地獄補習に行くのを嫌がった西川を無理やり行かせ、大川は一人帰っていた。

すると、それを見つけた涼音が近寄ってきた。

ほかの4人は用事があるらしい。

涼音「あらあら、一人で帰ってるの？なら一緒に帰りましょう」

大川「おお、いいでいいで。全然OK」

そっさい、早速話始める。

勉強のこと、最近起こった面白いことなど。

分かれ道に近づいたとき、ふと、涼音が言った。

涼音「私ね、誰かに恋なんてしたことないのよ」

すると、大川は、意外そうな声を上げる。

大川「へえ、うちは一回したことあるで。しかもな」

涼音の耳に口を近づけ、小声で何か喋る。  
すると、涼音が驚く。

涼音「えっ？それってとってもいいじゃない。お、パチパチ」

そっさい、手を叩く。

大川は照れる。

大川「なんやそない言われると照れるやないか。あ、うちこっ  
ちにいな。じゃーな」

涼音「ばいばい」

手を振り、別れる。

ひとりになった後、涼音は考えていた。

涼音（私ってあの3人の誰が好きなのかしら？）

それは、自分にしか分からない。

### 39：大覇星祭

あれから日にちが立ち、大覇星祭がやってきた。話しがはやくいとか言わないでね。

涼音「・・・話長いわね・・・ZZZ」

垣根「立ったまま寝るとか器用だな・・・オレも寝ようかな・・・」

麦野「どうせだったら永眠すれば？」

垣根「殺す気か！！？」

麦野「殺す気だけど？」

後ろの方で小声で話す。

すると、先生に見つかり、注意されてしまった。

なぜか涼音は寝ているのが見つからなかったとか。

一方通行「オイ。一種目ってあの三下の学校じゃねエか？」

削板「面白そうだな！みに行ってみるか！！」

そっぴいだす。すると、みんなも暇なため、暇つぶしに行くことになった。



上条たちの学校がいる場所に行くと、すでに位置について合図を待っていた。

相手は能力者がかなりいる高レベルの学校。それにくらべて、上条たちの学校はほとんど無能力者で低レベルの学校。

勝ち目はないと、レベル5たちも思った。

しかし、それは覆された。

合図の音が鳴ると同時に、上条の学校の生徒たちは走り出す。

それにくらべて、相手チームは、前列に遠距離攻撃の能力者を置き、攻撃をする。

次々と飛ばされていく上条たちだが、飛ばされても直ぐに起き、走り出す。

それからはすごかった。凄過ぎて何の競技をしているのか分からなかった。

低レベル学校が高レベル学校に勝った。

周りの観客も、驚いて、あの学校と戦ったら負けそうなどと言っていた。

涼音「・・・すごいわね・・・」

削板「根性！！根性で勝ったんだ！！」

垣根「・・・すごすぎて何もいえねえ・・・何なんだよあのやる気は・・・」

垣根「・・・燃えてたわね・・・」

一方通行「・・・灼熱の炎だなア・・・」

ひとりを除いて、皆はしばらくポカンとして競技が終わっても動けなかった。

しかし、涼音と麦野の競技が近づいてきたので、移動した。

「それでは、ただ今より、〇〇学校対長点上ながてんじょう機学園きがくえんの、男女参加、『隠れ鬼』を超開始します。ルールを超説明します。まず、相手に攻撃は超OKです。逃げる人が鬼の人を凍らせたりして足止めする

のもOKです。見つかったても、捕まらなければ超セーフです。ですが、瞬間移動系の能力者は、物を瞬間移動させてもいいですが、自分と仲間、相手を飛ばすのは超駄目です。したら失格とします。行動範囲はこの中だけです」

画面にマップが映る。かなり範囲が広いが、それだけ人数も多い。そんなことよりも、麦野はアナウンスの声の主に聞き覚えがあった。

麦野「絹旗って、放送委員だったんだ・・・知らなかったわ・・・」

仲間がアナウンスをしているのになんとなく違和感があり、麦野は絹旗の声を聞いているとき、落ち着かないでいた。

絹旗「それでは、スタートしますので、鬼と逃げる人は位置についてください。あと、レーダーも渡しときます。それでは超頑張ってください」

参加する生徒がそろそろと位置に着く。

それぞれの位置につくと、腕時計型のレーダーが渡された。あれだけ広いのだからこれくらいは当たり前だろう。

絹旗「では、先に逃げる人は逃げてください。鬼の人は10分後に超追いかけてください。それでは・・・はじめ!!」

逃げる人は一斉に走り出す。

鬼は涼音、逃げるのは麦野だ。

めんどくさそうに頭をかきながら麦野は走っていく。

涼音はニコニコしながらそれを見ていた。

参加していない男たちはモニターで2人の様子を見ることにし、モニターの近くの席に座る。

#### 40：「隠れ鬼」？

見つかって追いかけられるのがめんどくさい麦野は、10分でかなり奥まで行っていた。

麦野「どこに隠れようかな．．．隠れる場所も結構難しいわね．．．見つかって直ぐに逃げられるようにしておかないとね。でも、このフィールド普通の街みたいね。やっぱり学園都市ってやばいとこだわ」

周りを見渡す。

周りには、「隠れ鬼」をするために作られた、壊してもイイ街があった。

「隠れ鬼」だし、能力を使ってもいいのだから隠れる場所があり、逃げる道もある街なのだろう。

麦野「さして、そろそろ10分立つのかしら？さっさと隠れないとヤバイわね．．．そういえば、別に、鬼に捕まりさえしなけりゃ、隠れなくてもいいのよね？だったら．．．鬼を動けなくすればこっちの勝つ確率が高くなる．．．ふふふ」

不気味に笑う。

鬼の涼音は、10分経つのをのんびり待っていた。

涼音「そろそろ10分かしら〜？みんな準備運動しましょ〜」

全員「……………はい……………」

涼音のほんわかとした空気に、味方全員がゆったりと返事をし、準備運動を始める。

いきなり体を動かしても、そんなに動かないだろう。今のうちに体を動かしておくのだ。

「はい！残り10秒です。超えますよ。5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・」

鬼は全員走る準備をし、緊張して構える。そして・・・

「0!!!」

鬼たちは走り出す。

鬼同士が戦うのはOKなのだか、最初は敵をじみちに減らして、後から鬼の数を減らそうとしてるのだ。

涼音も走り、レーダーをみる。

まず近くにはいないだろう、近くにいたら、すぐに見つかってしまう。

涼音「麦野は逃げたかしら・・・大丈夫ね」

あの麦野だ、不良さえも震え上がるような怒気を放ち、メルトダウナーを撃ちまくるだろう。

ふと、画面を見ると、自分が写っていた。

残っている男子を安心させるために、涼音はいつも通りの目が明いていない笑顔でカメラにピースする。

垣根「おっ、涼音。余裕そうだな」

画面にいつもの笑顔で映った涼音をみて、言う。  
とりあえず、涼音は大丈夫そうだ。  
麦野も、あの性格だから見なくても大丈夫だろう。そう思ったその  
時、後ろから抱き着かれた。

西川「よゝ何しとんや？」

西川だ。彼を見た一方通行が逆に聞く。



一方通行「テメーこそ何してンだア？」

削板「暇なのか？」

すると、西川は首を縦に振る。

西川「暇やで。やから、「隠れ鬼」に大川が出てるから暇つぶしにみとこつかな〜っておもて。なんや、アンタらも「隠れ鬼」に誰か出てるんか？」

削板「ああ、麦野と涼音がな。麦野が逃げる方で涼音が鬼だ。ちよ  
うど画面に映ってるぞ」

西川「まじかい!!」

直ぐに画面を見て、騒ぎ始める。

西川「涼音さ〜ん!!ホンマ涼音さんは可愛くて綺麗やわ〜……  
勝負はオレが勝つ!!」

こつちを向いたかと思うと、垣根と一方通行に指を指し、言う。  
二人も、やる気の顔になる。

垣根「おもしろそうじゃねえか・・・後ではえ面かくなよ？」

一方通行「ハッ！！それはこっちのセリフだぜ！！三下に負けるな  
ンてありえねエ」

西川「今までオレは涼音さんに想いを素直に伝えてきた！（行動で）  
オレに惹かれたはずや！！」

3人の周りに灼熱の炎が見えるような気がする。

削板は隣で

削板「根性！！こんじょおおおおおおおおおおおおおお  
おおおお！！！！！！」

などといい、一人で燃えていた。

周りの人たちは、あまりの熱さに、離れて行っていた。

涼音「くしゅんっ!! あらあら、だれか私の噂してるのかしら  
」?

涼音は、のんきにそんなことを言っていた。

#### 41：「隠れ鬼」？

~~~~~参加者~~~~~

「隠れ鬼」が始まって5分後、びゅんっという音が聞こえ、太いレーザーが建物を貫き始めた。

違う場所では、建物を超える火柱が10本以上たち始める。

見る見るうちに、あちこちで火柱と、ビームが見える。麦野と涼音が暴れ始めたのだ。

麦野「おらおらおらあっ!!どうしたんだよあ!!所詮、テメーらカスどもじゃあ、無理なのか!!?少しは楽しませろよおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!」

自分の前を走る、敵の逃亡者を追いかける。

敵は、涙を流し、必死に悪魔と化した麦野から逃げる。

「なっなんだよああ女!!悪魔だ!!大魔王だああああああああああああああああああああああ!!!!!!!!」

「くそ……でも何とかして止めないといけませんね……  
兄様!我ら、兄妹の力見せてやりましょう!!」



技を見ていた敵を吹き飛ばした。  
敵は、飛ばされた衝撃で、気絶し、そのまま地面に落ちた。  
手加減をしていたので、少し服が焦げているだけだった。  
麦野は、兄妹に近づくと、腹に一発ずつ入れ、気絶させた。  
そして、そのまま放置し、標的を探し、歩き始めた。

~~~~~不参加者~~~~~

垣根「……なんでかな……麦野が悪魔……いや、大魔王に見  
えてきた……」

一方通行「大丈夫だ。みんな、そっ見えてる。お前だけじゃねえ」

西川「オレは、あの人好きにならなくてよかったと、思ってる」

削板「……」

いつも五月蠅い削板も何も言えなくなるくらい、麦野は怖かった。周りの人たちも、あまりの怖さに、震えるものもいるくらいだった。

~~~~~参加者~~~~~

涼音「あらあら、結構しぶといわね」

「アンタ、レベル5の炎女王フレイムクイーンだろ？アンタを倒してオレは名をあげる！！」

そういい、目の前のまだ顔に幼さが残る少年が、涼音にとびかかる。しかし、涼音は鬼、少年は逃走者。涼音は、少年に触られてもいいのだ。

だから、ひらりとよけると、少年の背中を触り、言う。

涼音「は〜い、アウト〜」

「……くそおおおおおおおつ！！！！」

少ししてから事態を分かった少年は悔しそうに地面をたたく。そんな少年をみた涼音は、少年の頭をなで、言う。

涼音「悔しがるってことは、貴方はそれだけ本気だったってこと、それはとてもいいことよ。悪いのは、皆が本気を出してる中、本気を出さないこと。だから、貴方は立派なのよ？」

「……うつ……うん！！分かった！！！」

ニコリと笑い、差し出された手を取り、立ち上がる。

涼音に慰めてもらい、しばらくすると、アウトになった印の鉢巻を取り出し、頭に巻き、失格者が居なければならぬ場所に向かい始



めた。

~~~~~不参加者~~~~~

男子3人は、殺気だっていた。

鬼のような顔で、モニターを睨みつける。

西川「あの男、スライスしていいか？ええよな？」

垣根「待て、オレにもやらせる・・・痛めつけてゴミ箱に捨ててやる」

一方通行「だったらオレは骨を全部折る」

削板「本当にそんなことしたら犯罪だぞ」

「「「・・・チッ！！」「」」

削板（本当にしようとしてたのか・・・）

横で騒ぐ3人を見て、涼音は幸せだな〜と、思う。

「あの〜、すみません・・・」

削板「ん？」

呼ばれて、後ろを振り向くと。優しそうな顔をした、細めの男性が居た。

## 42：そのころの大西

やあ、読者のみなさん、こんにちは。

うち？うちは大西や。大川おおかわ薫かおり。

今、うちは「隠れ鬼」の鬼をやってんねん。  
でもな・・・正直言つと・・・

・・・めんどくせえ・・・

なんでうちがこんなことせなあかねん。なんでや。なんで？

誰や決めやがったやつ。うちは委員長や。うちが決定すんねんぞ。

え〜と・・・なんでこないなことになつたんやつけ〜？

~~~~数週間前~~~~

大川「はい。今から大覇星祭で、何の競技に出るかきめます」

やる気のない声で大川は言う。

正直言うと、彼女は委員長をするのに厭きてきていた。そのため、めんどくさいのだ。仕事が。

なぜ彼女が委員長をしているのかというと……

ただ、おもしろそうだったから。

単純に、気持ちでやるといったのだ。

彼女は自分の性格を、熱しやすく冷めやすい、気分で行動する、口より手が出る、かなり強いのが。人の好き嫌いは激しい、などと、自己紹介の時に言った。



全員がやっぱり出た〜などと言う。

彼女は本当にめんどくさくなると、くじ引きで残りを全て決める。このようなことが多々あるため、彼女はいつもお手製のくじ引きをもっている。

最初、皆はそんなの嫌だとか、大川に散々言ったのが、聞いてもらえなかった。

それでも、大川の怒った時を知っている友達が必死に止めようとしたが、聞かず、不良系の男子たちが大声でねちねち言い続け、とうとう、大川がキレたのだ。

その時は、暴言と毒を吐き続け、最終的には、その男子たちを全員素手で黙らせたのだ。

順番にクジを引き、最後に大川がクジを引く。

合図をし、皆が一斉クジを見る。

途端に、最悪だとかラッキーとか、様々な声が聞こえてきた。

西川はよかったらしく、嬉しそうな顔をしていた。

大川はというと、立ったまま寝ていた。

そして、そのまま起きず。決められたのだ。

そうや・・・！！あんどきうちが寝たからや！！なんかめっちゃ眠  
たかったから寝てもたんや！  
なんであんどき寝てもたんや自分！！寝てへんかったら能力使って  
入れ替えれとつたのに・・・！！

そんなことをしてはいけません

アホや！うち！勉強は普通よりいいけど別に意味でアホや！！でも、  
西川よりアホとは認め辺で！！  
アイツは勉強も別の意味も、レベル4としたらアホやもん！！

そんなことを考えながら、うちは敵を追い掛け回す。

~~~~~3人称~~~~~

うなりながら、大川は敵を次々に捕まえていく。  
足が超早い彼女からはたとえ男子でもそう簡単には逃げられない。

大川「待てやゴラアーーーーー！！！！めんどくさいからもついい  
加減捕まれやクソボケエーーーーー！！！！」

「だっ誰が捕まるか！！お前はバカかよ！！」



大川「ああん!!? (怒) 誰がアホやと!!? 女のうちから無様に逃げ回る男のお前の方がアホやと思うけどな!!」

「なっなんだと!!? ぐあああああ!!」

プライドを傷つけられ、男はこける。

直ぐに大川はこけた男子をタッチし、残りを追いかけて続ける。

テレビの向こうでは、西川たちがあまりの怖さに震えていたのだが、何も教えられず、競技が終わった後も、大川は知らなかった。

### 43：オツチャン

「少し、時間をいただいてもいいかな？」

そついい、竜のネックセスをつけ、ニコリと笑う男性。

不参加の男たちは誰だコイツという顔で男性を見るが、そんなことは気にせず、男性は喋りだす。

「実は迷ってしまつてね・・・「隠れ鬼」をしているところはどこか教えてほしいんだ」

西川「それやつたらここやで、オツチャン」

「そうなのかい！？いや、さっきまでこの周りをグルグル回つてたんだが・・・なにせ方向音痴でね。地図を見つけてみて、さあ行こうとしてもさつぱりでね。困つてたんだが・・・そうか、ここなのか」

細目の男性は画面を見る。

すると、西川が話しかける。

西川「なんや？オツチャンの子供が出てるんか？どこの学校なん？」

「ああ、私の子供は長点<sup>ながてんじょうき</sup>上<sup>じょう</sup>機<sup>き</sup>学園の生徒なんだ。優秀<sup>ゆうしゅう</sup>だろう？」

自分の子供が優秀なのは、だれでも自慢したくなる。

この男性もそうらしく、細目のため見えない目と顔を西川に向ける。それを聞いた西川は顔を輝かせる。

西川「まじ!? オレもオレも!! 長点上ながてんじょうき機学園の生徒やで!! オレみたいに優秀なやつがオツチャンの子かあ・・・すごい嬉しいやろ?」

垣根「おい、オツサン。そいつはバカだぞ。ただ能力が高いだけだ」

一方通行「オレにとつたら三下だぞオ三下ア」

その言葉に、垣根が反応する。

垣根「なんだそりゃ? ってことはオレも三下って言いたいのかよ」

すると、一方通行が鼻で笑う。

一方通行「はっ! そういったつもりなんだがなア! あれエ? バ垣根くんには分からなかったかなア?」

垣根「殺すぞ」

一方通行「やれるもんならやってみやがね。三下ア!!」

削板「やめる二人とも!!そんなことすれば風紀委員ジャッジメントに捕まるぞ!」

西川「いや、捕まるだけじゃすまないやろ」

「はっはっはっ!仲がいいなあ」

西川「いや!全然仲よくないで!?!オツチャンこれは全然仲よくないんやで!?!」

「そうなのかい?まあ、仲よさそうだからいいじゃないか。あつ、そろそろ終わるな・・それじゃあ、世話になったね」

手を振り、どこかに行く。

能力を使おうとする二人を削板がなだめている間に、「隠れ鬼」は、ながてんじょうき長点上機学園の圧倒勝ちで終わった。

選手たちが次々に出てくる。

その中で、麦野と涼音、大川を見つけた男たちは昼食を食べに行こうという。

「隠れ鬼」は人数が多く、時間も無制限のため、かなり時間がかかる。

それに、次の競技に入ればまた長くかかるため、今のうちに食べないと昼食を食べるのが3時くらいになってしまう。

しかし、涼音は断った。

涼音「ごめんなさいね、一緒に食べられないわ」

大川「?なんでや?」

涼音「親が来てるのよ。一緒に食べる約束してるの。それじゃあね」

そっさい、親と待ち合わせの場所に行こうとする。

しかし、走り去ろうとした涼音の横顔を見て、垣根はさっきの男性のことを思い出し、涼音の腕をつかみ、止める。

垣根「・・・!ちょっと・・・待てよ!」

涼音「え？なに？」

垣根「お前の親父ってさ……お前みたいに目が細目？」

涼音「そうよ」

垣根「それじゃあ……竜のネックレスしてる……？」

そう聞くと、めったに開かない涼音の目が開き、炎のように紅い目が現れる。

驚いてるみたいだ。

おどおどと、垣根に聞く。

涼音「な……んで知ってる……の？」

垣根「……やっぱりお前の親父が」

涼音「え？お父さんに会ったの？」

聞いてきたので、さっきのことを話した。

すると、涼音が間違いなくお父さんだという。

涼音「お父さん。かなりの方向音痴でね。一度、海に行くはずが、山に言ったことがあるのよね……それから、運転するのは絶対にお母さんだったわね」

麦野「どんなけよ。海なのに山とかありえないでしょ」

涼音「ありえたのよ」

麦野「……そうらしいわね」

後ろで大川がありえねえ……と、つぶやく。  
しかし、涼音が言うのだから本当なのだろう。

ぐじゅ

「「「「「「「「「「「「「「」

大川「……腹減った。飯」

西川「……KY」

大川「KYでいいし。うちは気にせんから」

空気を読まない大川の腹が鳴ったため、皆は涼音と一緒に店で食べることにした。



#### 44：食事（前書き）

髪の毛をずっぱり切りました。

もう、髪の毛洗うの楽ですね！！

私、量がとても多いですから・・・

今度からずっと短髪でいようか真剣に考え中・・・

#### 44：食事

「まあまあ、涼音のお友達？涼音がお世話になってます」

「ああ、ハイ。お世話をしております」

「バ垣根」

「イテ」

お店に行くと、本当に高2の母親かと疑いほど、若い容姿で、笑顔で涼音の母親を迎えてくれた。  
そして、上の会話をした。  
変な返事をした垣根を、麦野がぺしつと叩く。

（それにしても・・・よく似てるな・・・）

大川はそう思い、まじまじと涼音の親を見る。  
細目と人を癒すような雰囲気、は父親から、喋り方とほんわかとした雰囲気、細く、すらりとした体は母親からもらったのだろう。  
父親は涼音と顔がよく似ていた。間違いなくこの二人の子供だ。

涼音の母は何かを思い出したのか、パンっと手を叩く。

「そうだったわ。実はあの人たちと一緒に食べるようになったのよ。」

そういい、手のひらを向ける。向けた方を見ると、ツンツウ二頭の不幸少年と、超能力第3位、ツンデールガンが居た。二人の横を見ると、大人がいる。親だろうか。しかし、御坂の方は、どう見てもお姉さんにしか見えない。麦野はとりあえず挨拶をしておく。

「はじめまして。涼音の友達、麦野 沈利です」

すると、後ろで垣根が笑う。

「くくく・・・麦野が敬語とか・・・！」

「ああん？」

「じめんなさい」

不良さえも震え上がる顔で垣根を睨む。その顔をみた垣根はすぐに頭を下げて謝る。

皆はくすくす笑う。しかし、お腹がすいた大川は早く食べようとい、皆はそれぞれ座り。注文する。

「あかん・・・胃の中空っぱや・・・」

「お前、朝全然食べへんもんなあ。もつと食べんかい」

「朝は食力ないんや・・・うじうじいな。うざったい」

「何やと!!お前おこれ!!」

「何でおごらなアカンねん!!自分で払えやゴラア!!」

「財布忘れてん!!」

「テメー馬鹿だろ!!正真正銘の馬鹿野郎だろ!!」

ぎゃいぎゃい漫才を始める二人を見て、店の中の全員が笑う。しかし、二人には周りが見えておらず、なおも会話が続く。やっと終わった時は、料理が運ばれてきたときだった。

「旨そうだなア・・・いただきますアす」

手を合わせ、食べ始める。

マナーを守らないと涼音から愚痴ぐち言われるので、マナーを守り、正しい箸の持ち方で食べる。

口に入れると、肉汁がじわっと口に広がる。

隣でも、美味しそうに涼音が食べている。そんな涼音の顔を見て、一方通行は勝負を思い出す。

(負けるわけにはいかねエ・・・三下なんかに負けてたまるか)

すると、そんな一方通行の考えが分かったのか、垣根と西川も相手に向けて殺気を放ち始める。

それを見た麦野と大川はコソコソと涼音と喋る。

(ちよつと涼音！男子たち思った以上に本気よ！)

(ちゃんと考えてんのか？)

(・・・忘れてた)

( (ちよっ!!!) )

本人は忘れていた。

(どないすんねん！誰にすんねん!!)

(うっん・・・まだしっくりこないのよね)

(ちやつちやと決めちやいなさいよ!)

(根性だ!)

( 黙れ )

( ぎゃおう!!?? )

二人が削板の手に箸を指す。

あまりの痛さに声が出るが、それでも何とか小声にする。  
騒ぐみんなをよそに、涼音は考えていた。

( 好きな人・・・ねえ・・・ )

今まで、一方通行は幼馴染、垣根は友達としか見ていなかった。それなのにいきなり好きと言われて、二人をどう見ればいいのかわからない。

大川は初対面から告白してきたので、見える。それでも、分からないのだ、好きになるということが。

( そろそろ真剣に考えないとね )

大覇星祭だいはせいさいが終われば、あの3人から選ぶか、選ばないかハッキリ決めないといけない。

そう思い、涼音は3人にそれぞれであった時を思い出し始めた。

45：騎馬戦 1（前書き）

お気に入り・・・100・・・超え・・・やと・・・？

初めてですよ！お気に入りが100だったのは！

この調子でガンガン書いていきますね！！！！

「食った食ったー！」

お腹をバンバン叩きながら西川が言う。

その隣では大川が財布の中身を確認していた。なんだかんだ言ってもおごつてあげるみたいだ。さすがレベル4。

皆が食べたのを確認すると、一方通行が立ち上がった。

「うーす。じゃア行くかア。次はなんだ？」

「えーと、確か男子全員で騎馬戦だったわよ。もちろんアンタたちも絶対に出る」

そういわれ、垣根が頭をぼりぼりかく。

隣では削板が燃えていた。

「くそー！なんでこんなガキがやるやつをオレがやらなくちゃいけねえんだよ。めんどー」

「まあまあ、そういいなって。がんばれは女子にもてるで」

「オレはもとからもてる」



もてていない男子に言っではいけないことをいつてしまつ。  
当然、削板の耳にも届いており、彼は、ゆつくりと垣根を見ると、  
普段の削板を想像できないくらい、殺気を放ち、笑顔で言つ。

「このクソリア充が」

「削板が反抗期!!?お母さん悲しい!!」

すると、ふざけて言つたその言葉を聞き、大川は垣根に言つ。

「なんや、お前、オカマか?オナベか?」

「安心しろ。オレは真正正銘の男だ。バレンタインには必ず100  
個以上チョコをもらうイケメンだ」

「リア充爆発しろ」

鋭い目つきで、西川と一方通行が声をそろえ、垣根に向かって死ね  
死ねと親指を下に向ける。

しかし、垣根はそんな2人に喧嘩をうつる。

「なんだあ?お前ら2人、もてないから羨ましいんだろ?リア充つ  
て言われる程、完璧すぎるオレに嫉妬して」

「・・・クソメルヘン調子に乗んな下衆野郎」

「・・・毒舌やめてくれ」

「ん？ああ、つい本音がでてきたわ。スマンスマン」

垣根の横でひとりごとのように毒を吐く大川。傷ついた垣根は涙目になっていた。

「それより、そろそろいきましょ」

「涼音さんたちもういつちゃうの？」

「がんばってな」

「あらあら、ありがと」

手をひらひらと振り、レベル5とレベル4たちは店を出ていく。残った当麻家族と御坂家族はそのあともしばらく話をしていった。

「それでは、これより騎馬戦を始めます。それぞれ位置について準備をしてください」

その声を聞いて、男子たちは動き出す。  
涼音たちは観客席で見ている。

「クソ、それにしても嫌だなあ。第一位の下とか」

「あァン？何言ってるんだよ垣根くゥン。テメーにはその位置がお似合いだぜエ」

「落とすぞ」

「おおっと。オレを落としたら俺たちの学校の負けになるんだぜエ？」

その通りだ。一方通行は大将なのだ。足は削板と西川。台は垣根だ。大将のため、一方通行が鉢巻を取られてはいけないのだ。垣根は齒をギリリと鳴らす。

「うるせえ！！テメーは絶対にこの競技が終わった後にぶつ殺す！  
！覚悟しとけよ！！！」

「おもしれエな！！三下がオレに勝てるんでも思ってるんですかア  
？バカだなア」

「はっはっ！燃えるなあ！根性！！！」

「誰かこの位置変わってや」

騒ぐ一組の騎馬をみて、周りは笑いだす。

一気に緊張感が無くなり、騎馬戦をする前だとは思えない雰囲気になつてしまった。

そんな雰囲気を見て、麦野の額に青筋が浮かぶ。

「あんの馬鹿ども……！！これから勝負だつてのに……！！！」

「まあ、いいんじゃない？うちには関係ねえし」

「あらあら。関係あるわよ？だってこれって学校の宣伝とかあるんだし」

「ああ、そんなのあったな。まあ、うちの学校には関係なくないか？だってうちの学校って。五本指の一角に入る学校やで？学園都市に来て学校の話したら絶対にうちの学校の話出てくるって」

そういうと、きつと麦野がこっちを向いた。

別に驚きもせず、大川はなんでこっちを向いたんだと眉を寄せる。

「テメーなあ！！この大霸王祭たいはせいさいなめんじゃねえぞ！！一年に数回しかねえ大がかりな宣伝だぞ！！！！どうでもいいなんて考えてんじゃねえぞおおお！！クソガキ！！！！」

そういわれ、大川からブチっという音が聞こえた。

あらあら〜と微笑みながら、涼音は二人から距離を取る。

すると、涼音の読み通り、二人が口喧嘩をしはじめた。

「んだよ・・・てか、こんなことでいちいちキレるとかがキかよ・・・  
・眉間にシワよせてっつとシワだらけになるぜえ、ババア」

「ん・・・だとおお！！？もういつペン行ってみるやガキ！！！！」

「何回でもいったわるわあ！！だいたいなあ、テメーと同年なんですけど。何？それすらも分からないの？うわあー。めっちゃ頭可笑そうな老け顔のチビやなあ」

「殺すぞおおおおおおおおおお！！クソポケエエエ」



なかつたんだよおおおおお！！負けたら全員にメルトダウンーぶつ飛ばすぞおおおおおおお！！！！！」

「全員死ぬ気でがんばれエ！！！！負けたら殺さるぞオ！！！！」

一気に男子たちの私語が無くなり、目が本気になる。

叫んだことと、ちゃんとしだしたことを見て、二人はドカッと椅子に座る。

喧嘩が終わったのを見ると涼音が戻ってきた。

「すごい喧嘩だったわね」

「ああ、でも久しぶりにキレたで。すつきりしたわ」

「本当ね。清々しいわ・・・」

二人は本当に清々しそうな顔で目を細めた。

## 46：騎馬戦？

一方通行達の学校の男子は燃えていた。目が本気になり、ぎらついていた。

それもそのはず、さきほど麦野に負ければ殺されるといわれたからだ。もちろん殺すまではいかないだろうが、彼らは知っている。殺されるまではいかなくても、半殺しにはされることを。

「……やっぱり……メルトダウン―撃たれるよな……なあ？」

「当たり前だろ、第4位だぞ」

そう、半殺しの中で彼らが一番心配しているのは軍隊を一人で相手するほどの力を持つ一超能力（レベル5）の第4位、麦野の能力、メルトダウン―メルトダウン―原子崩しだ。怒れば彼女は不良さえも圧倒する腕力や身体能力と同時に、至近距離からギリギリ外れるものやかするメルトダウン―を撃ってくるのだ。彼らにはそれが一番恐ろしい。

それは一方通行と垣根、削板も同じだった。

どんなに麦野より強くても、絶対に勝てると分かっているにも、怒



つた時の麦野にはたとえ学園都市最強でも絶対に逆らうことができないのだ。  
そのため、一方通行も本気になる。涼音と大川は相手チームに同情していた。

「よォしい!!いくぜェ!!」

「絶対に勝つてやろうぜ!てか、勝たないと殺されるぞ!!」

「うおおおおおおおおおお!!!!!!こんじょおおおおおおお  
おおおおおおおう!!!!」

燃える男子たち。

それを見て相手チームはおじげづいていた。

「えっ……?こんな勝てないだろ……」

「すまない!女子!!」

騎馬戦が始まったが、すごかった。

一方通行達が直ぐに押し始め、そのままの勢いで大将の鉢巻を取ってしまった。

まあ、それは当然だろう、一分で大将以外の騎馬を全員速攻でとつたため、大将の鉢巻を取るときは、皆で逃げられない様に囲み、一斉に取りに行ったのだから。

そして、次は一騎打ちになった。

これは、その通りで、一騎打ちをするのだ。負けた方は新しい騎馬を出す。勝った方はそのまままた一戦するのだ。最後の大将が先に負けた方が負けなのだ。

なので、これは一騎馬でどれだけ相手の騎馬に勝つかが勝敗につながる。

最初、一方通行達が押していた。しかし、相手が勢いすぎ、一気に差が縮まってしまい、とうとう対象の一方通行達が出ることになった。

この騎馬戦は当然能力を使うのはあり。それはレベル5でもた。なので、反射の使える一方通行が負けるはずがない。

最初、「それだと相手から卑怯だといわれるのでは？」といった人がいたが、一方通行の

「アア？そオ文句言つて来たらこオ言えばイインだよオ。だったらお前も能力使えばいいだろつてなア」

で、終わった。一方通行は反射しか使わないから大丈夫だと言っていたが、反射をされれば相手チームは一方通行に触れることはできない、それに、一方通行のことだから鉢巻にも反射を使つだろう。立派なチートだ。

なので、絶対に負けないと思っていた、しかし、騎馬を倒し、出てきた大将、相手を見て一方通行の顔に焦りが現れた。

「なっ……なんだと……？」

震える指で大将を指す。

「いやぁ……じゃんけんにかけてオレが対象になつたんですよ。……はぁ、不幸だ」

一方通行の能力を打ち消す能力を右手に宿す上条当麻がいた。

このままではまずい、一方通行はそう分かる。自分はずっと能力に頼ってきた。そのため、運動神経はよくない。まともに肉体で叩け

ば絶対に自分がまけてしまう。

(いや・・・諦めるな・・・反射を左だけとかにすれば・・・勝てるかもしれねえ!!)

そう思い、騎馬の垣根の頭を叩く。

当然、垣根は不機嫌そうな顔で一方通行を見上げる。

「んだよ、たたくん」

「三下ア・・・オレは今から本気でヤル。踏ん張ってくれよ。足もだ」

「真っ白野郎・・・ああつ！オレを信じろや！」

「オレも本気でするぞ！根性だ！一方通行!!」

「おう!!」

燃える4人。上条は「えっ？オレ何かした？」などと思い、あせっていた。

そして、とうとう大将同士の一騎打ちが始まった。直ぐに騎馬は走りだし、大将同士がつかみあう。

「おらああああああア！！！！」

「うおおおおおお！！！！」

能力をうまく使い、何とか鉢巻を取られない様にする。しかし、守ってばかりではいけないので上条の鉢巻を狙い、手を伸ばす。しかし、すぐにはじけれ、今度は自分の鉢巻が狙われる。そう分かると、すぐに手をひっこめ、上条の手を弾き飛ばす。そんな行動を何分もし続ける。周りは、あまりのすごさに口を開けていた。それは涼音たちも同じだった。

「なんや……あれ……あれが騎馬戦……だと……！！！？ありえねえ……」

「すごい殺気……ここまで伝わってくるわ……鈴科。がんばって」

「本当ね。殺し合い見たいね。！！」

涼音の表情に気づき、とつさに口を手でふさぐ。

隣では、涼音が悲しい顔をしていた。その顔を見て、麦野は「最低だ……」と思う。

親友は人を傷つけること、殺すことが嫌いだ。そんな話を聞くだけでも吐き気がするらしい。その言っではならないことを言った自分

に腹をたて、麦野は唇をかむ。

(何してんのよ・・・涼音を悲しませるのは絶対ダメなことなのに・・・昔のことを思い出させたらいけない・・・)

昔、血まみれになりながら、闇の自分を救おうと手を差し伸べてきた親友の姿が・・・記憶が浮かんできた。

もう二度と光の世界には戻れないと思い込み、自分を救おうとしてきた手を残酷なやり方でとろうとしなかった自分に、涼音は血まみれになりながらも手を差し伸べてきた。その手を取ったとき、涼音の心の強さと広さに感謝と感動をし、涼音の胸の中で、我慢し続けていた、泣くという行動を、幼い子供のように泣き続けた。あとき、黙って震える手で自分の体を強く抱きしめてくれた涼音の体のぬくもりは今も忘れていない。

(あの時の恩はどんなことをしても返せない・・・だったら、せめて死ぬまで涼音を悲しませるようなことはしない・・・絶対に!!)

もう一度そう誓うと、気を取り直すように明るい声で一方通行達のことを言う。

「あつ、一方通行が押ししてるわよ」

「あつ、ホンマや。これはもしかすると・・・勝てるかもしれへんで?」

「本当!？」

ぱっと一方通行を見る。その横顔をみて、大川はふつと鼻で笑う。

(なんや、涼音さん。・・・もう答え決まってるやないか)

そう思ったが、口に出さず、西川を見た。

「しおおおおおおオオ!?!」

「べっめ!?!」

「しゅん!?!」

最後の力を振り絞り、上条を押し。思いつき押しされたため、上条はバランスを崩し、なんとかもとに戻ろうと手をバタバタさせる。その隙を狙って一方通行は上条の鉢巻を取った。味方からは歓声上がる。

上条は最初は悔しがっていたが、本気でやっていたからか、すつきりとした顔だった。

顔を流れる大量の汗をぬぐい、ちらつと涼音を見ると。涼音はいつも以上の笑顔でこっちをみて大きく手を振っていた。それをみた一方通行は微笑み、手を振りかえした。

微笑んでいる一方通行を見て、垣根はあきれ顔になる。

(一方通行が笑ってる・・・こりゃオレが入るすきがないな)

そう思い、水分補給をするために水を取りにいった。





## 47：血まみれ

「疲れたア……」

「おつかれさま。かつこよかったわよ」

そついい、一方通行の額に汗を拭いてあげる。それを見た西川はシヨックをうつける。

当然だろう。大好きな人が、勝負相手と仲良くしているのだ。

「なつ……なん……やと……!?あかん!このままやとオレが負けてまう!」

「もうあきらめろよ。オレはもうあきらめた」

「なんでやねん!男やったら最後までやらんかい!」

「お前、あれを見てもまだやんのかよ?」

「あれ？」

垣根がさしている涼音の顔を見る。そして、絶望する。

涼音の顔は明らかに違った。気づいているかどうかは知らないが、涼音は一方通行のことが・・・

そこまでわかると、西川は地面に膝をついた。そして、シクシク泣き出す。

「なんでや・・・なんでなんや・・・涼音さん・・・うう・・・」

「男が泣くな！！根性で乗り切れ！！」

「んな無茶な！！根性で乗り切れるのアンタだけやで削板！」

「・・・そうなのか？」

「・・・お前しかいないって」

あきれ顔で二人がいう。まさか気づいていなかったとは・・・銃弾を受けて「こんじょおおおおおう！！」「などといい、立ち上がるのはお前しかいないだろ？・・・などと思っていたが、口には出さなかった。

そんな3人を、麦野は離れたところで呆れてみている。涼音と一方通行は気がついたらどこかに行ってしまう、探すのは面倒なのでほっとくことにした。

「はぁ・・・馬鹿3人ね・・・」

ぼりぼりと頭をかき、自分はどうしようか考えようとする。しかし、隣で大川が話始めた。

「ええやん。平和で。おもしろいで」

そういわれるが、うんと、うなる。

今は少なくなったとはいえ、まだ「闇」の仕事をしている自分は、平和というのにまだ慣れていない。

「・・・平和すぎるのよ」

そういうと、いつものように無表情で大川はいう。

「平和すぎてええやんか。だって、アンタ。昔は血まみれやったんやろ?」

「!?!?」

予想もしていなかった言葉。てつきり、また「おもしろい」などと言った思っていた。

なのに、今、大川はなんといった？

「昔は血まみれ」つまり、昔、人を殺しまくったのだろうということ。「光」の人間がそんなこというだろうか？いうはずがない。ならば、なぜ大川は知っているのか？

警戒をし、少し距離を開けて、尋ねる。

「……なんでそれを知ってるの？」

「……さうで。なんでやろうなあ。目を見ればなんとなくこの人はどういう人かわかるで。アンタの目は「闇」の光がほんの少しやけどある。……そんな目してる人が、「光」の人間な訳ないよなあ?」

目でわかるのか……そう思ったが、聞きたかったのはそっちではない。

「私が聞いているのはそっちじゃないわよ。……なんで「闇」を知ってるのって聞いてんのよ」

大川を睨む。しかし、大川は臆せず、無表情のまま適当に返答す

る。

「さあ〜て・・・なんででしょう?」

呑気にそういう。麦野はさらに警戒して神経をとがらせる。なぜだろうか、自分がまけるなど絶対にはいはずなのだが、大川の顔を見ていると負けしきうような気がする。

ずっと大川の顔をみて、はっとした。大川が目がとても冷たかったからだ。

今までいろんな目は見てきたが、これほど冷たい目は見たことなかった。いつものお気楽の大川だとは思えない。別人に思える。

あまりの目の冷たさで、汗が出てきた。今の大川の目なら、そこら辺の小物なら見ただけで動けなくさせられるのではないだろうか。自分でさえ足が動かないのだ。

暫くそうしていたが、大川は目をそらし、頭をかく。

「たくつ・・・めんどくせえなあ・・・アンタのせいで昔を思い出しちゃまったわあ・・・んじゃ、うちは帰るな」

そっさい、こちらに背を向けると、すたすたと歩き、人込みに紛れてしまった。

残された麦野は、やっとあの冷たい目を見ずに済むので安心して足の力が抜け、その場に座り込みそうになったが、今、自分は大通り

の端にいるのだ。いきなり座れば変な人だと思われてしまう。それはいやなので、足に力をいれ、何とか膝をつかずにすむ。そのまま黙って大川のことを考えていたが、しばらくして、自分の寮に向かって歩き始めた。

御坂は、寮に向かって歩いていった。

今日はかなり走った。もうくたくただ。もう今日は早く帰って寝よう。そう思っていた。

しかし、できなかった。なぜなら、目の前に麦野が現れたからだ。自分を殺すために来たのかと思い、身構える。麦野は自分より上にいる自分が気に食わない。いつもは仲よくしているが、実はひそかに殺すタイミングをうかがっていたのかもしれない。そして、今日殺そうと来たのかと予想する。

「・・・何しに来たのかしら？私を殺すために来たのかしら？」

すると、麦野はちがうちがうと手をひらひらさせる。

「殺しに来たんじゃなわいよ。だいたい、もうアンタのことそれほど恨んでないしね。今日はほかの用事よ。アンタしかできないことを頼みに来たの」



「私にしかできないこと・・・?」

「そうよ、ハッキングよ。大川 薫を調べてほしいの。そいつには  
れないようにわざわざ大回りしてここに来たんだから」

あの後、大川がどこかで見ている可能性があるため、ばれないよう  
に最初は自分の寮に向かい、途中から御坂の寮に向かい始めたのだ。  
今はまだ人が多くいるので、人の少ないところに行こうと、麦野は  
歩き始める。

まだ警戒しながら、御坂はついていく。

暫く歩くと、普通くらいの大きさの家についた。

「ここ、私だけの別荘。ここならだれにも聞かれないわ」

「・・・小さいわね」

お金持ちの御坂にしてみれば普通の家は小さかった。その言葉を聞き、麦野はアンタ馬鹿？という。

「当たり前でしょ。ここに住んでるのは私だけなんだから。大きかったら掃除が大変でしょうが」

「ああ、なるほどね」

無駄話をしながら家の中に入る。お嬢様らしく、高価そうなものが置いてあったが、数は少なく、綺麗にしてあった。

二人は真っ赤なソファに座ると、すぐに調べ始める。

「ええつと、大川 薫・・・とっ」

能力を使い、ハッキングをする。直ぐに情報は出てきた。が、読む前に麦野にとられた。

「ちよっ！何すんのよー！」

「私知つとかないといけないの。アンタは後よ」

むすーと顔を膨らませる御坂を無視して画面を見る。

画面には長点上機学園の生徒として大川が出ていた。レベル4の座<sup>△</sup>標移動と、何組かしか書いていない。やはり、もつと詳しく知るためには、暗部を調べた方がよさそうだろう。

「ねえ、コイツと暗部の結びつきを調べてられる?」

「それくらい簡単よ。そんなに暗部に深くない奴なら直ぐに出てくるわ。・・・ほら」

そういつて渡してくる。出された画面を見て、麦野は黙る。やはり大川は「闇」の人間だった。

大川 薫

性別：女 能力：座<sup>△</sup>標移動 レベル4

暗部名：トリック

と書いていた。

そのあとのことも読んでいく。

――

「トリック」のリーダー。仲間は中島なかじま 汐莉しおりただ一名。  
しかし、中島の死により、暗部を抜けた。

サディズムの、異常性欲者。

本来なら、レベル5にできるほどの力を持っているが、結標の事故を聞き、恐がって自分を移動させられないため、結標と同じく、レベル4とどまり。

――

(・・・暗部をやめてる・・・)

中島とかいう女が死んだせいで暗部をやめている。かなり大切な仲間だったのか・・・  
だが、そんなことはどうでもいい。今は大川が「闇」の人間だったということだけでいい。

「じゃっ、寮に戻るか」

「終わった？それじゃあ私も帰るわ」

一秒でも早く休みたいため、早歩きで帰っていく。  
最後に出た麦野も、戸締りをしっかりして、今度こそ自分の寮に向

かう。

「くしゅんっ！ー！」

「うはっ！きたねっ」

「うんせえ」

「ふん」

パシッと西川の頭をはたく。どこかで誰かが自分の噂をしているのだろうか。

(まあ、絶対にありえねえな。んなの絶対に嘘だ)

空を見上げ、麦野を思い出す。

(あゝ、あの女のせいで昔を思い出しまつたなあ……昔の口調に戻り寄ったし……暗部の仕事も思い出したし……殺したい……)

異常性欲が顔を出してくる。自分は昔からそうだった。小さい時から、虫などを捕まえてはえぐい殺し方をした。そして、だんだん死んでいくのを見るのはとても面白かった。だが、中学校になつてからはおもしろくなくなつてしまった。虫は何も言わない。泣かない。狂つたように動き回らない。

そんな時に目をつけたのは犬や猫だった。自分が飼っている犬にはしなかつたが、田舎で育ち、山も間近にあつたため、野良犬や野良猫を捕まえては、山でこっそり殺した。首を絞めて窒息死させたり、頭に石を落したりしたりした。大声で泣かない様に口は縛つた。泣かないのは残念だったが、痛そうにのたうちまわるのを見ると、おもしろかった。

しかし、それもやはり半年もするとあきてしまった。そして、ついに人に目を付けたのだ。

最初に人を殺したのは、中1の12月だった。路地裏に一人いた不良を殴り飛ばし、目をほじくり、耳を引きちぎり、殺した。あの時は快感しかなかった。そのあともこっさり殺しつづけ、「暗部」に目をつけられ、「暗部」に入った。

(・・・どうしようかな。アイツとの約束守りたいけど・・・我慢できるかな?)

隣では、西川がのんきに笑っていた。

一方通行の部屋では、部屋の主の一方通行と、隣の部屋の主、涼音と、なぜか垣根が居た。

もう無理だと分かっているけど、邪魔をしてやろうとついてきたのだ。削板は、「つかれたから寝る！」といい、走って帰ってしまった。

「・・・なァンでクソ野郎がオレの部屋に来るンだよ。帰れ」

「帰らね。なぜなら、オレにはお前ら二人の邪魔をするという重大な使命があるからだ！」

「うん。帰れ」

ビシッと、音が聞こえそうなポーズをする。キラキラ輝いている垣根に、一方通行は今、垣根に一番してほしいことを躊躇もなく言



う。しかし、そんなこと聞いているはずがないし、涼音は別に気にしていない。

逆に、賑やかになると言っただけ喜び、張り切って晩御飯を作っている始末だ。今も、台所から美味しそうな匂いが漂ってきている。

「あゝ・・・昏そうな匂いだなあゝ・・・いい嫁になるぜ!」

「そうかア?いつもこんなのだぜ」「

「お前、毎晩作ってもらってんのか?」

首を縦に振ると同時に、弁当も作ってもらっているという。朝はパ  
ンで済ませているから作ってもらってないということも。  
話をするうちに、垣根の顔が黒くなっていく。話し終わったと同時に、ため息をつき、壁にもたれ、ボソツとつぶやく。

「この・・・クソリア充が・・・」

「なんかいいましたかア?垣根くウン?」

「べつに?」

(ぜってエ嘘だ)

「あらあら、二人とも仲良しね」

お鍋を机の上に置く。直ぐに垣根は箸を持ち、食べようと手を伸ばす。すると、涼音がその手をぺしっと叩く。

「ダメよ。ちゃんといただきますをしないと」

「・・・お前もやってんのか？」

「やってるにきまつてんだろ。やらなかったら食べねえんだぞ」

（厳しいな）

（礼儀正しく食べないと注意されるぞ）

「あらあら。帝督。お箸の持ち方間違ってるわよ」

「あつ、まじ？」

早速注意される。涼音の持ち方を見て、きちんと持ち直す。その時、「ん？」と、先ほどの言葉を思い出す。

「なあ、今「帝督」って言った？」

「ああ、気づいた？」

ほんわか空気を出しながら、ニコニコ笑い続ける。

「今まで苗字で呼んでたでしょ？でもね。やっぱり大切な親友だから名前で呼ぼうと思って。・・・駄目？」

不安そうな顔で自分の顔を見てくる。安心させようと、垣根は二カツと笑う。

「いや、いいぜ。絶対にほかのみんなも喜ぶぜ」

「本当！？よかったわ。それじゃあ食べましょう」

そういい、パクパクと食べ始める。二人も食べようと手を伸ばし始めるが、垣根が耳打ちをしてきた。

「ああ、そういやなあ。西川はまだあきらめていないみたいだぜ」

「マジかよ」

「ほら、アイツ馬鹿だから」

「ああ、頭可哀そうな奴だからなあ」

「？」

涼音だけは意味が分かっておらず、ただ美味しそうにお鍋を食べて

いた。

そのあとも、一方通行と垣根が軽く喧嘩をしながら食べた。後から、横の人から苦情がきたが、3人はずっと笑っていた。

大覇星祭、二日目。もうすでに一方通行達がでる競技は終わってしまった。なので、午後がまるまる開いてしまったので暇なのだ。ベンチに座り、何をしようか考える。

「・・・暇ね・・・」

「暇だなア・・・ゲーセンにでも行くかア？」

「おっ、いいなそれ」

ゲーセンならば遊んでいるうちにかなり時間が過ぎる。ここ、学園都市には不良が沢山いる。学生などたくさんいる。その中に混ざれば店員などに注意などされない。いつも、パーフェクトでないと、絶対に帰らない麦野は大川と一緒にどこか行ってしまった。なので、今日は好きな時間に帰れる。

「昨日から、大川と麦野さんと一緒におるなあ。仲いいなあ」

「そうだな。二人で買い物か。楽しそうだな」

お気楽に二人は笑うが、垣根と一方通行は大川が「闇」の人間だと薄々気づいていた。

いつも無表情なあの顔が、時々殺人者のような目になるのだ。そんな目をするものが、「表」の人間のはずがない。おそらく、麦野はそれについて二人だけで話をしようとしているのだ。

（・・・西川は全然気づいてねえな・・・内緒にしてやがるのか）

涼音、削板と一緒に微笑む西川を見る。見る限り、大川と西川の関係は幼馴染みたいなものだろう。幼馴染が少しも気づいていないのだ。大川は上手い言い訳を言っでは人を殺しているのだろう。

（後は麦野に任せるか。やっぱりこオいう時には女同士がいいのかア）

いまいち女子の心が分からない一方通行は麦野にすべて任せることにした。

麦野と大川は裏通りのかなり深くまでいた。「闇」の人間以外は絶対に来ないようなところまで。

もし、大川がかなりのサディズムならば、大量の人を殺しているに違いない。以前の麦野なら、「闇」の人間が近くにいたところで少しも気につけない。だが、涼音の近くに自分の知らない「闇」の間を置き、涼音に危害が加わるのは嫌なのだ。だから、大川のことを徹底的に知り、涼音に害を及ぼすかどうか分かっておかないといけない。

もちろん、涼音に害を及ぼす人間ならば、二度と涼音に近づけさせない。

そこらへんにあった椅子に腰かけ、麦野は目の前で同じように椅子に腰かけている大川を見る。

西川を怒るときなどは表情は普通の人のようにコロコロ変わる。しかし、普段はまったくの無表情なのだ。その顔からは何も読み取れないので、直接聞くしか手がない。

先ほどから大川に殺気を向けているのだが、少しも表情を変えない。

闘うとなればかなりの強敵だろう。

「アンタ、何者なの？」

とりあえずそれを聞く。すると、大川の表情が変わり、ニンマリと笑う。その笑みを見て、麦野の背中に寒気が走る。

「あれえ？うちのことは調べたんとちゃうんか？やから今、話をしてんねやろ？」

にやにや笑いながらこっちを見てくる。その笑みを見ていると腹が立ってくる。こうやって相手に腹を立たせ、殴りかかってきたときに殺してきたのだろうか。とりあえず、何とか怒りをおさめ、質問を続ける。

「・・・そうよ、調べたわ。でも、それでも少ししか資料がなかった。・・・あんた、何者？」

そう聞くと、大川は口を開く。

「アンタが調べた通りや。でもまあ、違うのもあるかな？今はもう快樂殺人者やから。まあもつとも。もう殺してへんけどな」



「そつでしようね。「闇」を抜けたんだから」

「「闇」の仕事がめんどくなくなったからな。まあこれは嘘か」

「・・・私が聞くのもなんだけど・・・なんで「闇」なんかしたたの？」

すると、大川の顔が驚いた表情になる。「闇」の人間になぜ「闇」をしていたのか聞かれたのがとても驚いたらしい。直ぐにクスクス笑いだす。

「ふふふ・・・面白いこというなあアンタ。・・・なんで「闇」をしてるかねえ・・・」

膝を組み、顎をつく。

「そりゃ、生き物を殺すのが好きだから」

当たり前のように言う。

その言葉を聞いて麦野は確信する。「こいつは狂ってる」と。何も言わない麦野にかまわず、大川はペラペラしゃべりだす。

「私は小さい時からそつだったんだよね。道端にいる虫なんかを殺すことが。でも、厭きた。次に目を付けたのは野良犬と野良猫。それも厭きた。でっ、最後に目をつけたのが人間ってわけ。

最初に人を殺したのは中一の12月。路地裏に居た不良の顔のパ

ツを一つずつ素手で抉っていった。あの時は快感しかなかったなあ。  
・そのあともしばらく人を殺したよ。そしたらアレイスターに目  
をつけられてねえ、「闇」の仕事をしてみないかって、ね？それで  
も「闇」に入ったんだよ」

口調が変わっていることに気が付いたが、何もいわない。そんなこ  
とはどうでもいいからだ。一番大事なのは涼音に害を及ばすか及ば  
さないかだけ。

「でっ？アンタは涼音に何かしようとか思ってるわけ？もしそうな  
ら、今すぐ殺してあげる」

「おお恐い恐い。大丈夫。何もしようと思ってないよ。まあ、西川  
に涼音が何かしたら、分からないけど、ね」

「・・・それって、恋の勝負も？」

「ん？ああ、それは大丈夫。あれは西川の馬鹿が馬鹿なことやって  
るだけ。別にふったって何もしないよ」

そうは言われても、完全には信じない。これからも油断なく大川の  
行動を見た方がいいだろう。

それよりも、気になったのは西川を大事にしていることだ。いつも  
はあんなに殴ったり蹴ったりしているのに。

「ずいぶん大切なようね。好きなの？」

「それはありえない。絶対に。アイツが大事なものは、アイツは私の  
雄一の……」

麦野の目が大きく開かれる。言い終えた大川は、立ち上がると、何も  
も言わずにさらに深い路地裏の闇の中に消えて行った。

大覇星祭三日目。今日は競技が二つある。

チームで協力してゴールを目指す「迷いの迷路」と、大人数でする、「大縄跳び」だ。

「迷いの迷路」にでる大川、麦野、垣根、削板、そして、大川が大嫌いな、小川<sup>おがわ</sup> 百江<sup>ももえ</sup>だ。

当然、いつもは無表情な大川の顔が思いっきり嫌そうに歪んでいる。「そこまで嫌わなくても・・・」みんなはそう思ったが口には出さなかった。

「オホホホ！庶民ども。ワタクシとともにできることを誇りなさい！」

「・・・キモ」

人を見下し、庶民という小川に対して、いつものように毒を吐く。

しかし、聞いていない。高らかに笑っている。

「このカスがこんなアホな性格になったんは家のせいやねん。家がバリお金持ちでな、欲しいと言えば全部買ってくれる、我がままを言っても誰も怒ったりせえへん。やからこんな性格になつてなあ。友達の作り方もよう分かってへんねん。だからカスやねん」

「最後の一言はいらなと思うわよ」

こっそりみんなにそういうと、麦野がツッコむ。取り合えず、大川は涼音に危害をくわる気はないようなので、前と同じように接することにした。だが、もし危害を加えれば真っ二つにするつもりだ。

「おい。そろそろ並べねえと先公に怒られるぞ」

「根性で勝つぞー!!」

3人は二人のところまで走っていく。

「……これってさ……なんなの？」

「……オレにも分からねえよ……」

「……根性……」

どんな時でも笑っている削板の顔が引きつる。目の前に広がるのは巨大で、とても複雑な迷路。ところどころには何かを置いている。そう、ここが「迷いの迷路」をするためのステージだ。「迷いの迷路」とは、そのままの通りだが、途中でクイズやトラップなどが置いてある。このクイズに答えられなければ10分前に居たところに飛ばれ、トラップを乗り越えられなければ、どこかに飛ばされてしまう。

上からは見られない様に壁の高さは5mあり、もし肩車をしてみようとすれば失格となる。もちろん、地図はちゃんと渡される。しかし、途中で自分たちが居る場所を見失う可能性が高い。そのため、壁にはところどころにマークなどがかけられ、そのマークが地図にも書かれている。同じマークは一つもないので、マークを見れば自分たちがどこにいるのかわかるようになっていく。

参加者全員の顔が引きつっている中、スタートの合図がされる。

ここで立ち止まっても仕方がないので、仕方がないので5人は歩き出す。

しかし、10分後、参加者全員はもう迷っていた。

「迷いの迷路」のルールで、ペンなどは持つてはいけないし、持つていても使つてはいけない。地図に自分たちがどこを進んできたかをかけば簡単になってしまふからだ。

超能力者3人、大能力者1人、無能力者1人のチームも迷つて、目のマークを探していた。

「めんどくさいわねえ・・・！かといって壁を壊せば失格だし・・・。トラップ以外のところで能力を使うのも駄目だし・・・。相手も頭のいい大能力者レベルばかりが参加してるだろうし、まったく、めんどくさい競技に出ちゃったわね」

「とりあえずマークを探そう。そうじゃねえと永遠に出られねえぞ」

「はあ、これだから庶民は。仕方ないですわね。ここはこの小川百江様がマークを見つけて差し上げて・・・」

ポチッ

「「「「「」」」」」」

「・・・オホホホ・・・」

ごまかすように笑う、その時、後ろからゴゴゴゴ・・・という大きな音がしてきた。  
皆がゆっくり後ろを向くと、思った通り、大きな岩が転がってきていた。

「ああああああああああああああああああ！！！！？  
？？」

大川と小川が叫ぶ。しかし、超能力者たちは冷静だ。麦野が片手を出す。すると、手の先に光が現れる。

(あれは・・・マルチタウナー原子崩し！！)

分かったと同時に、高熱の光線が発射される。そして、大岩を跡形も無く溶かし、吹き飛ばした。

「ふん、この程度か・・・」

余裕そうに髪の毛を触る。しかし、お大川と小川はあまりのすごさに驚いていた。

レベル4の大川にしてみれば、レベル4とレベル5との間にはこん



なにも差があるのかと、レベル0の小川には、もう人間ではない様に見えた。

(・・・レベル5になりたい・・・でも・・・)

恐いのだ、「闇」の人間の、自分と同じ座標移動↑ポイントの能力を持ったやつ  
の失敗話を聞いてから、もしその人と同じことになれば・・・と  
それでも、レベル5になりたいと思い、何回もしようと思った、そ  
のたびに足がすくみ、できなかつた。

話を聞いたのはまだ自分を一回も飛ばしたことが無い時だったから、  
さらに恐い。

一大事な人(西川)を護りたい。そうは思っても恐くてレベル5に  
なれない。

今はもう、逃げて、目を背けて、嫌で。

(そうだ・・・最初に人を殺したのは・・・！)

今、理由を思い出す。ただ殺したかったからじゃない。何もできな  
い自分に苛立つて、八つ当たりしたかったからだ。逃げたかった、  
現実から。

「?どうしたんだ?大川」

冷や汗を流す自分に、優しい顔をして、削板が尋ねてくる。嫌なことを考えるのはやめて、大川は元気そうな笑顔で「なんでもない」と言って立ち上がる。

「・・・オホホホ・・・ワタクシを護れたことを誇らしく思いなさい庶民ども！」

またもや偉そうに小川が言う。すると、麦野がキレた。

「アンタねえ・・・いい加減にしなさいよ」

「・・・なんですって？庶民がワタクシにくちごた」

「いい加減にしろっつってんだよおおおおお！！！！」

「！！！！」

怒った麦野を見て、小川は腰を抜かし、地面に座る。

彼女には分からなかった。なぜ怒られたのかが。いつものように言っただけだ。なのに、なぜ目の前の女は怒ったのだろうか？まったく分からない。

「テメエのワガママがいつでも通るとでも思ってたんじゃないぞ！もしいつもそんなこと言っても周りのクソ野郎どもが笑ってるだけなら、そいつらはテメエを金づるとしか思ってたねえぞお！？」

「テメエに本当の友達なんか一人もいねえんだよ!!」

「……………うるさい……………」

小さい声でそういい、下を向く。開始からまだ15分ほどしかたっていない。なのに、このままでは直ぐに仲間われが出来てしまう。

「……………とりあえずいじりませ」

垣根がそういうと、皆は黙ってついていく。

西川は今、一方通行と戦っていた。

「涼音さんはツンデレやから！ホントはオレに惚れてんのや！」

「アア」！？ふざけたことぬかしてンじゃねエぞ三下ア！！いい加減認めやがれ！！」

「いやや！...！」

「諦め悪いなオマエ！」

「あらあら。二人とも仲良しね。」

「仲良しじゃない」とちやう（！...！」

「え〜？」

首をかしげる。その間にも、二人の口喧嘩は止まらない。先ほどから周りの人が変な目で見てくるが、3人は気にしない。

(だいたい、コイツが原因なんだよなア・・・)

垣根は、涼音が一方通行に惚れていることが分かって、手を引いた。問題は西川だった。

西川は垣根みたいに諦めがよくなかったのだ。そのせいで、涼音と二人でデートもどきをしようと思ったのだが、ここで西川がくいつき、割り込んできた。自分が涼音さんと一緒にいると。

そこで一方通行が怒った。邪魔をするなど。そこから喧嘩が始まったのだ。

「だいたいテメエも分かってんだろオが！！涼音が好きなヤツを！」

「そんなもんわかってるわ！でも諦めへん！大川に、「好きなもんの諦めの悪さは宇宙一じゃねえの？」とか言われたくらいや！」

「どんなけ諦め悪いンだよテメエは！ガキか！！」

「いつまでも少年の心を持つのはいいことや！」

「心も体もガキだがなア」

「！！オレの身長見て言っただやろ！？言っただやろ！！！！！！160・2センチをなめんなよ！？」

「ハハハッオレ、168センチだし。お前とは7、8センチ差があるし」

「きiiiiiiiiiiiiiiiiっ!!」

「あらあら、漫才かしら？あら？このアクセサリー綺麗ね」

喧嘩をしている二人を置いて、涼音はフラフラとどこかにいつてしまふ。そんな涼音に気付かず、二人は喧嘩を続ける。やっと気づいた時には、すでに涼音の姿はどこにも無かった。

フラフラとどこかに行ってしまった涼音の腕には、たくさんの食材が入っていた。途中で食材を撃っているお店を見つけ、家にもうあまり食べ物がないことを思い出し、買ったのだ。

「・・・あらあ？二人はどこかしら？」

ここでやっと、二人が居ないことに気付く。周りを見渡すが、あの目立つ白い姿が見当たらない。もしかして、帰ってしまったのかと、家に向かう。その途中、自分の顔によく似た二人を見つけた。涼音の父親と母親だ。

「まあまあ、涼音じゃないの？」

あちらも自分の姿を見つけ、近寄ってくる。

「またあったね。あつ、そうだ！今日、お友達をよんでバーベキューをしないか？」

今思いついた案を、口に出す。聞いた涼音の顔は明るくなる。

「おもしろそうね。やりましょ？」

「まあまあ、本当ね。じゃあ、私達が買い出しに行くから涼音

は友達を呼んでくれるかしら？」

「まかせて」

母子のほんわかとした雰囲気は周りにただよう。近くにいる人たちの心が、不思議と落ち着いてくる。

少しだけ話をした後、涼音は携帯電話を持っていることに気が付き、一方通行に電話をした。すると、すぐに電話にでた。こちらが喋る前に喋り始める。

『涼音エ！オマエどこにインだよ！探してンだぞ！？』

「あらあら、ごめんなさいね」

謝ってから、先ほどのことを伝える。すると、一方通行の楽しそうな声が聞こえた。

『面白そうじゃねエか。今日は皆で盛り上がるっぜ』

「ふふふ、じゃあ、帝督達にも競技が終わったら伝えるわ。じやあね」

何やら、後ろで西川が喚いているが、気にせずに切った。また喧嘩をしそうだったからだ。

食材の入った袋を持ち、涼音は鼻歌を歌いながら自分の寮に向かっ



た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2680v/>

---

とあるのんきな炎女王（フレイムクイーン）

2011年12月24日10時48分発行